

茨城県石岡市

野田館跡

—農村交流基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査—

2013

茨 城 県
石 岡 市 教 育 委 員 会
関東文化財振興会株式会社

茨城県石岡市

野田館跡

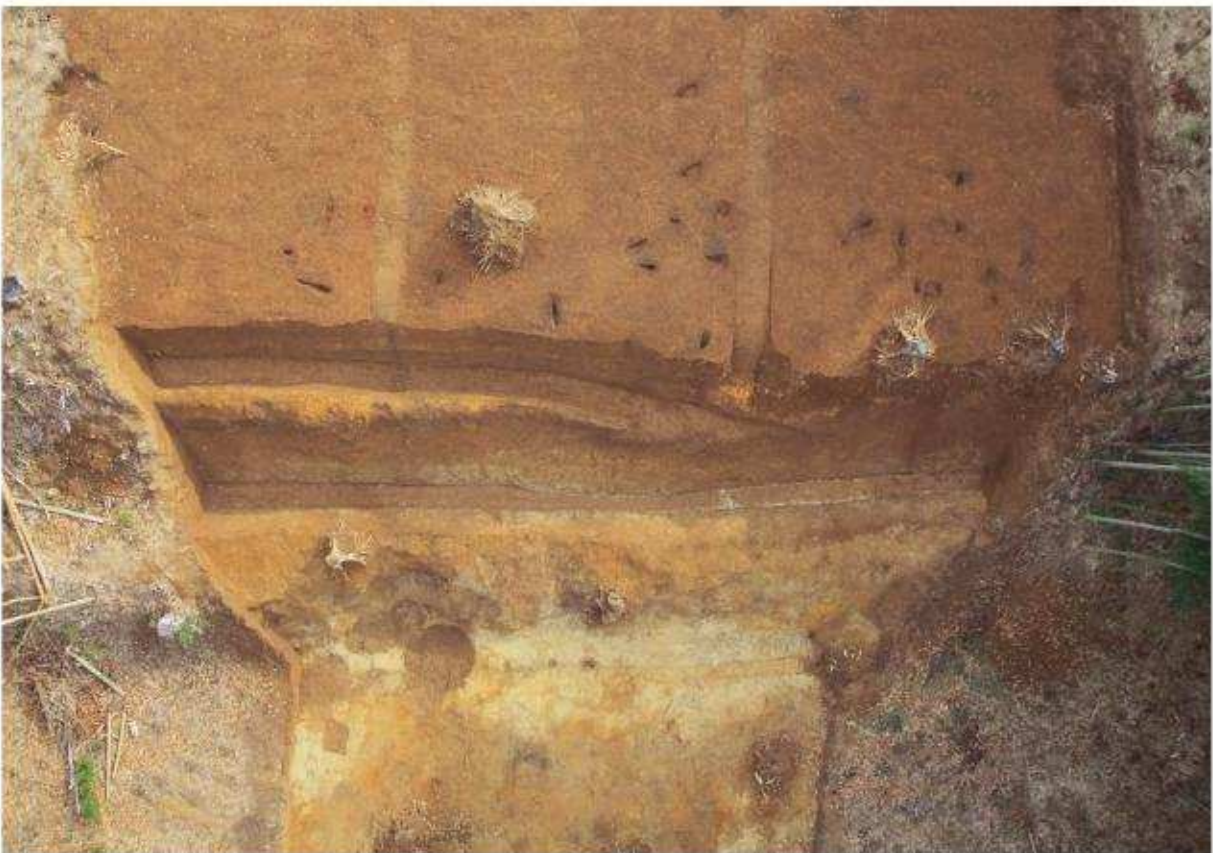
—農村交流基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査—

2013

茨 城 県
石 岡 市 教 育 委 員 会
関東文化財振興会株式会社



遺跡遠景（西から）



SD-01・02 曲輪Ⅱ遺構完掘状況

序

石岡市は、都心から北東へ約70km、茨城県のほぼ中央部に位置する人口約8万人の都市です。この約215平方キロメートルの市域内に実に400ヶ所近い遺跡が存在しています。これらは主に丸山古墳、舟塚山古墳、常陸国府跡、瓦塚など旧石器時代から近世までの数万年にわたる石岡の歴史を物語っているのです。

今回、本書で報告されます「野田館跡」は八郷地区瓦谷に存在する遺跡です。メインは中世の山城ですが縄文土器や古墳時代の住居跡も出土しておりいわゆる複合遺跡の様相を呈しています。従来、確認されていなかった瓦谷地区の歴史の一端を明らかにすることができたといえるでしょう。

本書が学術的な研究資料としてはもとより、石岡市の歴史に関する理解を深め、教育・文化の向上の一助として広く活用いただければ幸いです。また、これらの成果を公表するに当たりましては多くの方のご指導・ご助言をいただきました。心より感謝申し上げますとともに、石岡市としてもより一層の文化財の保護・保存・活用をはかってまいりますので、引き続きご鞭撻の程お願い申し上げます。

平成25年3月

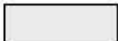




石岡市教育委員会

教育長 石橋 凱

例 言

- 1 本書は、農村交流基盤整備事業に伴う、茨城県石岡市に所在する野田館跡の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、石岡市教育委員会による試掘調査に基づいて、石岡市から委託契約を受けた関東文化財振興会株式会社が実施した。
- 3 発掘調査及び整理作業は、石岡市から委託契約を受けた関東文化財振興会株式会社が、石岡市教育委員会の指導のもとに実施した。
 - 遺跡所在地 石岡市瓦谷761-1ほか
 - 調査面積 2,590㎡
 - 調査期間 平成24年8月22日～平成24年11月29日
 - 整理期間 平成24年12月1日～平成25年3月15日
 - 調査指導 小杉山 大輔（石岡市教育委員会）、曾根 俊雄（石岡市教育委員会）
 - 調査担当 根本 康弘（関東文化財振興会株式会社）、小野 麻人（関東文化財振興会株式会社）
- 4 本書の編集は、石岡市教育委員会の指導を受け、根本が担当した。執筆は、以下のように分担・執筆した。
 - 第1章 曾根俊雄、根本康弘
 - 第2章 根本康弘、小野麻人
 - 第3章 根本康弘
 - 第4章 根本康弘
 - 第5章 根本康弘、小野麻人
 - 第6章 根本康弘、小野麻人
- 5 本調査における出土遺物・実測図及び写真等は、石岡市教育委員会が保管している。
- 6 調査及び本報告書の作成にあたり、次の方々からご指導・ご協力を賜った。ここに記して感謝の意を表する次第である。（敬称略）
 - 茨城県教育庁文化課 川口武彦（水戸市教育委員会）
 - 鈴木 洋一（隣接地地権者）（有）カワヒロ産業
- 7 調査参加者（50音順、敬称略）
 - （発掘調査） 青木 毅彦、飯田 昭、市毛 友則、大山 年明、小坂部 克己、鬼沢 勲、木村 浩、佐久間 弘美、鈴木 潤一、高野 正行、高柳 悦子、藤倉 秋之助
 - （地形測量） 木村 浩
 - （整理作業） 青木 毅彦、市毛 友則、川又 恵美子、菊池 芳子、木村 浩、佐久間 淳子、田辺 伸子、中里 ひろみ、塗師 道子、益子 光江、村山 卓

凡 例

- 1 本書に記してある座標値は、世界測地系第Ⅸ系を用いている。方位は、座標北を示す。
- 2 本文中の色調表現は、『新版標準土色帖』2008年版（農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）を用いた。
- 3 標高は、海拔標高である。
- 4 住居跡の調査に際して、カマドを通るライン及びそれに直交するラインの2本のベルトを設定した。カマドに向かって右側かつ北寄りの区画を1区とし、以下時計回りに2～4区とした。土坑は、東西方向を軸に半割し、北側を1区、南側を2区とした。堀・溝は、適宜設けたベルトを境界として、北から1区・2区・・・とした。
- 5 掲載した図面の基本縮尺は、以下のとおりである。
遺構図 グリッド配置図（館跡全体コンタ図）1/400 調査区全体図1/400
住居跡・土坑跡・井戸跡・ピット1/60 堀跡1/150 溝跡1/60
なお、変則的な縮尺を用いた場合には、スケールによってその縮尺率を表した。
遺物図 土器・土製品1/3 石製品1/3 礫1/4
- 6 住居跡の遺物の採り上げに際して、主なものは現場で実測した。その際、採り上げた順番で番号を打ち、遺物観察表の「位置」欄に記載した。
- 7 掲載図中のスクリーン・トーン及び記号は、以下に示すとおりである。
遺構図  焼土  粘土  黒色処理  硬化面
 土塁
遺物出土状況図 ● 土器 ○ 土製品 ■ 石製品
- 8 実測図・本文中に用いた略記号は以下を示す。
SI：住居跡 SK：土坑 SD：堀・溝跡 SE：井戸跡 P：ピット
KP層：鹿沼バミス層 K：攪乱
- 9 遺物観察表の法量単位はcmである。法量に付した〔〕は復元値、（）は残存値を示す。
- 10 本遺跡の略号は、NDY-2012である。遺物の注記もこれにしたがっている。

本文目次

序		第4章 試掘調査と遺物	13
例言・凡例		第5章 検出された遺構と遺物	17
目次		第1節 概要	17
第1章 調査に至る経緯と調査経過	1	第2節 縄文時代	17
第1節 調査に至る経緯	1	第3節 古墳時代	17
第2節 調査経過	1	第4節 中世	28
第2章 遺跡の位置と環境	3	第5節 中世以降	50
第1節 地理的環境	3	第6章 総括	51
第2節 歴史的環境	3	第1節 古墳時代	51
第3節 野田館跡の立地と構造	5	第2節 中・近世	51
第4節 野田館主小松氏について	8	参考文献	
第3章 調査の方法と標準堆積土層	11	写真図版	
第1節 調査の方法	11	報告書抄録	
第2節 標準堆積土層	11		

挿図目次

第1図 周辺遺跡位置図	4	第23図 SD-03出土遺物(2)	33
第2図 南北野田館跡と周辺	8	第24図 SD-04・出土遺物(1)	34
第3図 旧八郷町域の中世城館	9	第25図 SD-04出土遺物(2)	35
第4図 雲照寺の小松氏墓所	10	第26図 SE-01・出土遺物(1)	36
第5図 標準堆積土層	12	第27図 SE-01出土遺物(2)	37
第6図 試掘トレンチ位置図	13	第28図 SK-03・04	37
第7図 試掘トレンチ出土遺物	14	第29図 曲輪Ⅰ出土遺物	38
第8図 調査区全体図	15・16	第30図 曲輪Ⅱ盛土コンタ図	39
第9図 縄文土器実測図	17	第31図 曲輪Ⅱ盛土土層	40
第10図 SI-01	18	第32図 曲輪Ⅱ出土遺物(1)	41
第11図 SI-01カマド・出土遺物(1)	19	第33図 曲輪Ⅱ出土遺物(2)	42
第12図 SI-01出土遺物(2)	20	第34図 曲輪Ⅱ出土遺物(3)	43
第13図 SI-01出土遺物(3)	21	第35図 曲輪Ⅲ出土遺物	44
第14図 SI-02	23	第36図 曲輪Ⅰ・Ⅱ間斜面出土遺物	45
第15図 SI-02カマド・出土遺物(1)	24	第37図 P-01～07	47
第16図 SI-02出土遺物(2)	25	第38図 SK-01	50
第17図 SI-02出土遺物(3)	26	第39図 遺構外出土遺物	50
第18図 SI-02出土遺物(4)	27	第40図 曲輪Ⅰより西方の猿壁城を望む	53
第19図 SD-01・02	29	附図 野田館(南館)跡測量図	
第20図 SD-01・02土層	30		
第21図 SD-01・02出土遺物	31		
第22図 SD-03・出土遺物(1)	32		

表目次

第1表	周辺遺跡一覧表……………5	第12表	SE-01出土遺物観察表……………37
第2表	石岡市八郷地区の城館と城主……………10	第13表	中世土坑一覧表……………38
第3表	試掘調査出土遺物観察表……………14	第14表	曲輪Ⅰ出土遺物観察表……………38
第4表	野田館跡検出遺構一覧表……………17	第15表	曲輪Ⅱ出土遺物観察表……………43
第5表	縄文時代出土遺物観察表……………17	第16表	曲輪Ⅲ出土遺物観察表……………44
第6表	SI-01出土遺物観察表……………22	第17表	曲輪Ⅰ・Ⅱ間斜面出土遺物観察表……………46
第7表	SI-02出土遺物観察表……………27	第18表	ピット一覧表……………46
第8表	SD-01出土遺物観察表……………31	第19表	中世以降土坑一覧表……………50
第9表	SD-02出土遺物観察表……………31	第20表	遺構外出土遺物観察表……………50
第10表	SD-03出土遺物観察表……………31	第21表	永祿年間頃の政治情勢……………54
第11表	SD-04出土遺物観察表……………36		

図版目次

P L 1	土塁土層断面 土塁表土除去後状況	P L 6	SI-01完掘状況 SI-01土層断面 SI-01遺物出土状況 SI-01祭祀遺物出土状況
P L 2	SD-01・02完掘状況（北から） SD-01・02土層断面（A～A'）	P L 7	SI-02完掘状況 SI-02遺物出土状況 SI-02遺物出土状況 作業風景
P L 3	曲輪Ⅱ盛土土層断面（A～A'） 曲輪Ⅱ盛土土層断面（B～B'）	P L 8	試掘出土遺物・縄文土器・SI-01出土遺物
P L 4	調査前風景（西から） 調査前風景（東から） 曲輪Ⅱ完掘状況 曲輪Ⅱ東端遺構完掘状況 曲輪Ⅰ・Ⅱ間斜面表土除去後状況 SD-01・02完掘状況（南から） SD-02土層断面（B～B'） SD-02土層断面（C～C'）	P L 9	SI-01出土遺物
P L 5	SD-01・02出土遺物	P L 10	SI-01・02出土遺物
	SD-03・P-01～05完掘状況 SD-04・P-06完掘状況 SE-01完掘状況 SK-03完掘状況 SK-04完掘状況 SD-04礫出土状況 曲輪Ⅱ西端盛土加工礫出土状況 P-07完掘状況	P L 11	SI-02出土遺物
		P L 12	SI-02、SD-01・02・03出土遺物
		P L 13	SD-03・04出土遺物
		P L 14	SD-04、SE-01、曲輪Ⅰ・Ⅱ出土遺物
		P L 15	曲輪Ⅱ、曲輪Ⅲ、曲輪Ⅰ・Ⅱ間斜面出土遺物
		P L 16	曲輪Ⅰ・Ⅱ間斜面出土遺物・表採遺物

第1章 調査に至る経緯と調査経過

第1節 調査に至る経緯

平成22年10月27日、茨城県県南農林事務所より農村交流基盤整備事業（八郷中央2期地区）に伴い「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」照会文書が石岡市教育委員会に提出された。照会地には周知の埋蔵文化財包蔵地は存在しなかったが、市教育委員会が現地踏査を行ったところ、遺物の散布が認められるほか、土塁状の遺構が認められ、城館などの遺跡の存在する可能性があることから、試掘調査が必要な旨を平成23年6月15日付で回答した。

試掘調査は、平成23年11月16日～24日に実施した。その結果、中世の城館に伴うと考えられる土塁や整地面を確認した。調査地の周辺には「野田館跡」の存在が推定されていたため、この遺構を「野田館跡」に伴うものと判断し、「野田館跡」の「埋蔵文化財包蔵地調査カードの更新」を平成23年12月8日付で茨城県教育委員会に依頼した。

その後、県南農林事務所が平成24年4月16日付で県教育委員会に「埋蔵文化財発掘の通知」を提出し、平成24年5月14日付で県教育委員会から工事着手前に発掘調査を実施するように通知があった。

これらを受け、野田館跡の2,590㎡について、関東文化財振興会株式会社に委託し、発掘調査を実施することとなった。

(曾根)

第2節 調査経過

野田館跡の調査経過について、以下に簡単に記述する。

8月

上旬 機材整備・確認等の調査準備に入った。

7日 教育委員会を訪問して簡単な打ち合わせを行った。教育委員会の指示により、地元区長宅を訪問して、発掘調査開始の挨拶をするとともに、文書を持参して地域への回覧を依頼した。あわせて、近隣の地権者への挨拶をすませた。

8日 看板設置、排土置き場の草刈等を進めた。

9日 調査範囲の周囲を囲む杭打ちやネット設置を進めた。

20日 館跡の地形測量に着手した。館跡全体の地形測量が目的であったが、調査を進める都合上、調査範囲内の測量を先行させることとした。

22日 重機による表土除去を開始した。竹の根が著しく、作業が難航した。館跡の状況を把握するため、トレンチを設定して、表土除去とあわせて掘削を進めた。

29日 調査範囲以外の部分の地形測量に取り掛かるため、作業員を投入して必要な部分の草刈と清掃を始めた。

9月

10日 表土除去が終了したので、トレンチの清掃を開始した。

12日 曲輪Ⅰと曲輪Ⅱの間の斜面の中段にある犬走りと考えられていた平坦面が、埋没した堀跡であることが明らかになった。調査の進め方について、教育委員会と打ち合わせて、堀跡の掘削に重機を投入することとした。

24日 トレンチの土層断面の写真撮影・実測を行い、終了とともにベルトの除去を開始した。

10月

4日 堀跡の掘削を開始した。降雨後の堀跡掘削は危険なので、土砂の状態を見て作業を進めることとした。

15日 降雨日が多く、堀跡の掘削ができないため、曲輪Ⅰの遺構調査を進めることとして、住居跡の掘り込みを開始した。

22日 SI-01の出土遺物の一部が、祭祀に伴うものであることが明らかになった。

31日 地形測量と住居跡の調査が終了した。

11月

2日 堀跡の掘削が終了した。

13日 遺構の調査がほぼ終了し、補足調査を進めた。

20日 調査範囲の空撮を実施した。

28日 調査機材等の撤収作業を開始した。

29日 補足調査が終了した。

30日 石岡市教育委員会による野田館跡発掘調査の終了確認が行われた。この日に、2回目の空撮を実施した。空撮終了後に、地元区長、近隣の地権者や発掘調査への協力者へ挨拶して、現場からの撤収作業を完了した。

(根本)



重機による表土除去



地形測量のための草刈



地形測量



住居跡調査

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

野田館跡は、JR常磐線石岡駅の北西約10km、茨城県石岡市瓦谷761-1外に所在している。

石岡市は、茨城県のほぼ中央に位置している。市の南東側には霞ヶ浦が広がり、南西側には筑波山が聳えている。石岡市域は、南東側を旧石岡市、北西側を旧八郷町が占めている。筑波山から分岐した山々が北と東へ延びて旧八郷町域をとり囲んでおり、石岡市の地形は平坦な台地を中心とする旧石岡市と盆地状の旧八郷町(八郷盆地、柿岡盆地とも)という対照的な地形となっている。その盆地内の水を集めて恋瀬川が南流し、石岡市街地の南方を東流して霞ヶ浦に注いでいる。盆地内の台地は恋瀬川によって樹枝状に解析され、起伏に富む地形が形成されている。台地と低地との間はやや急峻な斜面となっており、中世にはその地形を利用して多くの城館が築かれた。

(根本)

第2節 歴史的環境

ここでは、各時代の遺跡について、旧八郷町域を中心に概観する。

旧石器時代の遺跡は、半田原遺跡(1)がある。半田原遺跡は、今から22000年以上前に噴出した始良テフラよりも下位の層から石器と薄片が出土している。薄片が多いことから、石器製作跡と考えられている。

縄文時代の遺跡は数も増大し、早期には前述した半田原遺跡、前期には諸磯・浮島式期の住居跡が32軒確認された旧石岡市域の外山遺跡、中期では阿玉台式土器や加曾利E式土器が多数出土した猪内遺跡(2)があり、そのほかにも矢切遺跡(3)等でこの時期の土器が採集されている。猪内遺跡と矢切遺跡では、縄文時代後期の土器も確認されている。

弥生時代の遺跡は少ないものの、中山遺跡(4)や息栖遺跡(5)等が恋瀬川に近い台地縁辺部に確認されている。

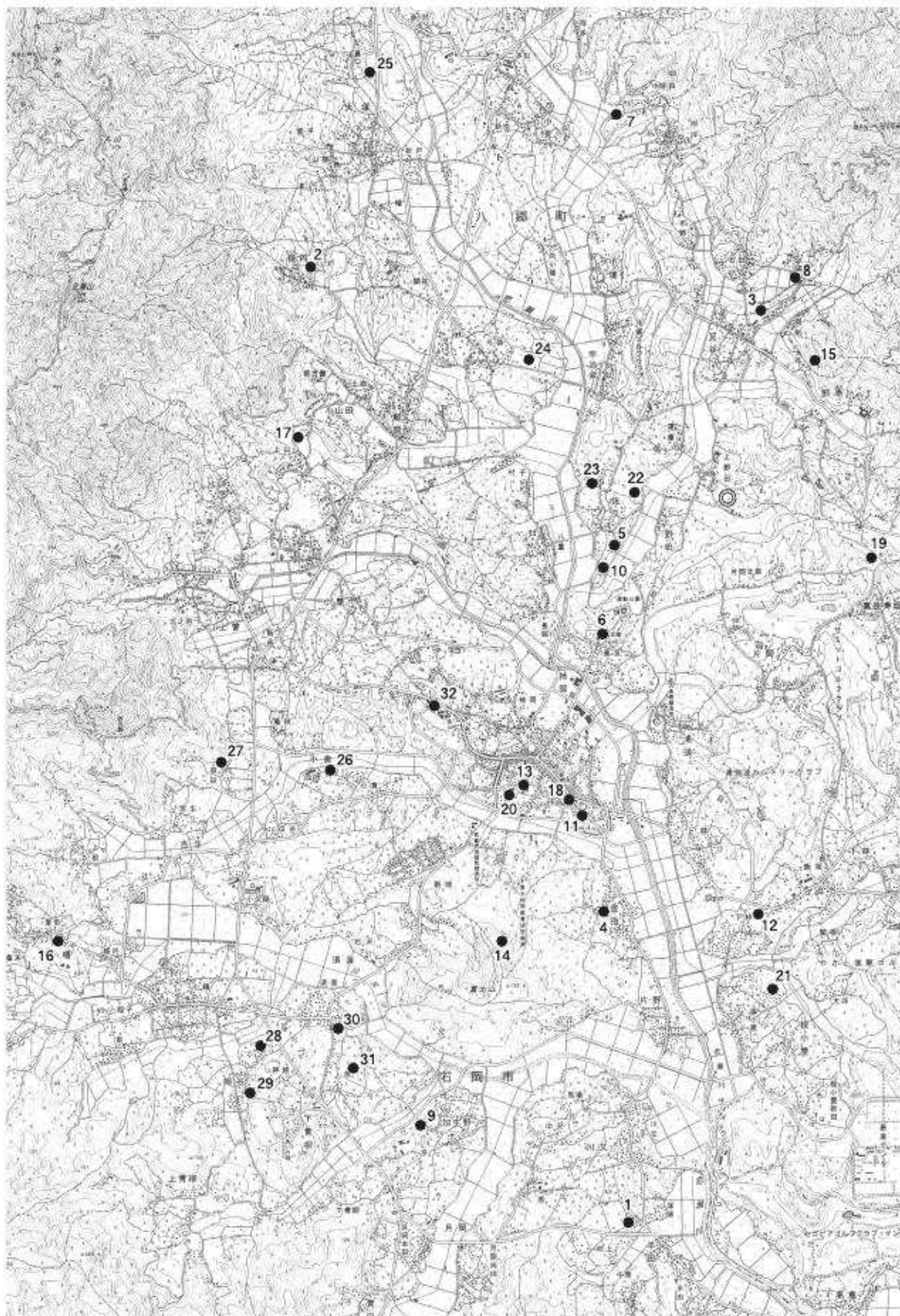
古墳時代に入ると、多くの古墳が築かれるようになった。本県の初期古墳と考えられている丸山古墳(前方後方墳・全長約55m)を中心とする丸山古墳群(6)、中戸古墳群(7)、瓦谷古墳群(8)、加生野古墳群(9)等がある。その他にも、やはり初期古墳と考えられている佐自塚古墳(前方後円墳・全長約58m)(10)等が築かれている。集落跡では、広範囲に遺物の散布が見られる中道遺跡(11)、住居跡が確認された宿畑遺跡(12)、多くの土器が出土した柿岡・館遺跡(13)等がある。

奈良・平安時代は、旧八郷町域は茨城郡に属し、関連が深い郷には夷針・山前・大幡・拝師・小見・田籠の6郷があった。野田館跡の付近は、新編常陸国誌ではこの中の小見郷に比定しており、八郷町史では山前郷に比定している。

この時代の遺跡は、恋瀬川流域の台地上を中心に分布している。調査例は少なく、半田原遺跡と宿畑遺跡だけである。他の遺跡では、蔵骨器が出土した新地遺跡(14)や常陸国府に瓦を供給した瓦塚瓦窯跡(15)等がある。

そのほかでは、筑波山東麓に山王台廃寺跡(16)や水上廃寺跡(17)がある。

律令制の衰退に伴って、この地域でも在地領主が台頭し、承平・天慶の乱の頃になると旧八郷町域は北郡と呼ばれるようになる。



第1図 周辺遺跡位置図 1:50,000 (国土地理院25,000分の1地形図「柿岡」・「加波山」を縮小・加筆)

中・近世の遺跡では、城館跡が代表的なものであるが、その他にも下宿火葬墓跡（18）、親鸞の法難の地として知られる板敷山の大覚寺や大永3（1523）年の銘の経筒が収められていた嘉良寿理経塚（19）等があり、半田原遺跡では江戸期の墓域等が確認されている。城館跡では、旧八郷町域では27か所を数える。そのうち八田知家の子八田時知が築いた柿岡城跡（20）や八代奨監が築いた片野城跡（21）を除く25か所は中世の城館で、江戸時代には消滅する。これらの城館は八田氏が台頭した頃（13世紀）に起源を持つと伝わるものも多い。さらに、戦国期の勢力地図の変化に伴って、小田氏や佐竹氏等との関係も伝えられている。小田氏との攻防に勝ってこの地を支配した佐竹氏の転封後、江戸期になるとこの地域では頻りに領主が交代した。なお、当地域の中世城館については第4節でも触れる。

（根本）

第1表 周辺遺跡一覧表（◎ 当遺跡）

No.	遺跡名	時期	No.	遺跡名	時期
1	半田原遺跡	旧石器～近世	17	水上庵寺跡	奈良・平安
2	猪内遺跡	縄文	18	下宿火葬墓跡	奈良・平安
3	矢切遺跡	縄文	19	嘉良寿里経塚跡	中世
4	中山遺跡	弥生	20	柿岡城跡	中・近世
5	息栖遺跡	弥生～奈良・平安	21	片野城跡	中・近世
6	丸山古墳群	古墳	22	佐久松山遺跡	奈良・平安
7	中戸古墳群	古墳	23	佐久上ノ内遺跡	縄文・古墳～奈良・平安
8	瓦谷古墳群	古墳	24	備中遺跡	古墳～奈良・平安
9	加生野古墳群	古墳	25	十日橋遺跡	縄文
10	佐自塚古墳	古墳	26	小倉古墳群	古墳
11	中道遺跡	古墳～奈良・平安	27	宮下遺跡	古墳～奈良・平安
12	宿畑遺跡	縄文・奈良・平安	28	細谷古墳群	古墳
13	柿岡・館遺跡	古墳	29	御申塚古墳群	古墳
14	新地遺跡	奈良・平安	30	阿弥陀久保古墳群	古墳
15	瓦塚瓦窯跡	奈良・平安	31	原表古墳群	古墳
16	山王台庵寺跡	奈良・平安	32	八郷高校内遺跡	縄文

第3節 野田館跡の立地と構造（第2～4図、附図、第2表）

野田館跡は、難台山から南に延びる台地が、西方で上野田の集落に突き出した標高44mほどの台地突端部に位置する。尾根続きの東方を除く三方向を、現在陸田・水田として利用されている谷津に囲まれている。水田面との比高差は主郭部分で15m前後である。城館跡は、西や南の山裾が後世に一部改変されているものの、概ね良好な保存状態である。

館跡は、東から西に高低差をつけて大きく3つに並ぶ郭で構成されている。主郭は、東側の最高所に位置する曲輪Ⅰと考えられ、東西65m、南北45mの長方形を呈し、西端に残存長30m余、幅3～4m、高さ1mほどの低い土塁を築き、その下の斜面に切岸と横堀を構築している。北西部と南側に櫓台が築かれており、塁壁に取りつく敵に対する横矢掛かりと、周囲の警戒を意図した嚴重な構えである。特に南側の櫓台は、直下の道路

面からの高さ10mを測り威容を誇る。しかし、曲輪Ⅰは、この櫓台以東は北側の一部を除き三方向は緩斜面のままに防御施設に乏しい。内部については、やや北寄りに位置する最高所の標高44m付近が40m四方ほどにやや平坦に造成されている他は、比高2mほどで大きく北から南に緩やかに傾斜する自然に近い地形である。

虎口は、南西隅にある現在の登り口と同じ一画と思われるが、近年の重機の進入などによる改変を被っており現状からの判断は困難である。しかし、西から上る道が一度北側に折れてから郭内に入り、おそらくこの突き当たりには土塁が設けられていたと思われ、わずかな土盛りが確認できる。この土塁と、曲輪Ⅰ西側土塁上の土塁とに挟まれて内部に入る構造であったと思われる。

曲輪Ⅰの西側に位置する曲輪Ⅱは、東西30m、南北55mの方形を呈し、南に高さ2.5～3m、幅10mの土塁を設けている。西側にも土塁の存在があったと推定されるが、北東端を除き殆ど残っていない。曲輪Ⅰとの比高は5～6mである。南側土塁の規模は大きく、その西端は櫓台状になっている。なお、この土塁を詳細に観察すると、北から幅5～7mの土塁、現況僅かに窪地が認められる埋没した東西方向の空堀、幅2mほどのテラス、高さ1.5mほどの急斜面で構成されており、二重土塁のような構造であった可能性もある。この曲輪は、元来西向きの緩斜面であった地形を、最大深さ4mにわたって削り取って平坦面が構築されており、現状で標高が35.5から36.5mと、城館内では最も平坦な地形である。

虎口は、南西隅にある一画と思われるが、近年の重機の進入などによる改変を被っており現状からの判断は困難である。地形図上からは、小規模な枡形状の構造が窺われ、曲輪Ⅰ同様、現在は直進できる西から上る道が一度障壁に当たり、北側に折れてから郭内に入る構造を取っていたと考えられる。

曲輪Ⅲは曲輪Ⅱの西側に位置し、東西30m、南北45mを測る。曲輪Ⅱとの比高は3m、低地との比高は3mである。南側に残存長20m、高さ2m、幅4～5mの土塁が築かれているが、その西端は削られており、この付近に存在したと思われる虎口の形状は不明となってしまった。

また、低地に面した西側には現状で土塁の痕跡は確認できないが、北西端付近は、切岸状を思わせる地形が残存している。

曲輪内は中央部の大半と南側の一部が後年の土取りにより大きく削られている。残存部から判断すると、西に傾斜する自然地形に近い緩斜面であったと思われ、曲輪Ⅰ同様平坦面の構築を強く意図していた様子はいかがえない。

曲輪Ⅰの北側には、曲輪Ⅱより延びる帯曲輪が続くが、両者の間は塹堀と土塁で区画されている。塹堀から東方の帯曲輪は、東端付近において削平が不十分で未完の様相を呈している。直進を阻むためか櫓台直下でクラックして上るこの塹堀は、上幅4m、深さ1.5m前後を測り、南に進んで曲輪Ⅰ西側の切岸中段にある腰曲輪状の犬走りに連結している。今回、この犬走りから完全に埋没した堀SD-02が発見されたことにより、塹堀と連結している可能性が高くなった。またこの塹堀は、開口方向からみて、北の対岸に位置する小松氏の野田館との連絡通路としての利用も想定される。曲輪Ⅱの南側にも腰曲輪が構築されている。そしてこれらの南北の帯、腰曲輪と低地部分との間は、それぞれ垂直に近い高さ5mほどの急傾斜の切岸となっている。なお、南側の切岸下にも道路に沿って50～70cmほど高い腰曲輪状の地形があるが、防御の観点からみてやや不審であるため、城館の範囲に含められるかどうかは、検討を要する。

このように概観すると、櫓台による横矢掛かりや二重土塁、横堀など、戦国中末期の所産と思われる技巧的な防御構造を取り、また曲輪Ⅰ・Ⅲ内の平坦面造成の粗さや、曲輪Ⅰ周辺の防御施設の未完成あるいは省力化と思われる部分など、恒久的な居住性よりも、比較的短い時間軸での軍事的拠点としての機能を強く持つと評価される。また縄張りからは、尾根続きの東方よりも、低地に面した西側と南側を防御上の重点方向としてい

ることが看取され、当城館が築城された際の社会情勢を暗示している。

なお、南西600mに小松氏の菩提寺であったという寶珠院（現在廃寺）跡と推定される地が存在する（第2図・関2003）。

〔歴史〕

『八郷町の中世城館』によると、応永20年（1421）、上入野（城里町）小松寺より平時宗が分かれて築城。慶長年間（1596～1614）、9代盛光の時、北の瓦谷宿に居館を移して廃城となった。この伝承通りとするならば、小松（平）1氏9代およそ180年余の存続期間であった。

〔考察〕

『八郷町史』『岩間町史』などでは、八郷、岩間、出島付近の戦国期の在地築城技術の特徴として、単郭構造を基本とし、周囲の地形に影響を受けず全周に外土塁を伴う空堀を巡らせ、目立つ虎口構えを持たないとし、八郷では高友城、吉生城や権現山城などを挙げている。一方、複数の郭を連ねたり、技巧的な縄張りを持つものを「小田軍か、または佐竹軍などの外部軍事集団の強い影響力下か、または、外部軍事集団が直接造った可能性」を指摘し、片野城、数俵城などを類例としている（岩間町2002、八郷町2005）。

これらの例に鑑みると、野田館跡は外部軍事集団の影響力下に築城されたものと解釈できる一方、虎口を目立たないように設けているとも考えられることから、在地の技術も用いた折衷的な形式である可能性もある。

『八郷町の地名』によると、調査対象地周辺の小字名は「押堀」といい、「地形語としては、水害などの際に水没して水溜りになり易い処の意」であるという。また、「旧野田館の南側台地」を「カヤマ・茅山」としている。「農家の茅屋根の材料としての茅山が多いことからの地名か」としており、さらに低地及び今回の調査対象地である台地部分を「上流に溜池などがあることから、地形語でいう沼地・湿地などの意か」とし「狸山」「狸山後」としている。このように地名からは城館などの伝承は確認できず、『八郷町の中世城館』でも、当地は城館跡として触れられていない。なお、江戸時代より当地に住むという地権者を始め、地元の人々の間では、瓦谷定光寺（臨済宗妙心寺派・延文元年（1356）広円明鑑開山）に関連した寺院跡との伝承があるという。

その一方で、谷津を挟んだ北側に位置する小松氏の野田館跡伝承地は、現行の上野田集落の最高所に位置し、同地に立つ下三郷公民館の脇に東西方向に二重土塁と空堀が残存すること（註1）、南端にある墓地との間及び東側にも戦後まで土塁と空堀があったということ（註2）、居住に適した南向きの平坦面が存在していること、東方に小松氏の尊崇した日笠神社の元宮とされる祠が存在すること（註3）などから、伝承や地形からみても恒常的な居住空間としてはむしろこちらが妥当と思われる（第2図・註4）。今回調査された「野田館跡」は、規模構造や立地からみても、これとは別の城館としてとらえるべきと思われる。ただし、両者間は直線で100mというまさに指呼の距離であり、伝承も含めた存続期間からしても互いに無関係であったとは思われず、むしろ密接な関係を有していたと考えられる。本報告書においては、両者の区別をつけ易くする意味から、立地の面から旧来の小松氏の野田館跡を「野田北館」、今回発掘調査がなされた城館跡を「野田館（南館）」と呼称することとする。

（小野）

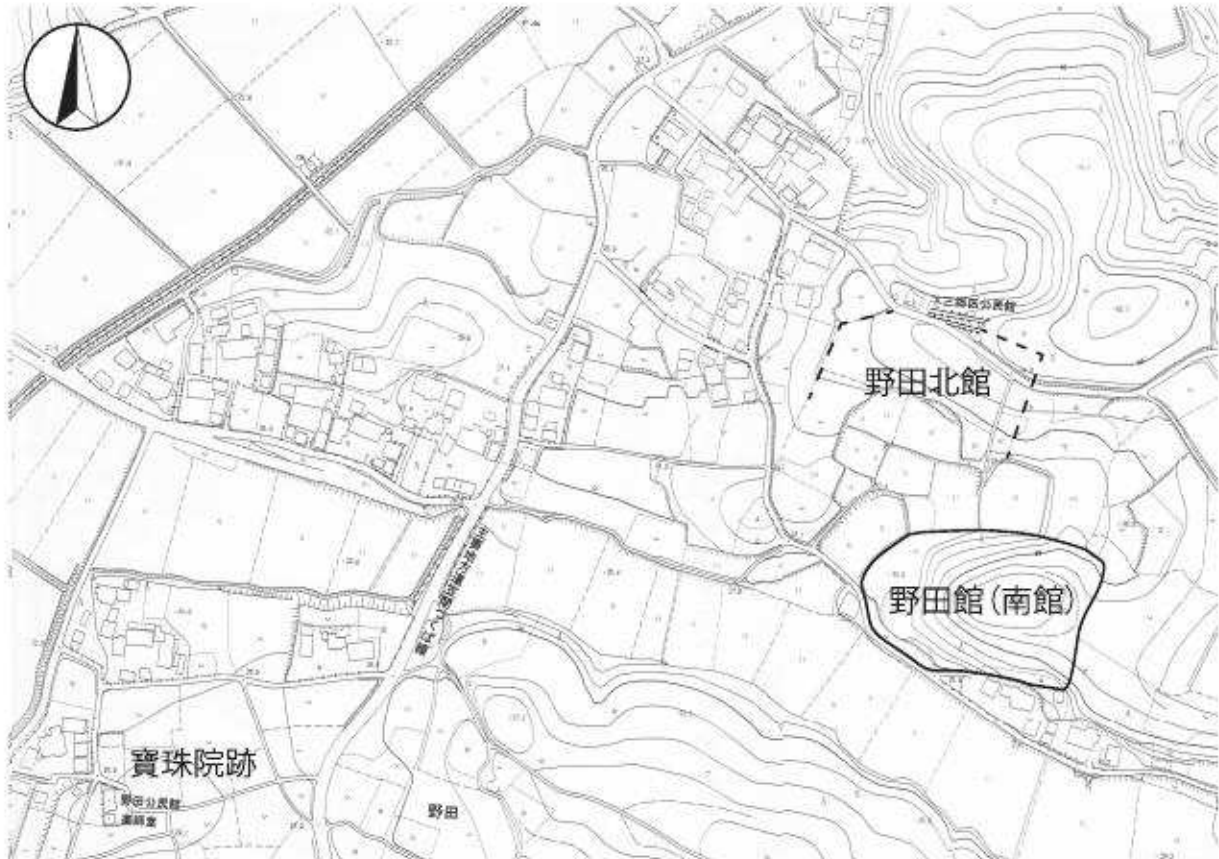
（註1）公民館東脇に、南北二重の土塁の間に空堀が掘削された遺構が、長さ30～40mにわたり東西方向に残存する。北側（館外側）の土塁は、谷津の斜面部から立ち上がるように造られており、正確ではないが高さ3m以上、南側（館内側）の土塁は道路造成の際に削られていると思われ、現状の高さは1mほどである。削平などの後世の改変を差し引

いても、外側の土塁がより高く築かれていた可能性が高い。両者に挟まれた空堀は、上幅8.3m、下幅2mを測る。

(註2) 地権者及び近隣住民談。

(註3) 「八郷の地名」。

(註4) 残存する土塁と空堀のラインと、聞き取り及び地形からの推定を加えると、東西130～140m、南北50～70mほどの長方形のプランが想定される(第2図)。公民館の建設や耕地整理などで湮滅した土塁・空堀も多いと考えられるが、北側の谷津方向にも地形に影響されずに外土塁を持つ空堀を構築している点などから、伝承通り在地土豪の居館に相応しい規模・構造であったと思われる。



第2図 南北野田館跡と周辺 (S = 1/2500)

第4節 野田館主小松氏について

『新編常陸国誌』によると、肥後守平貞能は、平家滅亡後、平清盛の嫡男である小松内府平重盛の後室を伴い、同族である常陸大掾氏を頼り同地に逃れた。そこで重盛の遺骨を祀り上入野(城里町)の小松寺を開創したといい、大掾氏の支族がその跡を継いで子孫が続くという。

野田小松氏の系譜では、応永20年(1413)に、この小松寺から分かれて野田に居館を構えたとされる平時宗を初代とする。

そして4代信光の時に小田・佐竹の合戦に参加し、9代盛光の時、慶長年間ごろ北の瓦谷宿に居館を移して野田館を廃したと伝えられている(関2000・2007)。

また、雲照寺にある野田小松氏本家の墓誌名「旧記曰」によると、初代の名を宗時とし、天正2年(1574)に7代信光がおり、その後9代盛光に続くという。

さらに、上玉里字小松（小美玉市）にある、平重盛の隠棲地とも伝えられる小松館の一族であるという伝承もあるが、いずれにせよ平重盛を一族の祖とする伝承を持ち、平姓を称する瓦谷・野田付近の在地領主であったと思われる。

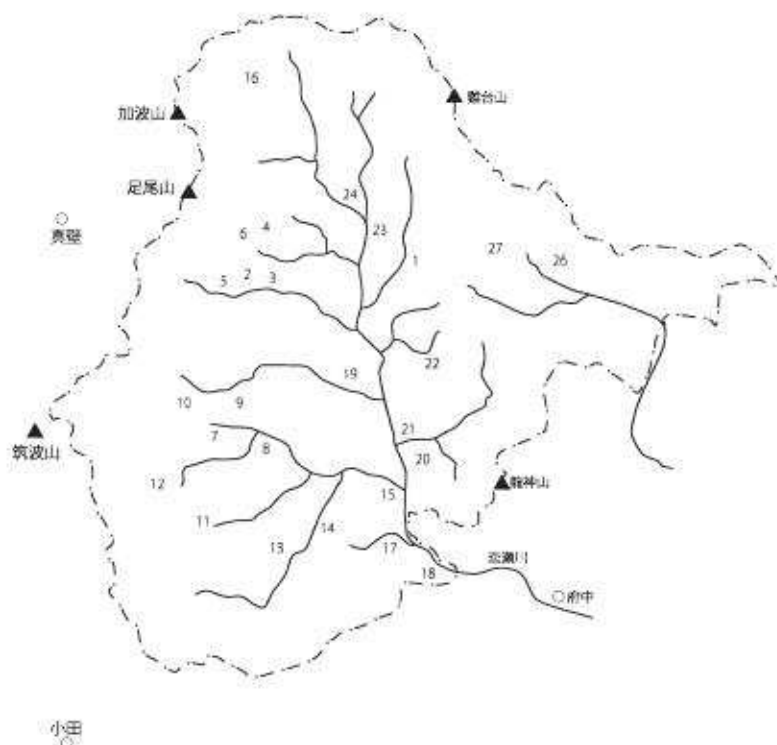
この点は、藤原姓の八田知家の末裔である、小田氏一族が大半を占める旧八郷町域の中世領主層では、やや系統を異にしている点に注意される（第3図・第2表）。

以下、野田小松氏について、若干の検討を試みたい。

4代信光の代に、小田・佐竹間の合戦に参加とあるが、9代盛光が慶長年間（1596～1614）に当主であり、明暦元年（1655）に没している点（矢島2007）を考慮すると、5代前の信光の在り期間は15世紀の末から16世紀の初めごろと推定される。この時期は、関東においては古河公方と管領上杉氏の対立、そして上杉氏や古河公方家の内紛が激化し、それに乗じた北条早雲の伊豆・相模への進出、常陸においては、100年にわたる佐竹氏の内紛山入の乱が収束した時期である。この時期に大規模な小田・佐竹間の合戦は確認されないことから、あるいはより後世の当主の事跡が混同されているのかもしれない。

「旧記曰」にある天正2年（1574）ごろの7代帯刀信光の事跡とすると、16世紀後半の小田氏治と佐竹義重の抗争が激化したところに該当し、年代的な整合性がみられる。いずれが正しいのかは現段階では明確にはできないが、小松一族の系譜には複数の伝承があることを併記し、後考に附したい。

歴代で最も事跡が確認されるのは、9代新右衛門尉盛光である。慶長7年（1602）の佐竹氏の秋田転封には従わずに常陸に留まり、その後野田館を出て瓦谷宿に屋敷を移した事は、中世以来の領主としての営みに幕を下ろし帰農したことを意味する。



第3図 旧八郷町域の中世城館

八郷町 2005 に加筆

また、ほぼ同時期に元々上曾にあった名利雲照寺（真言宗・応永26年（1419）了慶開山）を、瓦谷の「自分耕作ノ畑ヲモ寄進シ地中トシ二町四方形ニ寺地立植木若干辛勞」して再興し、寶珠院から代々の石塔を移して菩提寺とした事が伝えられている（矢島2007）。

その後の小松氏であるが、12代包教が元禄8年（1695）に、妹の供養のため雲照寺に梵鐘を奉納したという（関2000）。また、近世においては旧八郷町域のうち瓦谷・野田など18ヵ村が牛久藩の新治領となる。世襲ではないが、同領の村々を統括し、藩の御勝手向御用なども勤める割元に選出された村役人級の富農の中に、小松新兵衛、同左平太の名前が見られる（八郷町2005）。このことから、江戸時代の後期に至っても、地域の有力者としての小松氏の存在が確認できる。

現在雲照寺の本堂脇には、開基大檀那である野田小松氏歴代の高さ2m前後の板碑型墓標が立ち並び、かつての威勢を示している（第4図）。この他、瓦谷にはかつて定光寺（臨済宗妙心寺派・延文元年（1356）広円明鑑開山）に付属していた観音堂の十一面観音像（中世小松氏の寄進という）や、日笠神社（建治元年（1275）創建・中世小松氏の守護神という）など、小松氏所縁の寺社仏像が幾つかみられ（関2003）、また現在もこの地には小松姓を称する多くの家が存在するなど、中世以来の一族の歴史を今も伝えている。



第4図 雲照寺の小松氏墓所

（小野）

第2表 石岡市八郷地区の城館と城主

番号	城館名	城主	系統	略史
1	野田館	小松氏	大掾支族（平氏）	秋田に随行せず帰農。
2	上曾城	上曾氏	小田支族（藤原氏）	佐竹と戦うも降伏。本家は秋田に随行し多くは帰農。
3	御蔵館	同	同	同
4	根小屋館	同	同	同
5	龍門寺城	同	同	同
6	猿壁城	同	同	同
7	堀ノ内館	小幡氏	小田支族（藤原氏）	佐竹と戦うも降伏。玉里に移される。
8	菅間館	同	同	同
9	吉生砦	同	同	同
10	諏訪山砦	同	同	同
11	青柳要害	同	同	同
12	長峰城	同	同	同
13	青田館	関氏	小田支族（藤原氏）	小田滅亡後帰農。
14	数俵城	月岡氏	小田支族（藤原氏）	佐竹に追われ筑波西板橋に移動。一部帰農。
15	川又要害	川又氏	小田支族（藤原氏）	小田滅亡後帰農。
16	大増城	古尾谷氏	小田家臣	秋田に随行か。
17	半田砦	半田氏	下河辺支族・小田家臣	小田に殉じ滅亡。
18	権現山城	下河辺氏	小山支族（藤原氏）	南北朝期に廃城・戦国期にも城は利用。
19	柿岡城	柿岡氏	小田支族（藤原氏）	佐竹に追われ筑波上大島城に移動。一部佐竹に仕える？
20	片野城	八代氏	小田支族（藤原氏）	
21	観音寺城	片野氏？		南北朝期。未完のうちに片野城に移動。
		友部氏？	小田支族（藤原氏）	宍戸より来て小田滅亡後加波山麓に帰農。
		林氏？		城主の伝聞のみ。
22	片岡館	八代氏？	小田支族（藤原氏）	
23	二条山館	路川氏	小田支族宍戸氏家臣	佐竹に追われて宍戸より来て、また追われ足尾山麓館内に隠棲。
24	小塙館	柿岡城主の一族		元亀・永禄ごろの一族という。
25	高友古壘	佐志能神社社家？		
26	真家館	真家氏	小田支族宍戸分家（藤原氏）	秋田に随行せず帰農。
27	厚茂砦	真家氏	同	同

八郷町2005、関2000、2007を基に作成。

第3章 調査の方法と標準堆積土層

第1節 調査の方法

調査区の座標は、公共座標（世界測地系）を基準に設定した。調査対象地は、東西約140m、南北15～30mの東西に細長い平面形状を呈しており、総面積は2,590m²を測る。しかし、今回の調査は調査区だけでなく遺跡全体の地形測量を併せて実施することとしたことから、調査区の南北に広がる遺跡全体に対して10mのグリッドを設定することとした。そこで、GPS観測により、X座標が29231.000、Y座標が34023.000の基準点を設け、東西南北にそれぞれ10mの方眼を設定した。基準点から北へ20m、西へ30mの方眼から南へA、B、C…、西から東へ01、02、03…、と記号と番号を付し、A01区、C06区などと呼称することとした。

調査に当たっては、重機による表土除去を行い、終了後に、人力による遺構確認作業を行った。表土除去作業と同時に、館を造成する際の掘削や盛土の状況を確認するために2本のトレンチを設定し、盛土部分は旧表土面まで、掘削・整地部分は掘削・整地面まで掘り下げた。

出土遺物については、原則として光波測距儀を用いて三次元記録を行った。遺構の実測についても、光波測距儀を用いた。しかし、遺構調査を館跡全体の地形測量と平行して進めた関係で、水糸方眼地張りによる測量も併用した。

写真撮影は、35mmモノクロフィルム（富士フィルムNEOPAN100ACROS）、35mmカラーリバーサルフィルム（富士フィルムPROVIA100F）、デジタルカメラ（1420万画素）を併用し、適宜記録撮影を行った。

（根本）

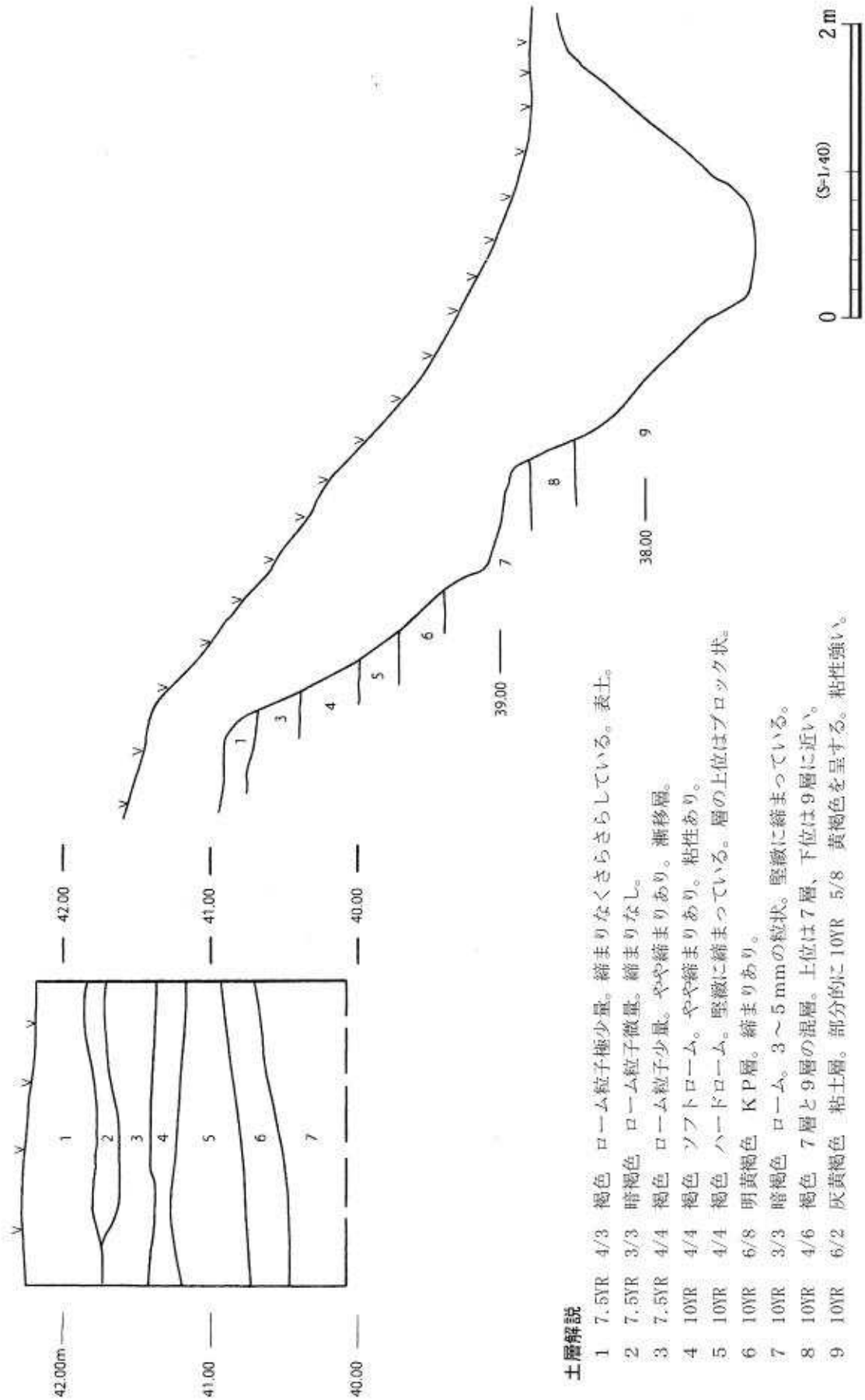
第2節 標準堆積土層（第5図）

当遺跡の標準堆積土層を把握するために、E09区にテストピットを設定し、表土からの深さ2mまで掘り込んだ。しかし、堀や曲輪Ⅱの掘削が深部に及んでおり、テストピットだけでは把握しきれないため、トレンチ（第19図C～C'）で確認した堀跡や斜面部の壁面の土層を併せて確認することとした。

当遺跡の基盤には、灰黄褐色粘土層（9層）があり、部分的に黄褐色を呈している。黄褐色の部分は非常に砂目が強く、数ミリメートルの砂鉄層が見られる。水底に没していたと考えられ、その影響と考えられる。堆積した状態では固く締まっているが、濡れると滑りやすくなり、乾燥によって表面から崩れる。SD-02は、9層を1.2～1.3mほど掘り込んでいる。8層は7層と9層の混層で、全体的には褐色を呈しているものの、土壌の性質を見ると、層の上部は7層に、下部は9層に近い。9層の堆積の終わりごろから7層の堆積が始まり、結果的に両者の混層としての8層の堆積が進んだのであろう。7層は暗褐色を呈するローム層である。径3～5mmの粒状で、非常に堅緻に締まっているが、濡れると表面が滑りやすくなる。SD-01は、7層を0.4mほど掘り込んでいる。6層はKP層である。堅く締まっているが、粒状構造で崩れやすい。4・5層はローム層である。4層は所謂ソフトローム、5層はハードローム層である。SI-01・02は3層の途中から5層まで掘り込んでいる。1層は表土である。土層解説はテストピットでの観察結果を掲載した。堀跡側で観察した結果では、7.5YR3/3暗褐色となっている。

（根本）

第5図 標準堆積土層



土層解説

- 1 7.5YR 4/3 褐色 ローム粒子極少量。縮まりなくさらさらしている。表土。
- 2 7.5YR 3/3 暗褐色 ローム粒子微量。縮まりなし。
- 3 7.5YR 4/4 褐色 ローム粒子少量。やや縮まりあり。漸移層。
- 4 10YR 4/4 褐色 ソフトローム。やや縮まりあり。粘性あり。
- 5 10YR 4/4 褐色 ハードローム。堅緻に締まっている。層の上位はブロック状。
- 6 10YR 6/8 明黄褐色 K P層。縮まりあり。
- 7 10YR 3/3 暗褐色 ローム。3～5 mmの粒状。堅緻に締まっている。
- 8 10YR 4/6 褐色 7層と9層の混層。上位は7層、下位は9層に近い。
- 9 10YR 6/2 灰黄褐色 粘土層。部分的に10YR 5/8 黄褐色を呈する。粘性強い。

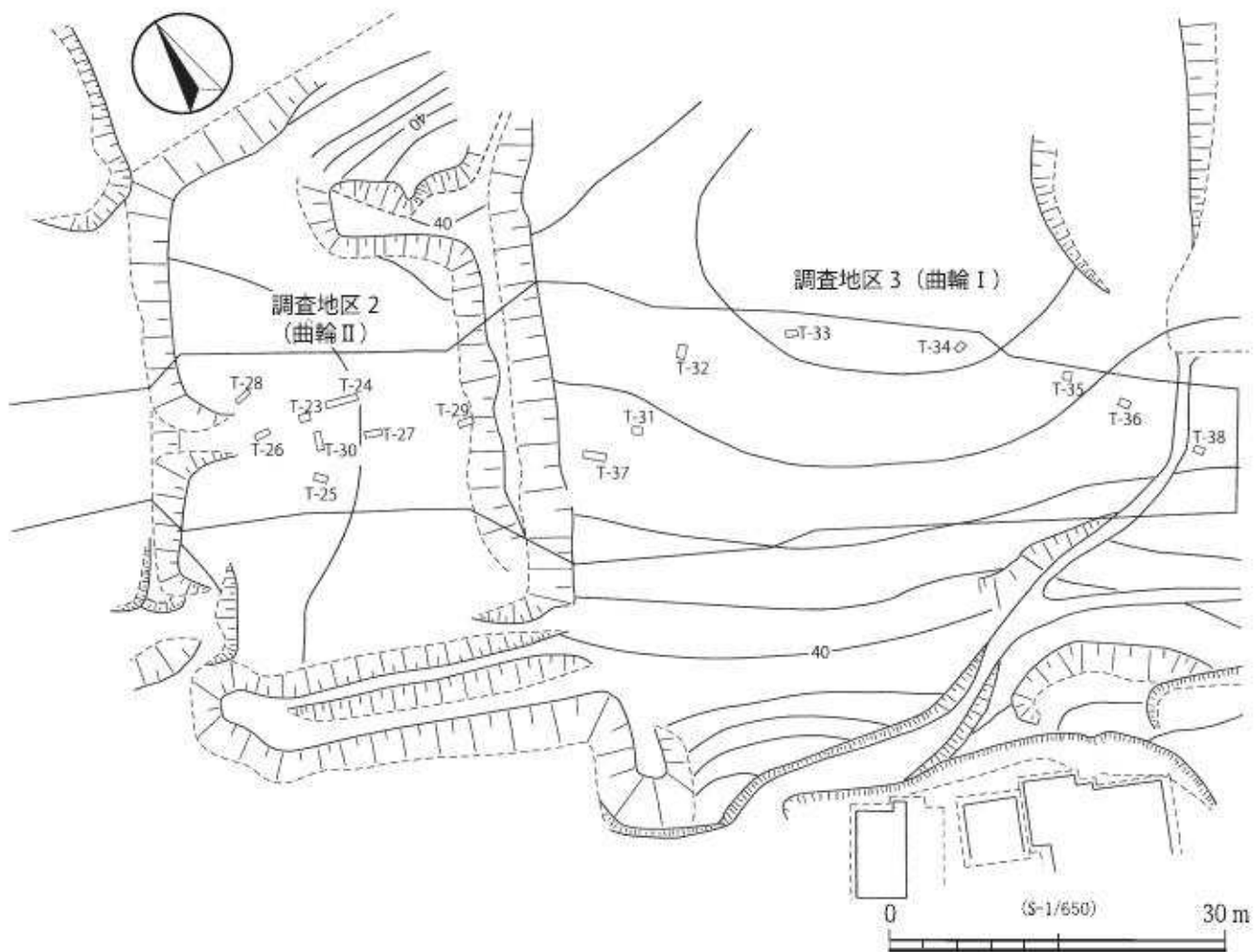
第4章 試掘調査と遺物 (第6・7図、第3表、遺物図版7)

試掘調査は、開発区域内に任意にトレンチを設定して行われた。開発区域は、周知の遺跡の範囲外であったが、現地踏査の結果、遺物（奈良・平安時代）の散布や土塁状遺構が確認され、遺跡の存在する可能性が考えられたためである。

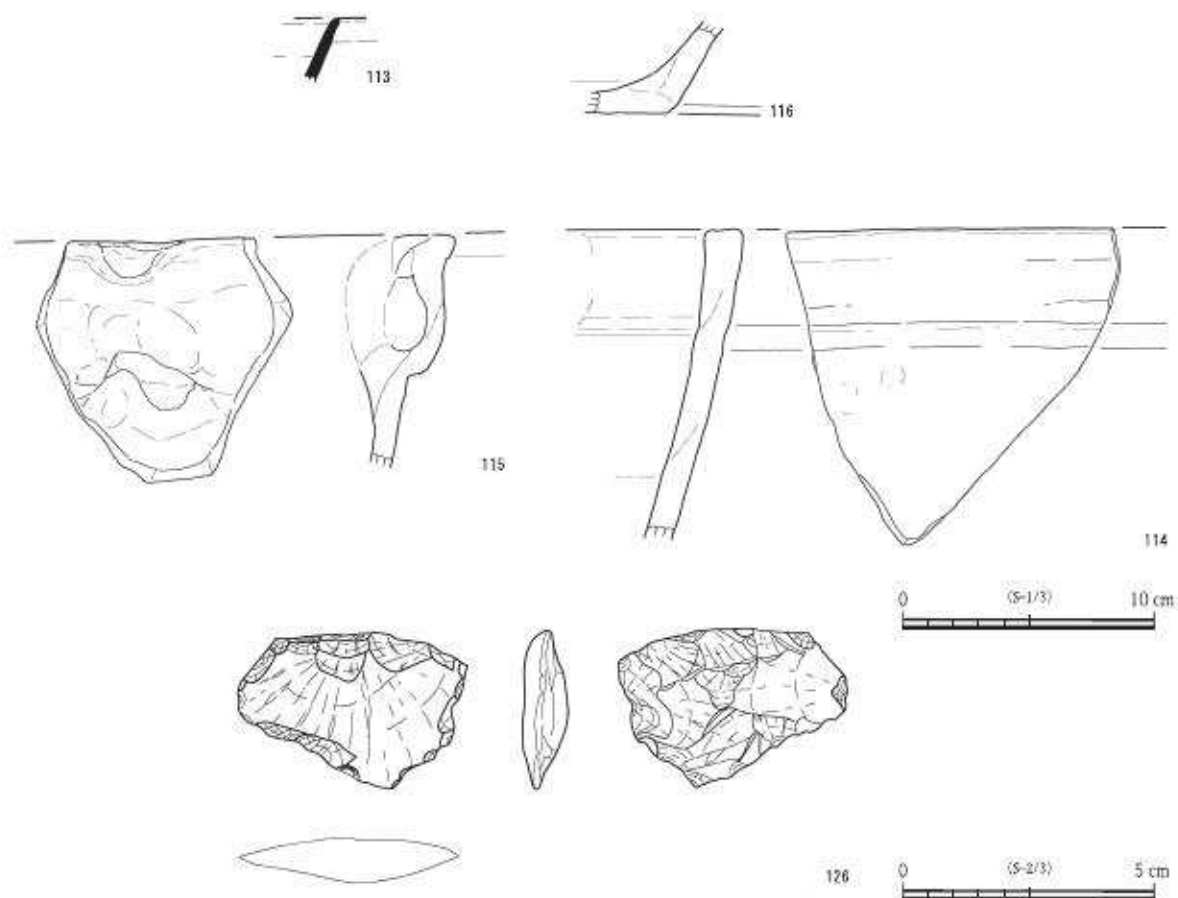
対象地区を「調査地区1」～「調査地区3」とし、59か所のトレンチを設定して、人力により地山まで掘り下げた。その結果、表面採集遺物を含めて、須恵器片9点（坏6、蓋1、甕2）、土師器片28点（甕28）、土鍋片42点、土師質土器片1点、陶器片1点、不明6点、剥片1点が出土した。特に調査地区2においては、盛土や地山を削り出した整地面が確認されたほか、第29トレンチ（第6図T-29）から中世の土鍋片39点、土師質土器片（火鉢）1点、不明土器片6点が集中して出土した。さらに調査地区3の西側においても土塁が確認され、これらはいずれも中世の城館に伴うものと考えられた。そこで、調査地区2及び3を中心とする区域について、発掘調査を実施することとした。

（本調査に際して、調査地区2を「曲輪Ⅱ」、調査地区3を「曲輪Ⅰ」と呼称することとした。）

（根本）



第6図 試掘トレンチ位置図

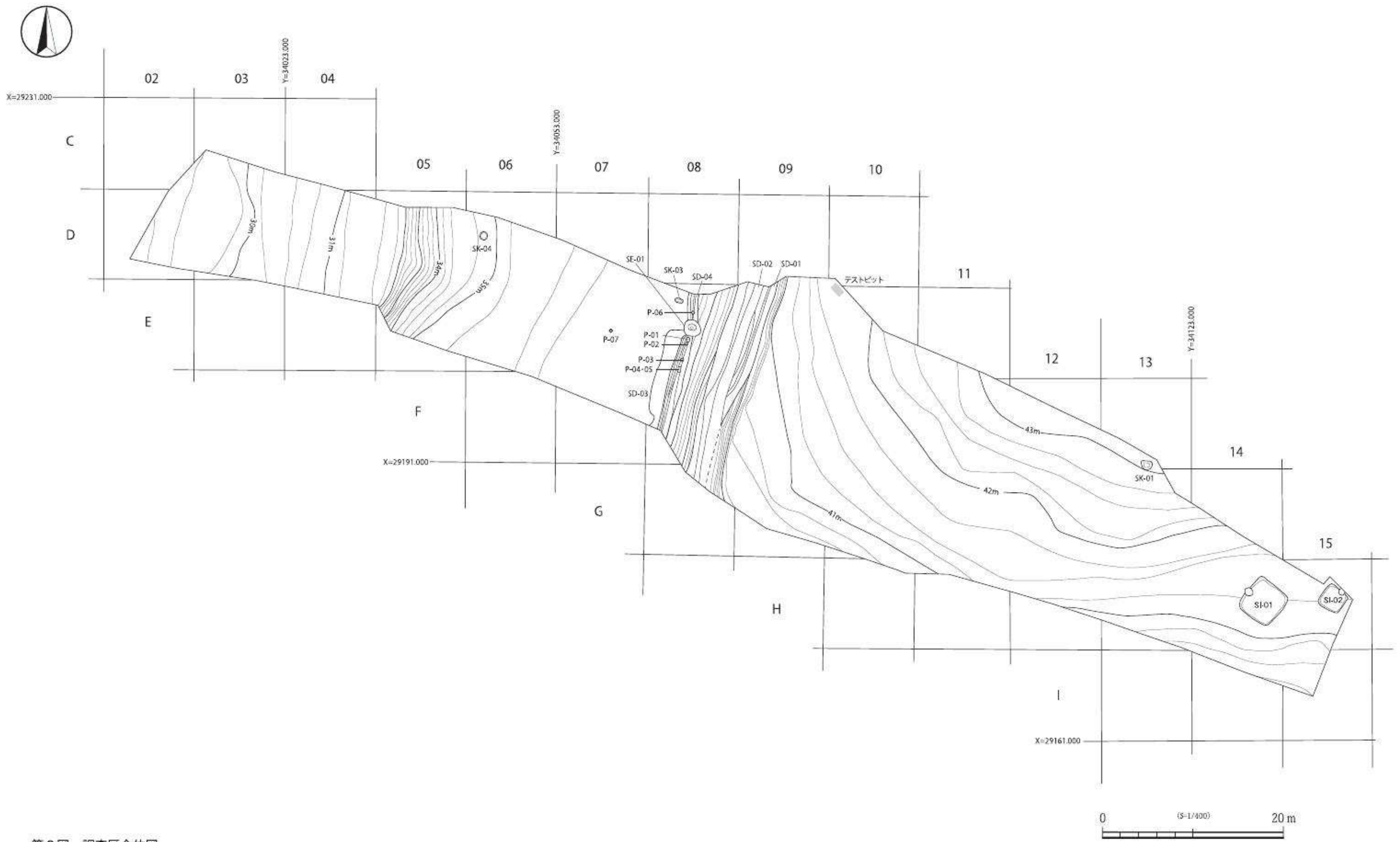


第7図 試掘トレンチ出土遺物

第3表 試掘調査出土遺物観察表

番号	種別・器種	口径	器高	底径	胎土	色調	特徴	備考	位置
113	喉巻器片	-	-	-	長石	5B/G5/1 青灰色	ミズヒキ。口唇部磨減	PL7	T-11
114	土師質土器 土鍋	-	-	-	石英、長石、 白雲母、赤褐色 色粒子	5YR4/2 灰褐色	胴部下端指ナデ。頸部内面に耳貼り付けに伴うゆがみ、 胴部外面に指頭痕。	PL7	T-29
115	土師質土器 土鍋	-	-	-	長石、石英、 白雲母、赤褐色 色粒子	2.5YR5/4 にふい赤褐色	口唇内側に耳接合面が遺存、外面に指頭痕。下位耳接合 部外面に強い指頭痕。	PL7	T-29
116	土師質土器 土鍋	-	-	-	石英、長石、 輝石、白雲母	5YR4/1 褐灰色	胴部外面に指頭痕。胴部下端ヘラナデ(?)		T-29

番号	器種	計測値				材質	特徴	備考
		長さ	幅	厚さ	重さ			
126	石器(剥片)	31	4.6	0.8	129g	片岩	横長剥片。	PL7 表採



第8図 調査区全体図

第5章 検出された遺構と遺物

第1節 概要

今回の調査で確認・調査した遺構は、下のとおりである。

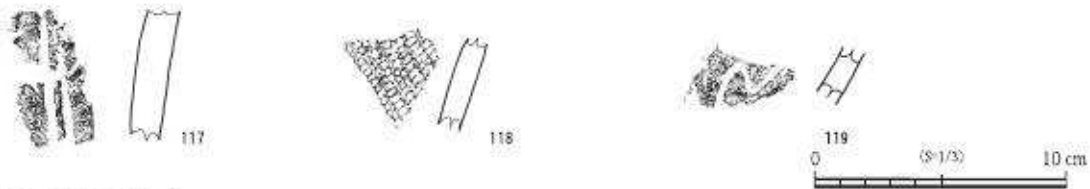
第4表 野田館跡検出遺構一覧表

時代	確認された遺構の種類と数
古墳時代	住居跡2軒
中世	堀跡2条、溝跡2条、土坑2基、井戸跡1基、土塁1条、ピット7基
中世以降	土坑1基

古墳時代の住居跡は、調査区の東端部に互いに近接して確認された。中世の遺構は、曲輪Ⅰの西端部に土塁が確認されたほか、土塁の直下と曲輪Ⅱの東端部に集中して確認された。

第2節 縄文時代（第9図、第5表、遺物図版7）

縄文時代の遺構は検出されなかった。遺物は、深鉢の破片3点が確認されただけである。



第9図 縄文土器実測図

第5表 縄文時代出土遺物観察表

番号	種別・器種	口径	器高	底径	胎土	色調	特徴	備考	位置
117	深鉢	-	-	-	長石、石英、雲母	7.5YR5/3 にふい褐色	半截竹管による押引文	PL7	SI-01覆土
118	深鉢	-	-	-	長石、石英、雲母	2.5YR6/6 棕色	RL単節横回転	PL7	SD-01覆土
119	深鉢	-	-	-	雲母、長石、赤褐色粒子	5YR6/3 にふい棕色	横位の蛇行沈線文	PL7	曲輪Ⅰ確認面

第3節 古墳時代

SI-01（第10～13図、第6表、遺構図版6、遺物図版7～9）

調査区東端部のH14・15区に確認された。住居跡の大半はH14区に存在する。平面形は隅丸方形で、主軸はN-56°-Wを指す。覆土は、褐色土、暗褐色土、極暗褐色土の自然堆積である。南西壁から北東壁までが4.5m内外、南東壁から北西壁までが4.6m内外を測る。床はロームで平坦である。締まりは弱い。壁は丸みを持って立ち上がり、垂直またはやや外傾する。壁高は0.5～0.6mを測る。

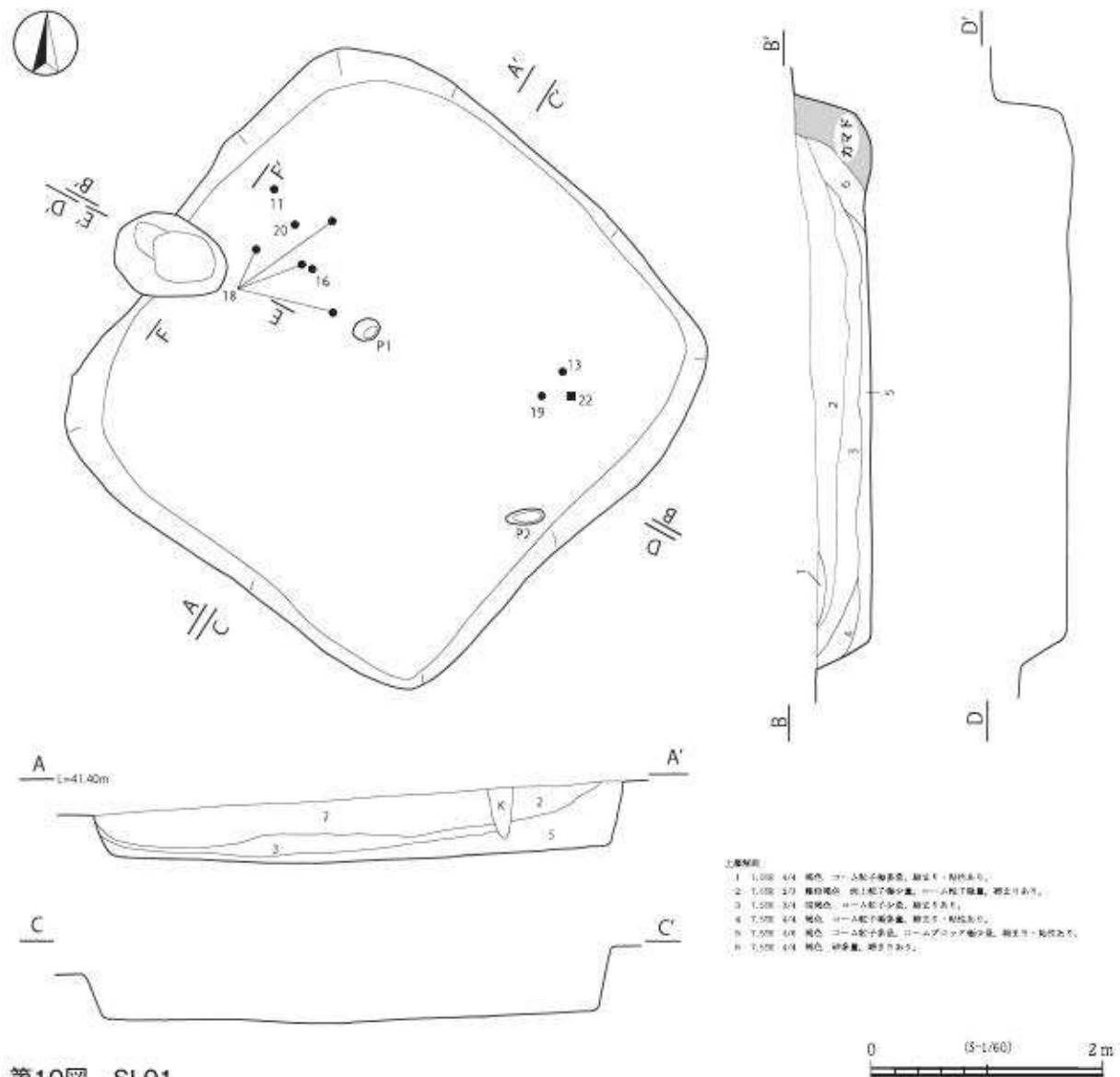
付帯施設は、カマドが確認されたが、貯蔵穴や柱穴、周溝は確認できなかった。ピット2か所が確認されたが、柱穴とは認められなかった。

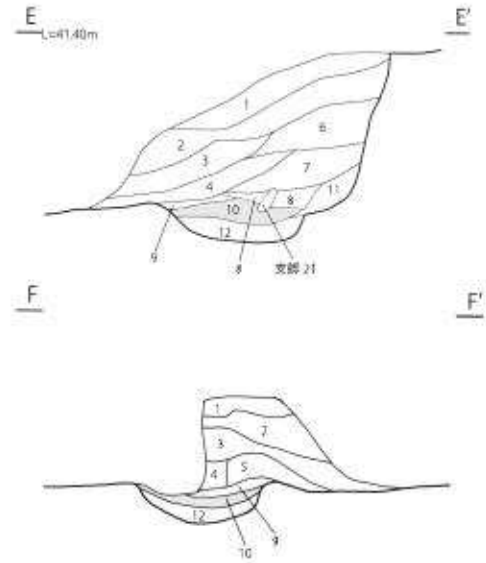
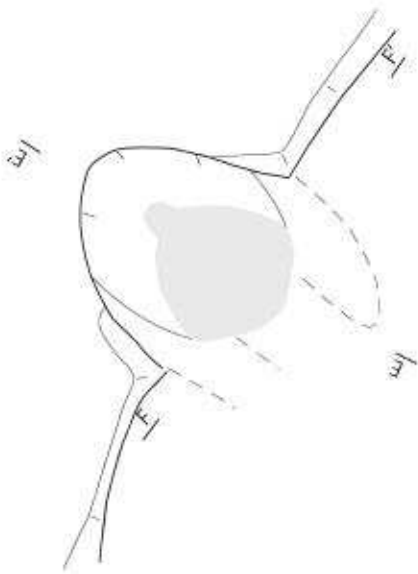
カマドは、北西側壁中央部を60cmほど掘り込んで構築されていた。粘土をあまり使用せず、砂を主体として構築されたと見られ、原形を留めていなかった。6層が、天井の崩落層である。カマドの規模は、袖の痕跡から、

全長120cm前後、幅は90cm前後と見られる。火焼部はロームで、幅60cm、奥行き70cmの範囲が赤変していたが、強い火熱を受けた様子は見られなかった。(本跡は、当初の掘り込みがあまく、カマドの掘り方の調査を実施したところ支脚が出土したため、土層セクションを2回に分けて調査することになった。したがって、図のカマドの土層図は、2回の実測図を合わせたものである。

床面が硬化していないこと、火焼部が強い火熱を受けた形跡が認められないことから、住居としての使用は短期間であったと判断される。

出土遺物は、総数で237点を数える。中央からやや北隅に寄った位置及び中央から南隅に寄った位置の床面直上から土師器(坏11、高坏13、甕16・18・19)が、カマドから土製品(支脚21)が出土している。特徴的な出土状態であったのは、13の高坏、19の甕、22の石である(PL6)。壁近くに置かれた石の手前に高坏が倒れて壊れており、その右側に甕が底部を石に向けてつぶれていた。甕の底部は石に接するような状態にあり、その状況から甕は石を台にして安置されていたものが倒れ、高坏もその際に壊れたものと考えられる。そのほか、褐色土、極暗褐色土中から奈良・平安時代の土師器片、須恵器片が出土している。

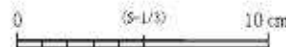
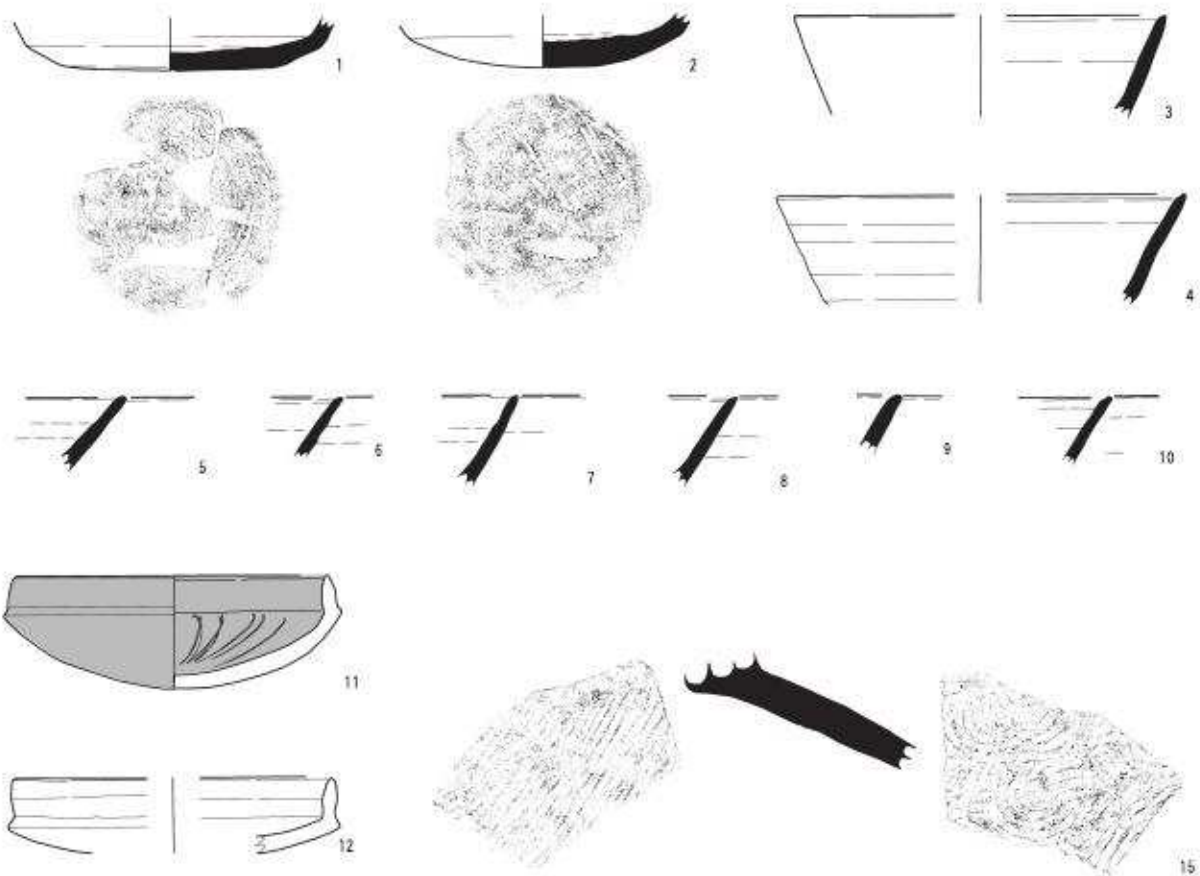
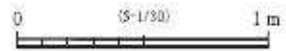




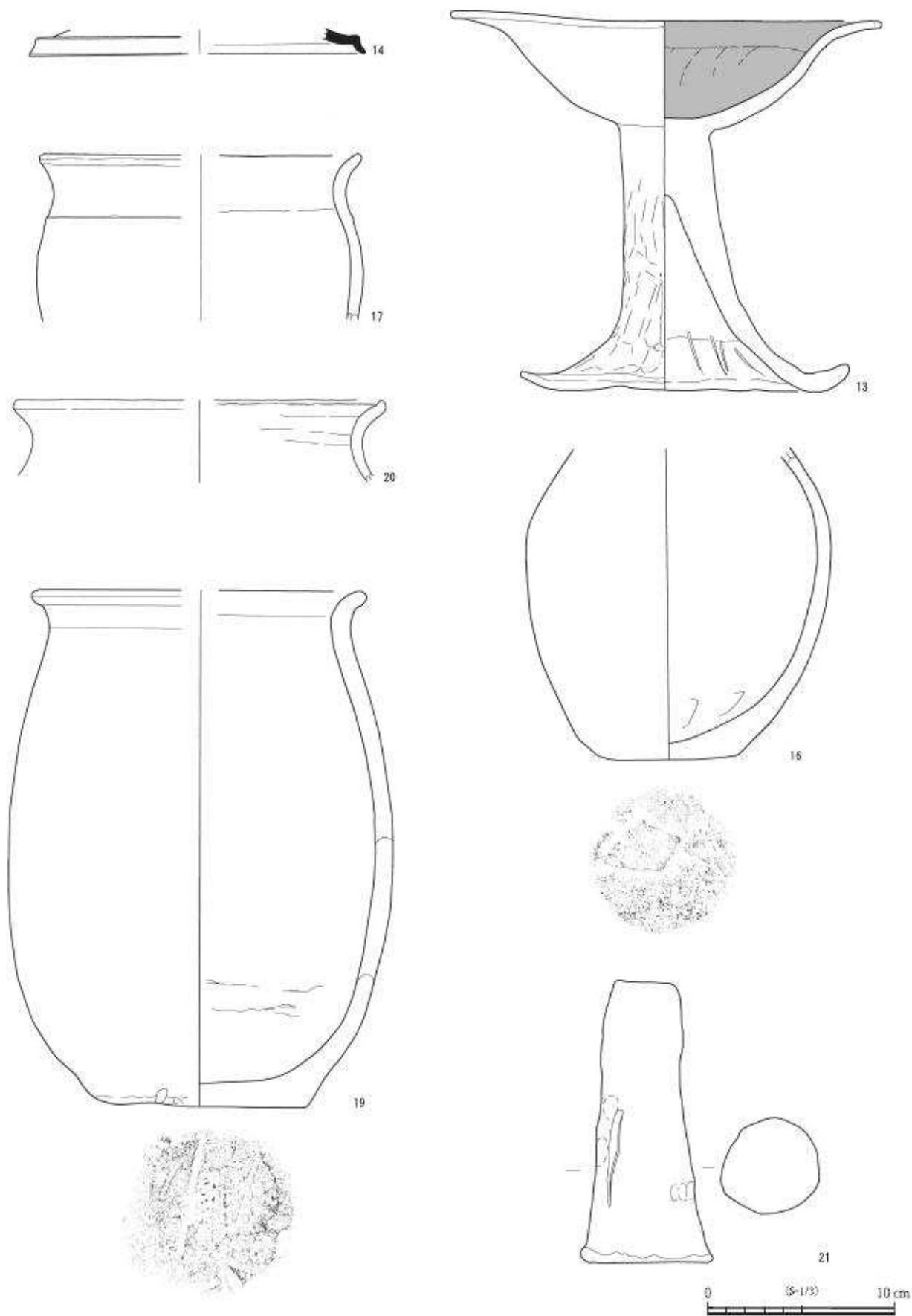
上部断面

- 1 1.200 4/4 褐色 コーシ粘土多量、結成3-4粒あり。
- 2 1.200 4/4 結成粗粒、粘土粒少量、コーシ粘土多量、結成5粒あり。
- 3 1.200 4/4 褐色 砂多量、結成5粒あり。
- 4 1.200 4/4 褐色 砂多量、粘土粒少量、結成5粒あり。
- 5 1.200 4/4 褐色 砂を主体とする、粘土粒少量。
- 6 1.200 4/4 黄褐色、炭灰が砂を主体とする、結成5-6粒あり。

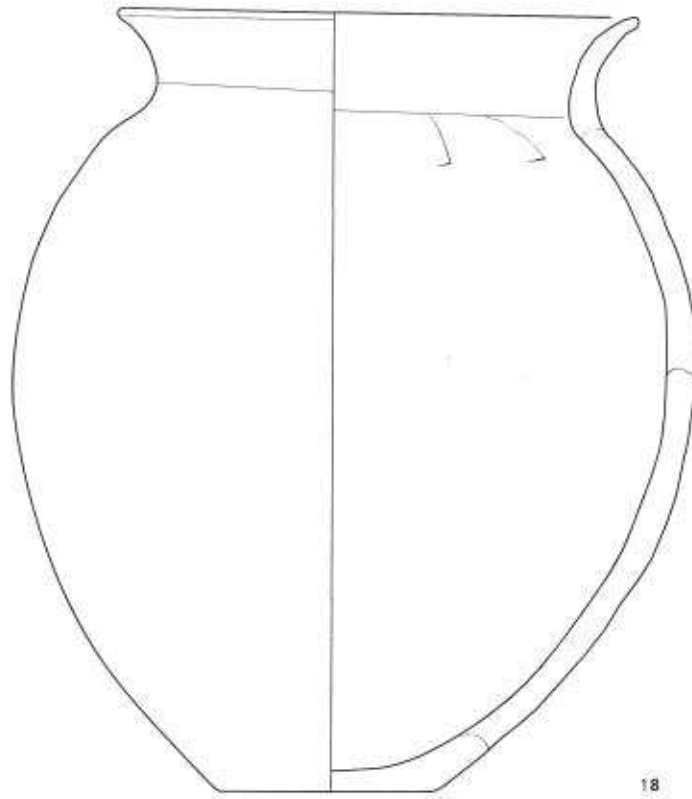
- 7 1.200 4/4 褐色 粘土粒多量、砂少量。
- 8 1.200 4/4 褐色 結成コーシ粘土・砂・コーシロソックス少量。
- 9 1.200 4/4 褐色 結成コーシ粘土・砂多量、結成5-6粒あり。
- 10 1.200 4/4 1.10-1.20結成、炭(ブコッタ)粘土粒多量。
- 11 1.200 4/4 褐色 結成コーシ粘土・砂少量。
- 12 1.200 4/4 褐色 結成コーシ粘土。



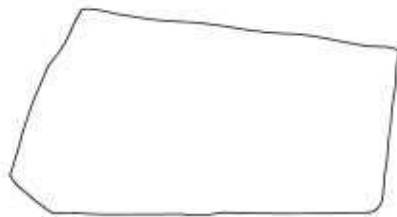
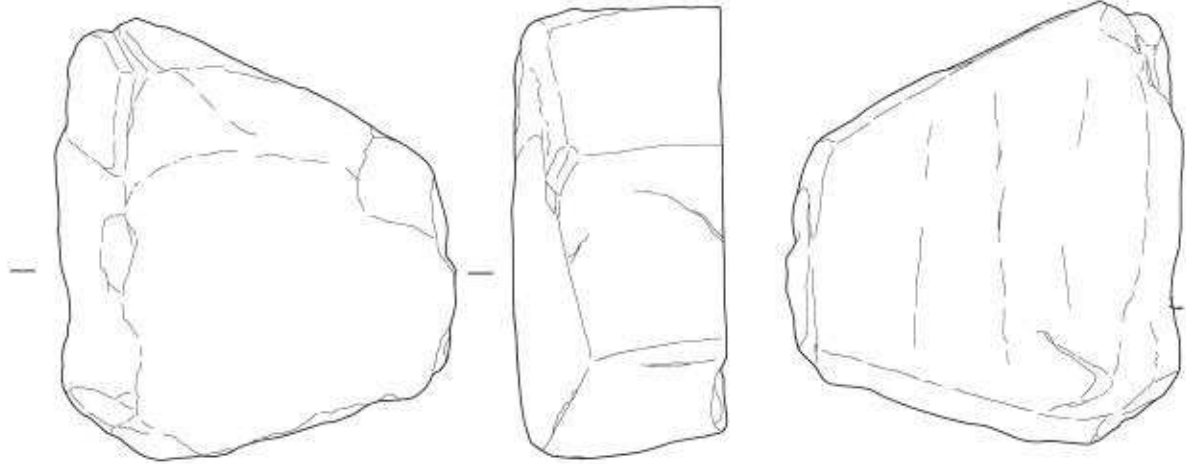
第11図 SI-01カマド・出土遺物 (1)



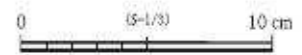
第12図 SI-01出土遺物 (2)



18



22



第13図 SI-01出土遺物 (3)

第6表 SI-01 出土遺物観察表

番号	種別・器種	口径	器高	底径	胎土	色調	特徴	備考	位置
1	須恵器杯	-	(21)	83	白色粒子、小礫、針状鉱物	25GY5/1 オリープ灰色	底部回転ヘラケズリ(右)。底部外縁磨減。	PL8	3区1・2層
2	須恵器杯	-	(21)	108	白色粒子	5GY7/1明 オリープ灰色	内外面ロクロナデ。底部手持ちヘラケズリ。		No.6, 2区1層, 4区ベルト2層
3	須恵器杯	(14.6)	(39)	-	小礫、針状鉱物	25GY6/1 オリープ灰色	内外面ロクロナデ。外面はていねいに稜を消す。口唇部磨減。		4区2層, 1区ベルト2層
4	須恵器杯	(15.8)	(43)	-	小礫、針状鉱物	5GY6/1 オリープ灰色	内外面ロクロナデ。内面はていねいに稜を消す。口唇部及び外面磨減。		3区ベルト2層, 確認面
5	須恵器杯	-	-	-	長石	25Y7/3 浅黄色	内外面ロクロナデ。外面はていねいに稜を消す。口唇部磨減。		1区1層
6	須恵器杯	-	-	-	長石	5GY5/1 オリープ灰色	内外面ロクロナデ。口唇部磨減。		覆土
7	須恵器杯	-	-	-	長石、石英	10YR7/4 にふい黄褐色	内外面ロクロナデ。外面はていねいに稜を消す。口唇部磨減。		4区1層
8	須恵器杯	-	-	-	長石、石英	10YR7/4 にふい黄褐色	内外面ロクロナデ。外面はていねいに稜を消す。口唇部磨減。		4区1層
9	須恵器杯	-	-	-	白色粒子	25Y6/1 黄灰色	内外面ロクロナデ。外面はていねいに稜を消す。口唇部磨減。		4区1層
10	須恵器杯	-	-	-	白色粒子、小礫	25Y6/2 灰黄色	内外面ロクロナデ。内面口唇直下にヘラ先痕が浅い沈線状に周回する。		4区1層
11	土師器杯	123	44	-	雲母、赤褐色、石英	5YR3/2 暗赤褐色	口縁部内外面ヨコナデ。底部内面暗文状ヘラミガキ、外面ケズリ後ナデ。内外面黒色処理。	PL7	No.6
12	土師器杯	(124)	(30)	-	雲母、小礫	5YR7/4 にふい橙色	口縁部内外面ヨコナデ。底部内面横位ナデ、外面ヘラナデ。	PL9	1区2層
13	土師器 高杯	228	203	174	長石、石英、黒色粒子、赤色粒子	7.5YR6/3 にふい褐色	坏部内外面ヘラナデ。脚部ケズリ後縦位ヘラナデ。坏部内面黒色処理。焼成不良。	PL8	No.12
14	須恵器蓋	(17.6)	(13)	-	白色粒子、黒色粒子	25Y6/3 にふい黄色	ミズヒキ。内外面ともていねいにロクロナデ。		2区2層
15	須恵器甕	-	-	-	長石、小礫	5Y5/1灰色	外面平行線押し目、内面同心円状宛て具痕。器内は外面2~3mmが還元により灰色を呈し、内部は2.5YR6/4にふい褐色を呈する。		No.1
16	土師器 小型甕	(16.5)	70	70	白色、赤褐色、小礫、石英	7.5YR5/4 にふい褐色	胴部下半内外面ヘラナデ。	PL8	No.9
17	土師器 小型甕	(16.8)	(8.9)		白色、赤褐色、小礫、石英	5YR4/3 にふい赤褐色	頸部内外面ヨコナデ。胴部内外面ナデ。		No.7
18	土師器甕	20.2	30.7	84	石英、長石、小礫	7.5YR5/3 にふい褐色	頸部内外面ヨコナデ。胴部内面ヘラナデ、外面ナデ。	PL7	No.8, 9, 10, 15
19	土師器甕	(17.2)	27.3	11.0	白色、赤褐色、小礫、石英	5YR5/3 にふい赤褐色	頸部内外面ヨコナデ。胴部内面ヘラナデ、外面ナデ。内面に輪積み痕が残る。口縁部から胴部1/2欠損。	PL8	No.11
20	土師器甕	(24.2)	(5.0)		雲母、長石、石英	2.5YR5/3 にふい赤褐色	頸部外面ヨコナデ、内面ヘラナデ。胴部内外面ナデ。		No.3

番号	器種	計測値				胎土	特徴	備考	出土位置
		最小径	最大径	長さ	重さ				
21	土製品 支脚	3.3	7.1	15.0	500g	白色、赤褐色	7.5YR6/6 橙	PL8	カマド火焼面

番号	器種	計測値				材質	特徴	備考	出土位置
		長さ	幅	厚さ	重さ				
22	石	17.4	15.7	8.2	3.1kg	片岩	火熱を受ける。祭砦の台石。	PL8	No.13

SI-02 (第14~18図、第7表、遺構図版6、遺物図版9~12)

調査区東端のH15区に確認された。平面形は隅丸方形で、主軸はN-38°-Eを指す。覆土は、褐色土、暗褐色土、極暗褐色土の自然体積である。南西壁から北東壁までが3.5m内外、南東壁から北西壁までが推定で3.2m内外を測る。(南東側壁には、床面に達する攪乱があり、壁の立ち上がりが一部で確認されただけである。)床はロームで平坦である。中央付近に硬化面が確認されている。壁は、垂直またはやや外傾して立ち上がっている。壁高は、0.5~0.6mを測る。

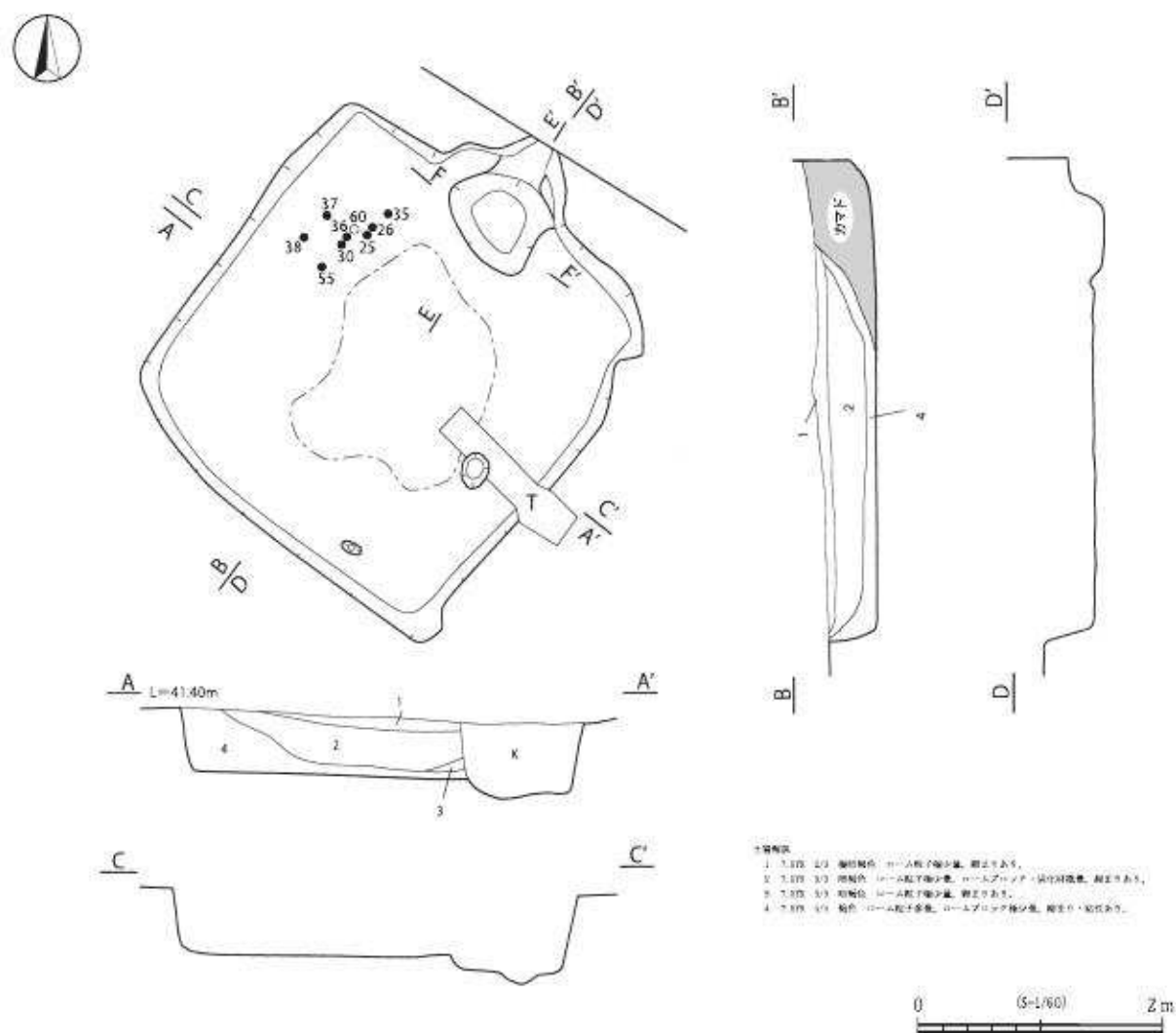
付帯施設は、カマドが確認されたが、貯蔵穴や柱穴、周溝は確認できなかった。ピットが2か所確認されたが、柱穴とは認められなかった。

カマドは、北東側壁中央部を掘り込んで構築されていた。奥壁は調査区外まで延びており、掘り込みの長さは明らかではない。現状で確認された長さは110cm、幅は約90cmを測る。当初は、あまり壁外に伸びないものと判断して調査したが、実際には大きく壁外まで伸びていた。そのため、かなり手前で切ってしまったことになり、火焼面の中央を横切るラインでエレベーション実測を実施した。天井部は崩落しており、9層がその堆積である。17層はカマド構築材の基部である。袖は粘土の基礎の上にロームを積んで構築されており、芯材として土器片を使用していた。右袖が幅約40cm、長さ90cm、左袖が幅35cm、長さ約60cmを測る。火焼部はロームで、幅約30cm、奥行き60cmの範囲が強い火熱により赤変していた。前述したように、カマドの煙道部は調査区外に伸びており、推定線を第14図の住居跡平面図、第15図のカマド平面図中に点線で表した。

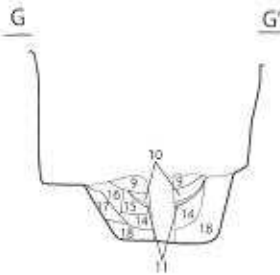
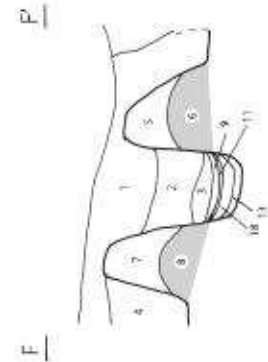
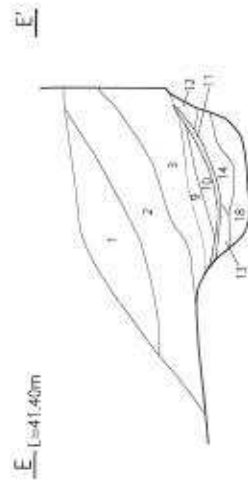
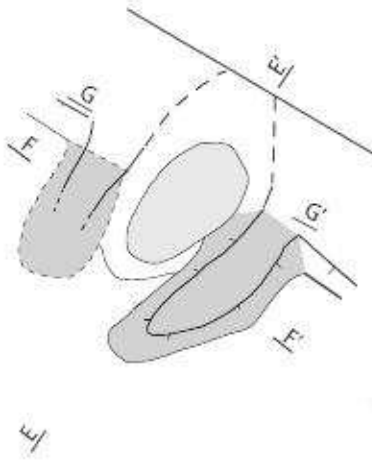
床面に硬化した部分が認められること、竈の火焼部が強い火熱を受けた形跡が認められることから、住居としての使用はある程度長期に及んだものと判断される。

出土遺物は、206点を数える。中央からやや北西壁に寄った位置の床面直上から、土師器（坏24～26、甕35～37・39、甕55）、土製品（支脚60）が出土しているほか、暗褐色土、極暗褐色土中から奈良・平安時代の土師器片、須恵器片が出土している。

(根本)

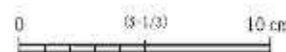
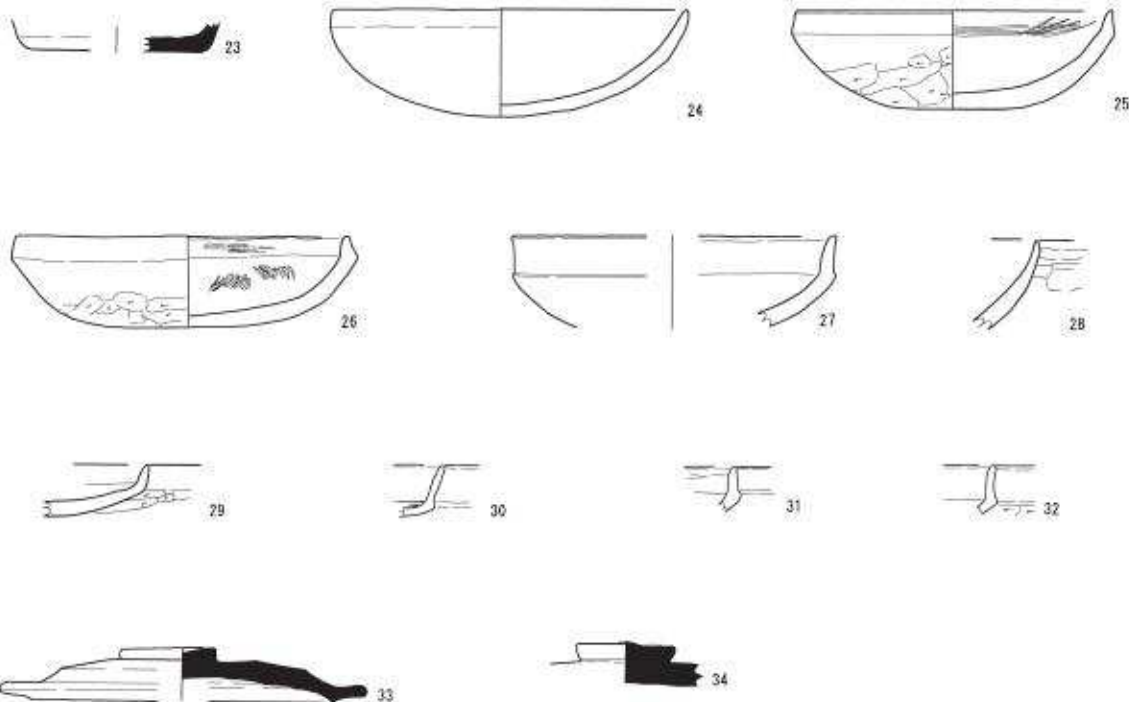
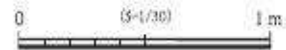


第14図 SI-02

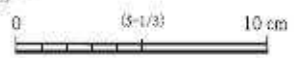
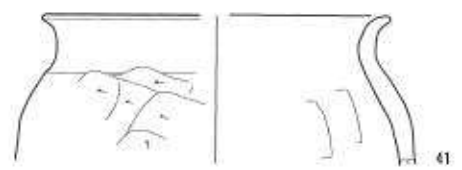
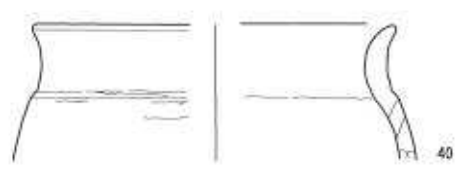
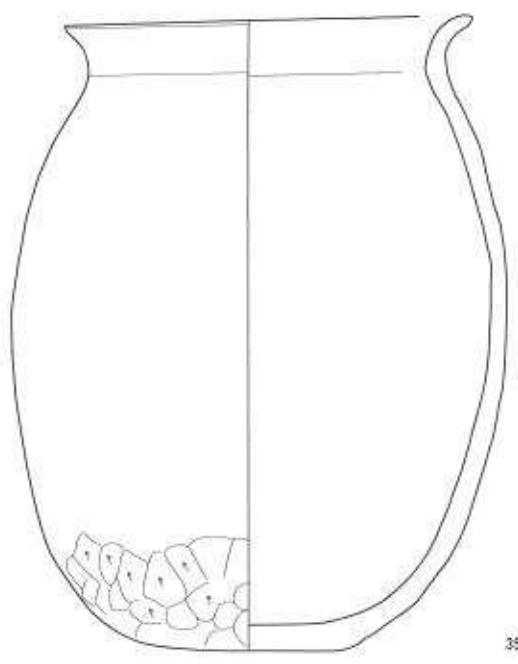
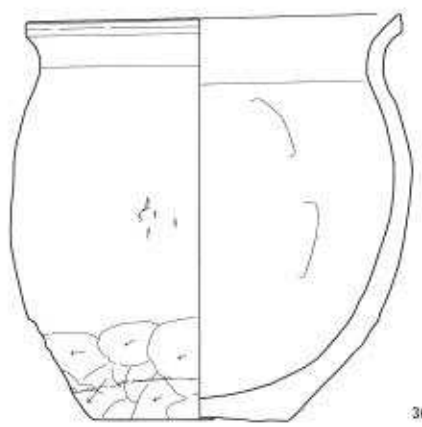
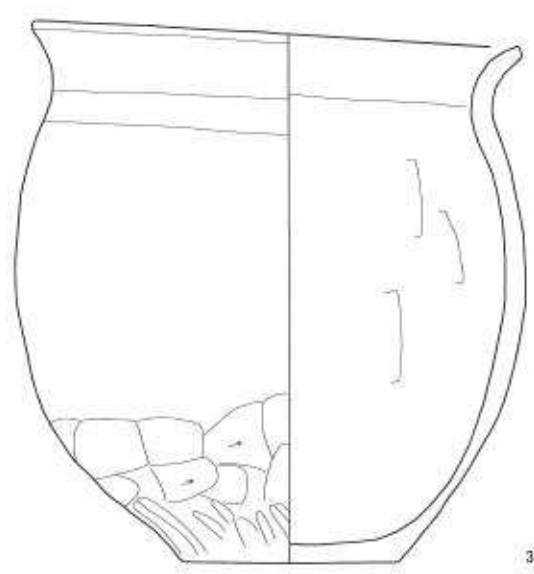
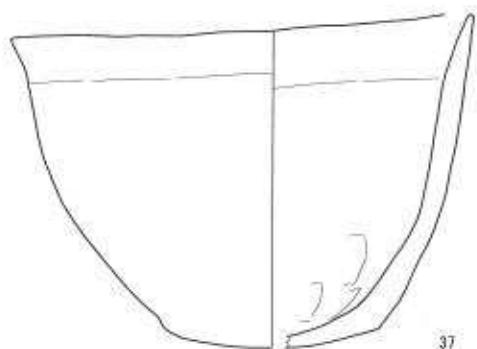


1. 遺物表

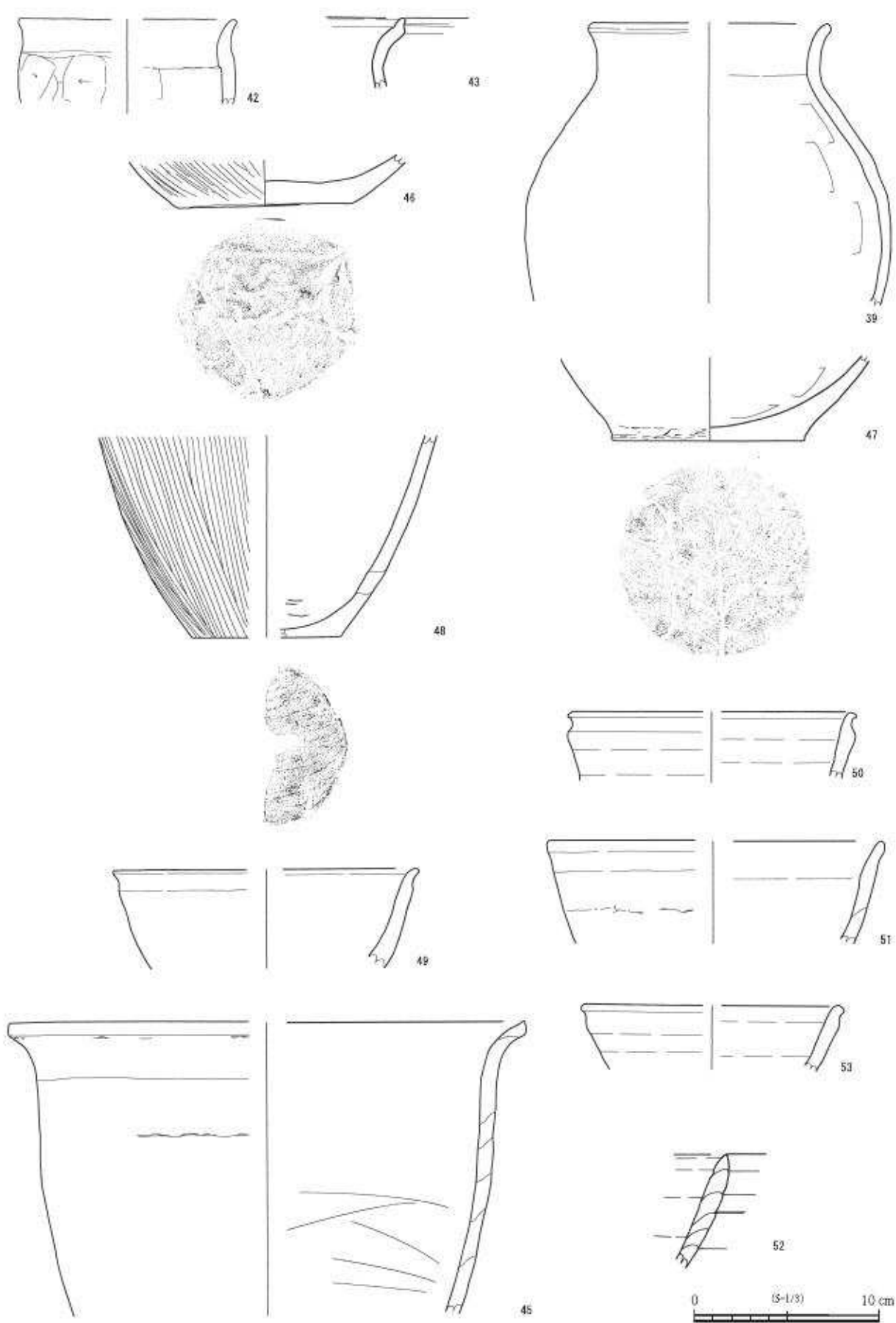
- 1. T.002 4/4 褐色 コーシム粒子少量、黒土ありなし。
- 2. T.002 4/4 褐色 コーシム粒子少量、黒土粒子微量、黒土ありなし。
- 3. T.002 4/4 褐色 コーシム粒子微量、黒土粒子微量、黒土ブロック微量、黒土ありなし。
- 4. T.002 4/4 褐色 コーシム粒子少量、黒土ありなし。
- 5. T.002 4/4 褐色 コーシム粒子少量、コーシムブロック微量、黒土粒子微量、やや黒土あり。
- 6. T.002 4/4 褐色 コーシム粒子少量、黒土粒子少量、黒土粒子あり、黒土ありなし。
- 7. T.002 4/4 褐色 コーシム粒子少量、黒土粒子少量、黒土ありなし。
- 8. T.002 4/4 褐色 コーシム粒子少量、黒土ありなし。
- 9. T.002 4/4 褐色 コーシム粒子少量、黒土ありなし。
- 10. T.002 4/4 褐色 コーシム粒子少量、黒土ありなし。
- 11. T.002 4/4 褐色 コーシム粒子少量、黒土ありなし。
- 12. T.002 4/4 褐色 コーシム粒子少量、黒土ありなし。
- 13. T.002 4/4 褐色 コーシム粒子少量、黒土ありなし。
- 14. T.002 4/4 褐色 コーシム粒子少量、黒土ありなし。
- 15. T.002 4/4 褐色 コーシム粒子少量、黒土ありなし。
- 16. T.002 4/4 褐色 コーシム粒子少量、黒土ありなし。
- 17. T.002 4/4 褐色 コーシム粒子少量、黒土ありなし。
- 18. T.002 4/4 褐色 コーシム粒子少量、黒土ありなし。
- 19. T.002 4/4 褐色 コーシム粒子少量、黒土ありなし。
- 20. T.002 4/4 褐色 コーシム粒子少量、黒土ありなし。
- 21. T.002 4/4 褐色 コーシム粒子少量、黒土ありなし。
- 22. T.002 4/4 褐色 コーシム粒子少量、黒土ありなし。
- 23. T.002 4/4 褐色 コーシム粒子少量、黒土ありなし。
- 24. T.002 4/4 褐色 コーシム粒子少量、黒土ありなし。
- 25. T.002 4/4 褐色 コーシム粒子少量、黒土ありなし。
- 26. T.002 4/4 褐色 コーシム粒子少量、黒土ありなし。
- 27. T.002 4/4 褐色 コーシム粒子少量、黒土ありなし。
- 28. T.002 4/4 褐色 コーシム粒子少量、黒土ありなし。
- 29. T.002 4/4 褐色 コーシム粒子少量、黒土ありなし。
- 30. T.002 4/4 褐色 コーシム粒子少量、黒土ありなし。
- 31. T.002 4/4 褐色 コーシム粒子少量、黒土ありなし。
- 32. T.002 4/4 褐色 コーシム粒子少量、黒土ありなし。
- 33. T.002 4/4 褐色 コーシム粒子少量、黒土ありなし。
- 34. T.002 4/4 褐色 コーシム粒子少量、黒土ありなし。



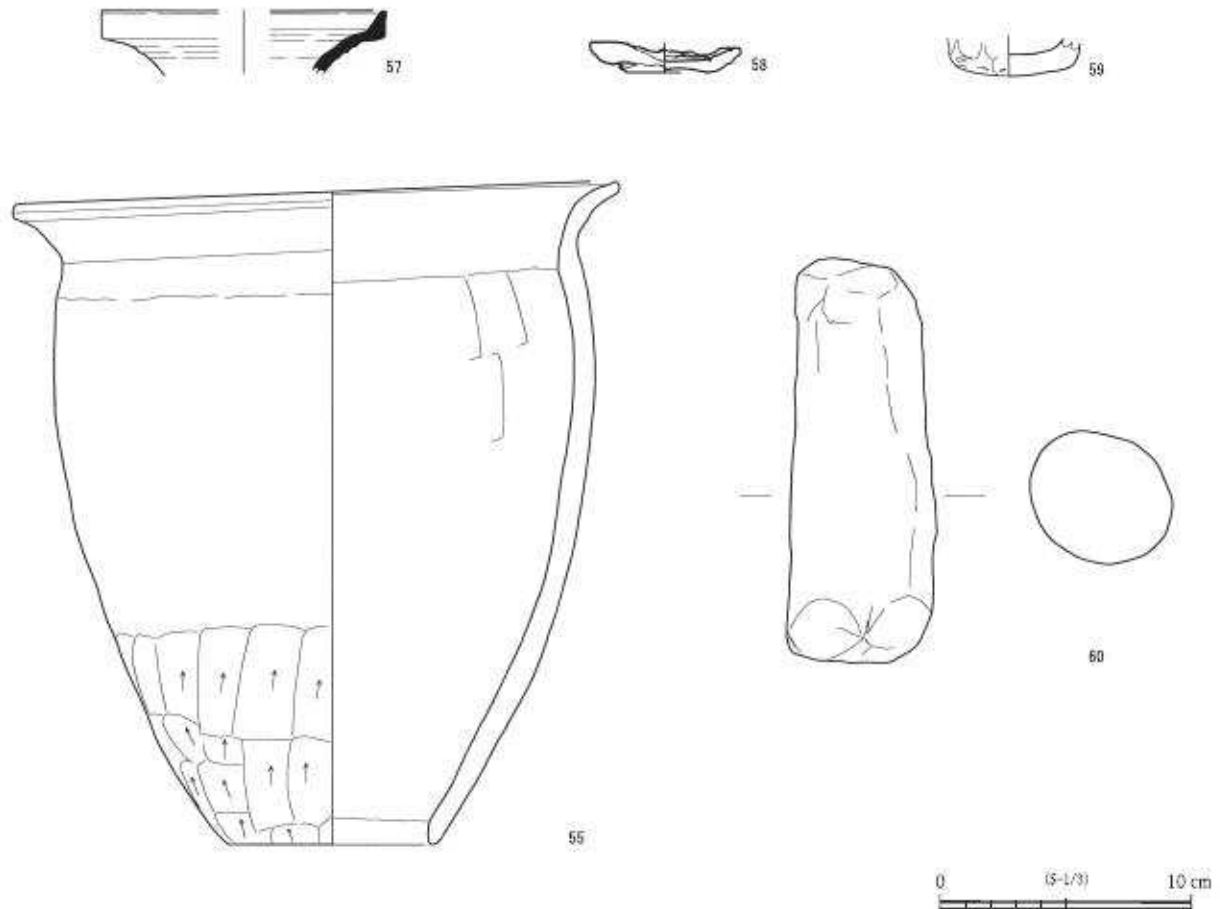
第15図 SI-02カマド・出土遺物 (1)



第16図 SI-02出土遺物 (2)



第17図 SI-02出土遺物 (3)



第18図 SI-02出土遺物 (4)

第7表 SI-02 出土遺物観察表

番号	種別・器種	口径	器高	底径	胎土	色調	特徴	備考	位置
23	灰恵器杯	-	(11)	(132)	白色粒子	5B/G5/1 青灰色	内外面ロクロナデ。底部回転ヘラケリ。底部周縁磨減。		1区覆土
24	土師器杯	13.9	4.2	-	雲母、白色、 小礫	10YR6/4 にふい黄橙色	口縁部内外面ヨコナデ。底部内面ミガキ、外面ナデ。	PL9	No.13
25	土師器杯	12.3	3.9	-	雲母、白色	7.5YR6/6 橙色	口縁部ヨコナデ後内面ヘラミガキ。底部上半ケズリ後ナデ、下半ケズリ。	PL9	No.4
26	土師器杯	12.9	3.8	-	雲母、黒色、 白色、赤褐色	7.5YR7/6 橙色	口縁部内外面ヨコナデ。底部内面ミガキ、外面上半ケズリ後ナデ、下半ケズリ。	PL9	No.5
27	土師器杯	[13.4]	(3.6)	-	雲母、長石、 石英	5YR4/1 褐色灰色	口縁部内外面ヨコナデ。底部外面ケズリ後ナデ。底部内面は斑点状剥離が顕著。	PL9	3区2層
28	土師器杯	-	-	-	雲母、長石、 石英	7.5YR5/3 にふい褐色	口縁部内面ヨコナデ、外面ヘラナデ。		3区1層
29	土師器杯	-	-	-	雲母、石英	5YR4/3 にふい赤褐色	口縁部内外面ヨコナデ。底部内面ナデ、外面ケズリ。		2区3層
30	土師器杯	-	-	-	雲母、長石、 石英	2.5YR4/1 赤灰色	口縁部内面ヨコナデ、外面ヘラナデ。内面口縁下にヘラ痕。	PL9	No.9
31	土師器杯	-	-	-	雲母、長石	5YR7/3 にふい橙色	口縁部内外面ヨコナデ、外面口縁下にヘラナデ。底部外面ケズリ後ナデ。	PL9	1区1層
32	土師器杯	-	-	-	雲母、長石、 白色粒子	5YR4/2 灰褐色	口縁部内外面ヨコナデ。底部外面ヘラケズリ。		3区1層
33	灰恵器蓋	[14.4]	2.1	-	雲母、白色	5Y6/1 灰色	内外面ロクロナデ。天井部回転ヘラケズリ(右)。	PL12	1区1層
34	灰恵器蓋	-	(1.8)	-	砂粒	5G4/1 暗緑灰色	内外面ロクロナデ。つまみ周囲に接合時のロクロナデ。つまみ接合部に細かいひび割れ。	PL12	4区ベルト2層
35	土師器 小型甕	17.9	13.2	8.5	雲母、黒色、 白色、小礫	10YR6/3 にふい黄橙色	頸部内外面ヨコナデ。胴部内面ヘラナデ、外面ナデ。	PL11	No.6
36	土師器 小型甕	14.7	16.0	7.2	雲母、白色、 小礫	7.5YR7/4 にふい橙色	頸部内外面ヨコナデ。胴部内面ヘラナデ、外面上半ナデ、下半ケズリ。	PL9	No.8 4区3層 3区3層
37	土師器甕	19.0	21.3	8.4	白色、小礫	10YR7/3 にふい黄橙色	頸部内外面ヨコナデ。胴部内面ヘラナデ、外面上半ナデ、下半ケズリ後ヘラナデ。	PL10	No.11

番号	種別・器種	口径	器高	底径	胎土	色調	特徴	備考	位置
38	土師器甕	16.0	25.2	7.0	雲母、小礫、石英	7.5YR6/6 橙色	頸部内外面ヨコナデ。胴部内面ヘラナデ、外面上半ナデ、下半ケズリ。	PL10	No.10
39	土師器小型甕	[12.6]	(15.0)	-	雲母、白色粒子	2.5YR5/3 にふい赤褐色	頸部内外面ヨコナデ。胴部内面ヘラナデ、外面ナデ。	PL10	2区3層
40	土師器小型甕	[14.2]	(5.4)	-	白色粒子	7.5YR7/6 橙色	頸部内外面ヨコナデ。胴部内面ヘラナデ、外面ケズリ後ヘラナデ。	PL10	1区覆土
41	土師器小型甕	[13.4]	(5.9)	-	長石、石英、雲母	7.5YR7/6 橙色	頸部内外面ヨコナデ。胴部内面ヘラナデ、外面ケズリ後ヘラナデ。	PL9	4区3層
42	土師器小型甕	[14.0]	(5.6)	-	長石、石英、雲母	5YR6/4 にふい橙色	頸部内外面ヨコナデ。胴部内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ。		3区2層
43	土師器甕	-	-	-	長石、石英、雲母	2.5YR5/4 にふい赤褐色	頸部内外面ヨコナデ。		2区1層
45	土師器甕	[27.6]	(15.7)	-	長石、白色粒子、赤褐色粒子	2.5YR6/4 にふい橙色	頸部内外面ヨコナデ。胴部内面ヘラナデ、外面ナデ。輪積み痕が残る。	PL10	No.2、3、3区2層、3層
46	土師器甕	-	(2.6)	9.4	長石、石英、雲母、小礫	5YR6/3 にふい橙色	胴部外面ヘラミガキ。底部木葉痕。		No.1
47	土師器甕	-	(4.5)	10.2	小礫、長石	5YR6/3 にふい橙色	内面ヘラナデ、外面ナデ。底部木葉痕。	PL10	No.10
48	土師器甕	-	(10.8)	(8.0)	小礫、雲母、石英	7.5YR5/4 にふい褐色	外面ヘラミガキ。輪積み痕が残る。		1区1層、2区1層、4区ベルト2層
49	土師器鉢	[16.2]	(5.3)	-	小礫、雲母、長石、白色粒子	5YR5/2 灰褐色	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面ヘラナデ、外面ナデ。		カマド袖芯材
50	土師器鉢	[15.0]	(3.7)	-	小礫、雲母、黒色粒子、白色粒子	N3/暗灰色	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面ヘラナデ。口唇部が強く外反する。		1区覆土
51	土師器鉢	[17.6]	(5.5)	-	小礫、雲母、長石、石英	2.5YR5/4 にふい赤褐色	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面ヘラナデ、外面ナデ。		4区3層
52	土師器鉢	-	-	-	小礫、白色粒子	N2/黒色	口縁部内面ナデ。胴部内面ヘラケズリ、外面ナデ。内外面黒色処理(?)	PL12	4区1層
53	土師器鉢	[13.4]	(3.5)	-	小礫、雲母、白色粒子	2.5Y6/3 にふい黄色	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面ヘラナデ。		1区1層
55	土師器瓶	23.5	26.2	8.2	雲母、白色粒子、赤褐色粒子、小礫、石英	5YR5/4 にふい赤褐色	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面ヘラナデ、外面上半ナデ、下半ヘラケズリ。	PL11	No.12
57	須恵器長頸壺	(13.0)	(2.5)	-	白色粒子、黒色粒子	10GY5/1 緑灰色	内外面ロクロナデ。内面にわずかに自然釉。	PL12	確認面
58	手捏土器	5.9	1.2	3.5	長石、雲母、石英、小礫	5YR7/4 にふい橙色	内面底部周縁が沈線状。	PL11	1区覆土
59	手捏土器	-	(1.6)	5.0	長石、雲母	5YR5/4 にふい赤褐色	底部に丸み。体部は指でつまんで持ち上げる。	PL11	4区

番号	器種	計測値				胎土	特徴	備考	位置
		最小径	最大径	長さ	重さ				
60	土製品支脚	5.0	5.9	16.2	545g	白色、赤褐色	2.5YR5/6 明赤褐色	PL11	No.7

第4節 中世

(1) 遺構

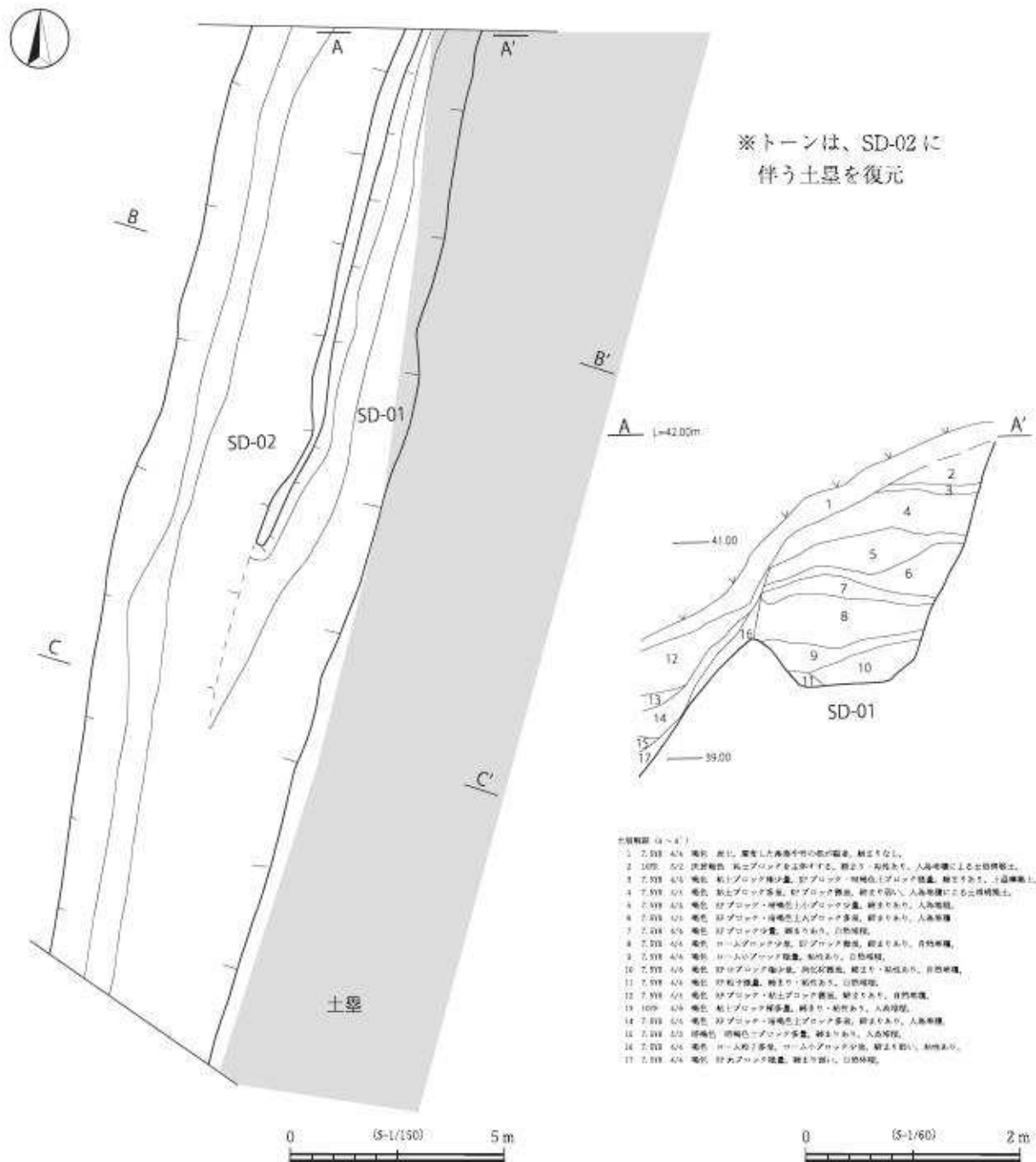
SD-01 (第1号堀跡、第19～21図、第8表、遺構図版2・4、遺物図版12)

曲輪Ⅰと曲輪Ⅱとの間の斜面上位にあり、調査された長さは16.9mを測る。長軸方向は、N-13°-Eを指す。北側はさらに調査区外に延びている。南側の先端は西に向かって緩やかに屈曲し、2号堀跡に切られている。確認された上幅は2m内外、下幅は0.5～0.8mで、断面形は箱型を呈する。旧表土(第20図6層)から、KP層下位の暗褐色ローム層を0.4mほどまで掘り込んで構築されている。掘り上げられた土は、斜面上位側に盛り上げられて土塁が構築されている。このことは、SD-01土層及び土塁を構築する土層にKP層が含まれることから判断できる。ただし、SD-02掘削時には、SD-01は自然堆積により半ば埋っていた。したがって、SD-01と土塁を造成し、一定期間館が機能した後、SD-02の掘削及び土塁の拡幅が行われている。また、当時の土塁上面と堀跡底面の比高は約2.5mを測る。

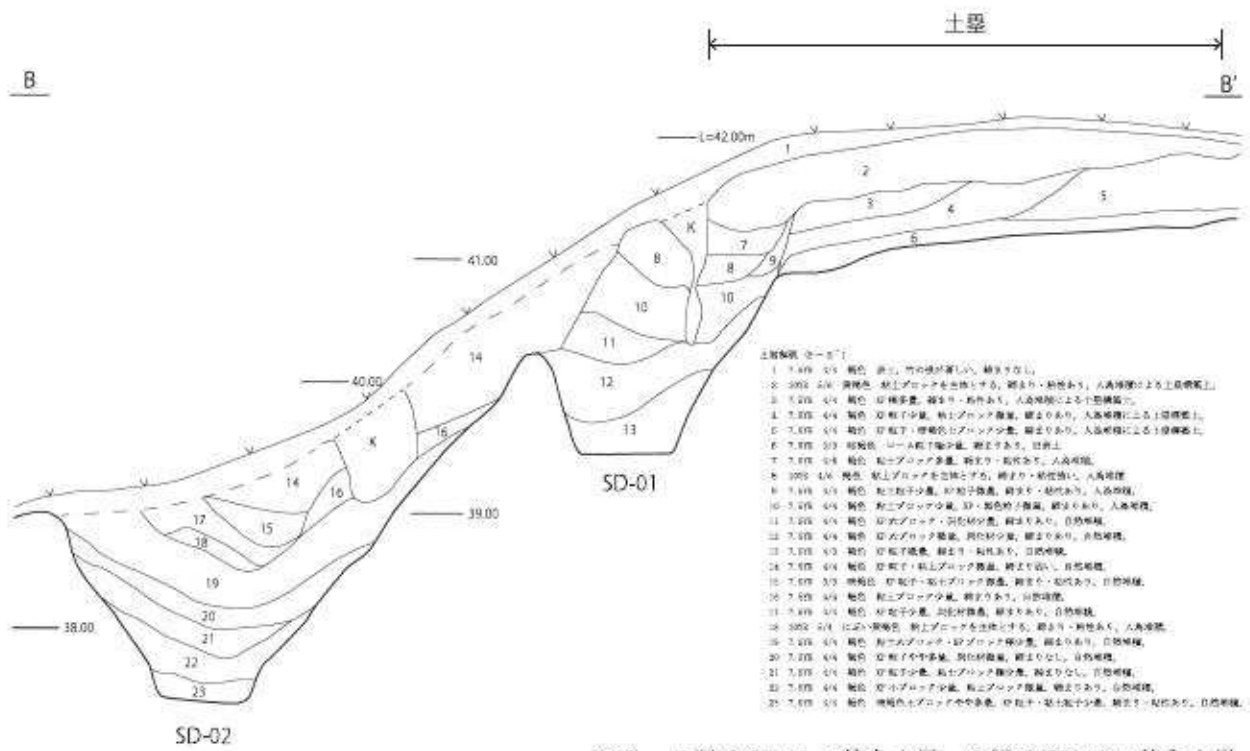
SD-02 (第2号堀跡、第19～21図、第9表、遺構図版2・4、遺物図版12)

曲輪Ⅰと曲輪Ⅱとの間の斜面中位にあり、調査区を直線的に横切り、さらに南北それぞれの調査区外に延びている。長軸方向は、N-16°-Eを指す。SD-01を切って構築されている。完全に埋没して平坦面状を呈しており、位置も斜面中位であることから、調査前は犬走りと考えられていた。推定で、表土から2.5mほど地山を掘り込んで構築されたもので、断面形は薬研堀の形状を呈している。掘り上げられた土は、SD-01を埋め、さらにその上位に盛り上げて土塁を構築している。現在の土塁上面と堀跡底面との比高は約4.8mを図る。

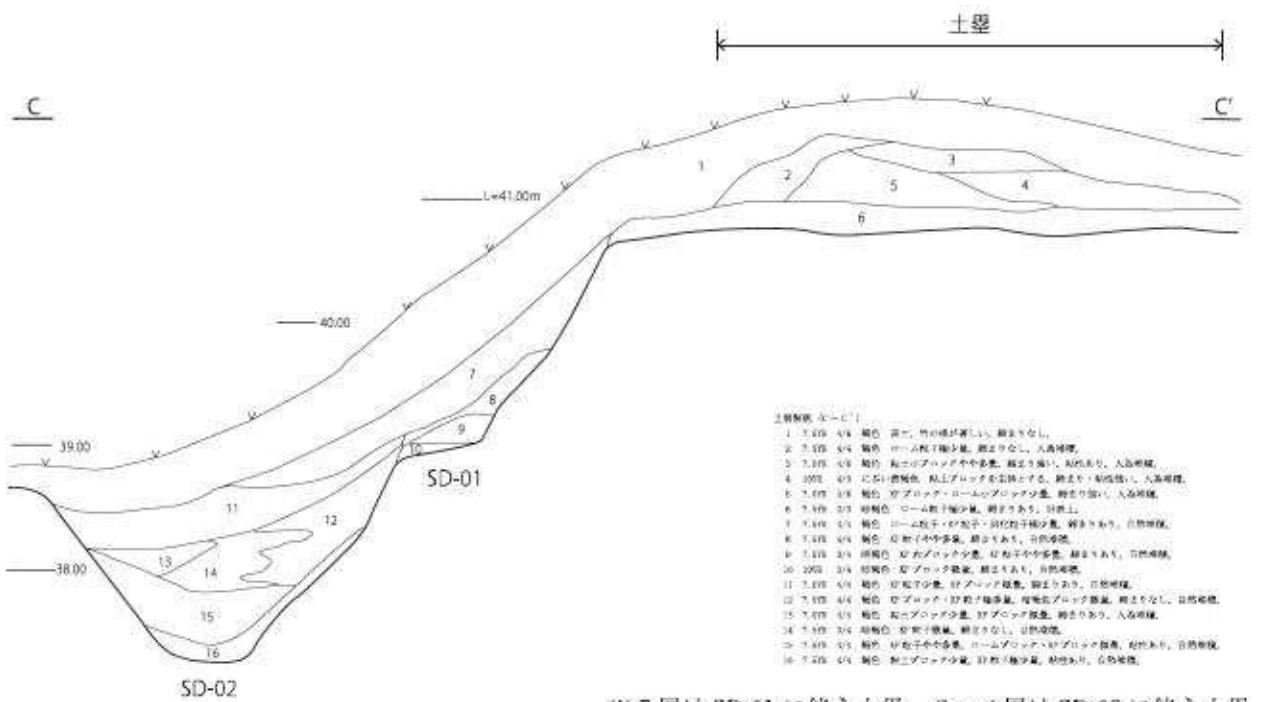
覆土は、自然堆積により埋まった後、一部で人為的に埋め戻しされている。(B-B' 18層、C-C' 13層)。この時が廃城になった時期の可能性もある。残った窪みに土砂が自然堆積し、現状に至っている。



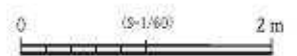
第19図 SD-01・02



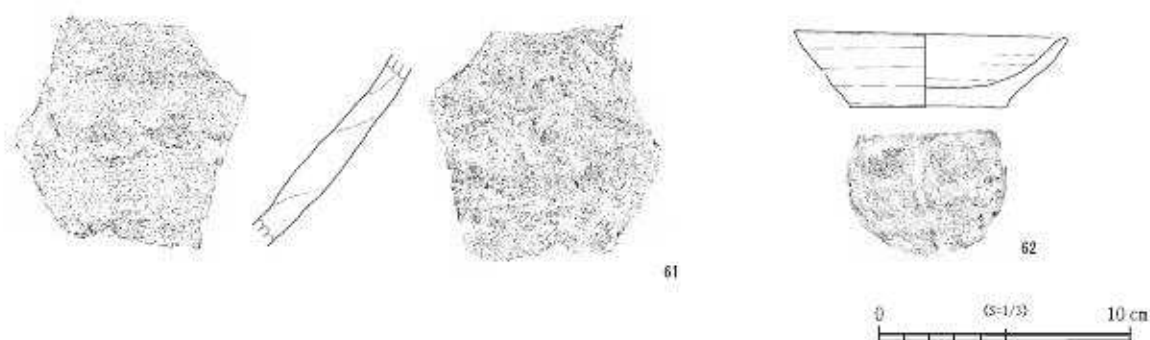
※ 3～5層はSD-01に伴う土層、2層はSD-02に伴う土層



※ 5層はSD-01に伴う土層、2～4層はSD-02に伴う土層



第20図 SD-01・02土層



第21図 SD-01・02出土遺物

第8表 SD-01 出土遺物観察表

番号	種別・器種	口径	器高	底径	胎土	色調	特徴	備考	位置
61	陶器	-	-	-	小礫、白色粒子、黒色粒子	10YR5/3 にふい黄褐色	内面強いヨコナデ。外面多方向のナデ。	15-16C PL12	壁際

第9表 SD-02 出土遺物観察表

番号	種別・器種	口径	器高	底径	胎土	色調	特徴	備考	位置
62	土師質土器 小皿	10.7	3.0	6.2	石英、金雲母、赤褐色粒子、角閃石	7.5YR8/8 黄褐色	内外面ロクロナデ(右)。底部回転糸切り。全体に磨滅。	PL12	覆土

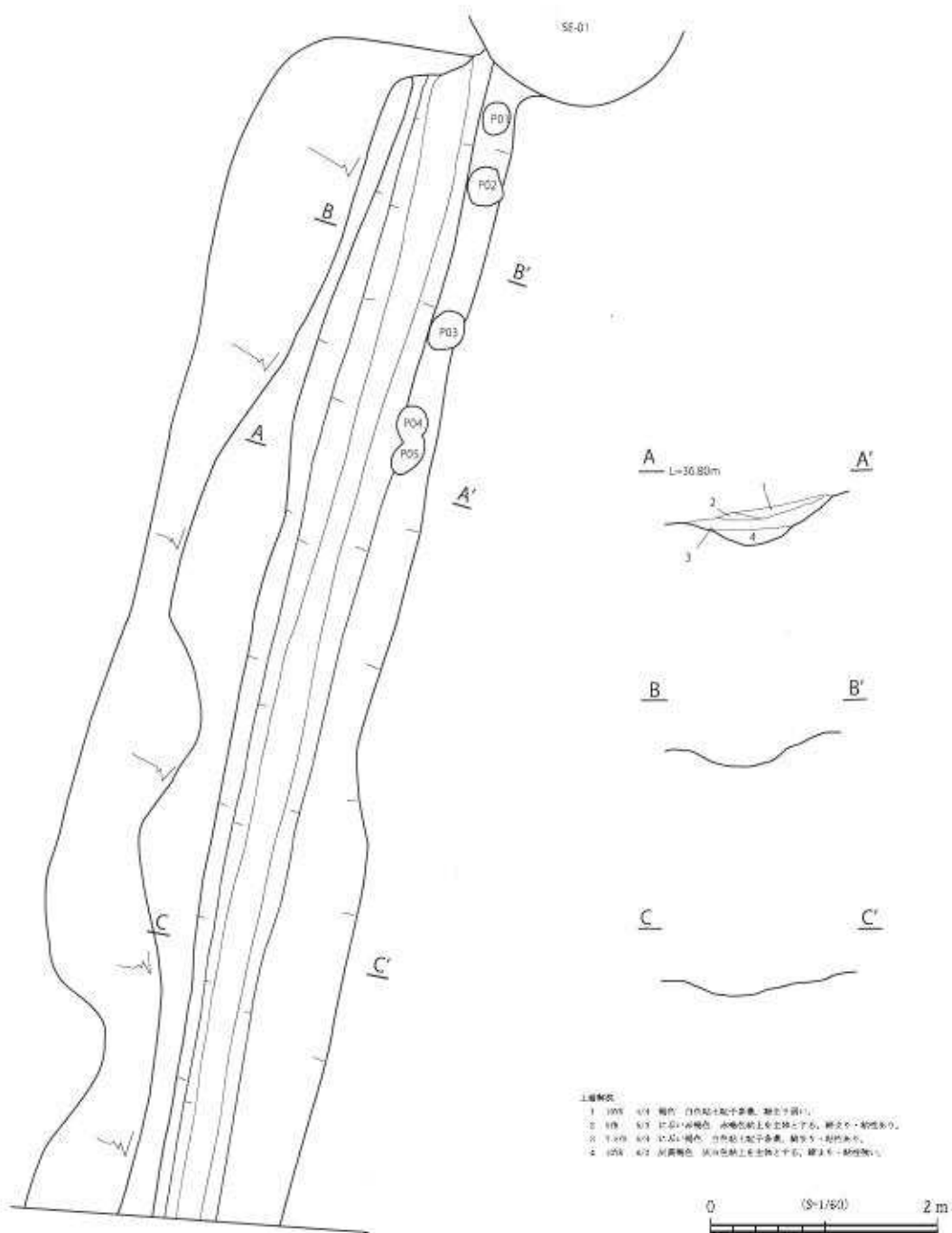
SD-03 (第22・23図、第10表、遺構図版4・5、遺物図版12・13)

曲輪ⅡのF08区に確認された。調査された長さは、10.8mを測る。長軸方向は、N-12°-Eを指す。南側は、さらに調査区外に延びている。上幅は1.1~1.8m、下幅は0.2~0.3m、深さは0.3m内外を測る。本跡の西側は、0.3mほどの高さに地山が掘り残されている。本跡の北端はSE-01につながっているが、両者の関連性については明確にはできなかった。覆土は自然堆積で、粘土粒子を多量に含み、東側の斜面の粘土表面が崩れたことによって埋没したものと判断される。

遺物は、陶器・内耳土鍋が破片の状態出土している。

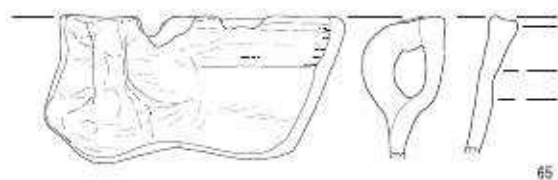
第10表 SD-03 出土遺物観察表

番号	種別・器種	口径	器高	底径	胎土	色調	特徴	備考	位置
63	陶器耳付小 甕乃至耳付 水注	[42]	4.9	4.5	小礫、白色粒子	5Y6/4 オリーブ黄色	胴が張り、肩に耳の剥離痕。内外面に灰釉施施。胴部下 半及び底部露胎。底部回転糸切り(右)。	15C前半 PL12	2区覆土
64	土師質土器 土鍋	30.5	13.0	17.5	石英、長石、金雲 母、赤褐色粒子	10YR5/3 にふい黄褐色	頸部外面ヨコナデ。内外面磨滅。頸部外面指頭痕、スス 付着。耳3か所(1か所は痕跡のみ)	PL12	2区覆土
65	土師質土器 土鍋	-	-	-	長石、金雲母、小 礫、角閃石、花崗 岩粒	7.5YR5/4 にふい褐色	頸部ヨコナデ(下縁は強い)。耳遺存(頸部は外側へふ くらむ)	PL13	2区覆土
66	土師質土器 土鍋	-	-	-	石英、長石、金雲 母、赤褐色粒子	7.5YR5/4 にふい褐色	耳はナデ整形。内外面磨滅して調整不明。外面スス付着。	PL13	2区覆土
67	土師質土器 土鍋	-	-	-	石英、長石、金雲 母、輝石	7.5YR5/2 灰褐色	頸部外面ヨコナデ。内面ナデ。耳接合部の外面張り付け に伴う指頭痕。	PL13	2区覆土
68	土師質土器 土鍋	-	-	-	石英、長石、金雲 母、白雲母	10YR5/2 灰黄褐色	外面頸部下端ヨコナデ。	PL13	2区覆土
69	土師質土器 土鍋	-	-	-	長石、石英、金雲 母、白雲母	5YR4/1 陶灰色	内外面とも磨滅が著しく調整不明。		2区覆土
70	土師質土器 土鍋	-	-	-	長石、石英、金雲 母、白雲母	7.5YR5/3 にふい褐色	頸部外面ヨコナデ。スス付着。		2区覆土
71	土師質土器 土鍋	-	-	-	石英、長石、白雲 母、赤褐色粒子	7.5YR5/3 にふい褐色	内面斜位のナデ。頸部外面指頭痕。下端弱いケズリ。底 部に板状の圧痕。		2区覆土
72	土師質土器 土鍋	-	-	-	石英、長石、白雲 母、金雲母、赤褐 色粒子	7.5YR5/2 灰褐色	頸部外面弱い指頭痕。下端ケズリによる面取り。	PL13	2区覆土
73	土師質土器 土鍋	-	-	-	石英、長石、金雲 母、赤褐色粒子	7.5YR5/2 灰褐色	内面頸部下端指ナデ。外面下半指頭によるヨコナデ。下 端に弱いケズリ。		2区覆土

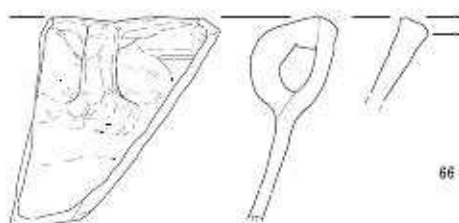


上層構造

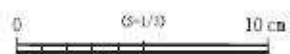
- 1 100% 474 褐色、自然結核子多量、細粒中層土。
- 2 60% 517 灰白・黄褐色、硬物粒の上を主成分とする、細文土・粘性あり。
- 3 100% 479 灰白・褐色、自然結核子多量、細文土・粘性あり。
- 4 100% 472 灰黄褐色、硬物粒の上を主成分とする、細文土・粘性あり。



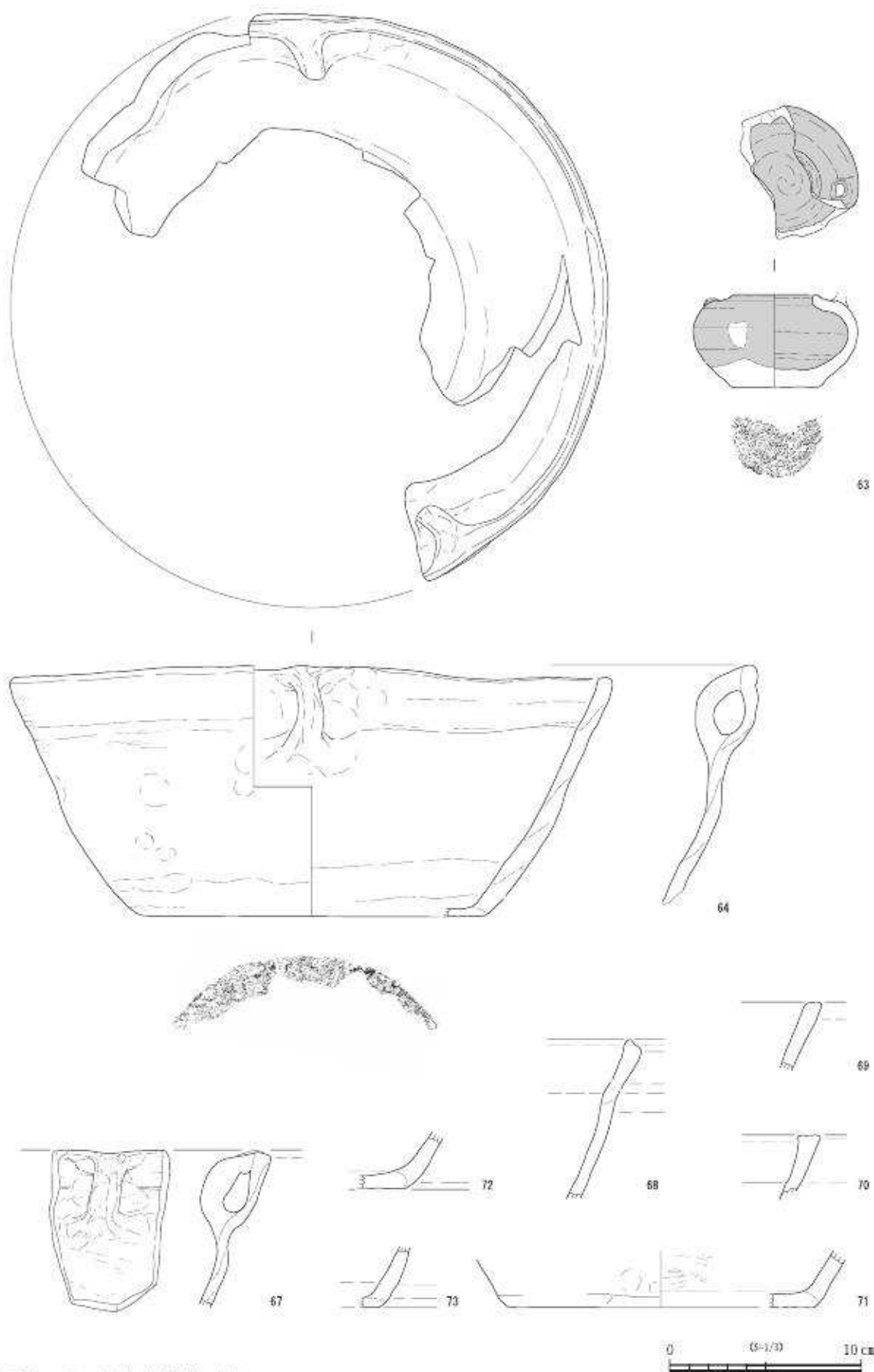
65



66



第22図 SD-03・出土遺物 (1)

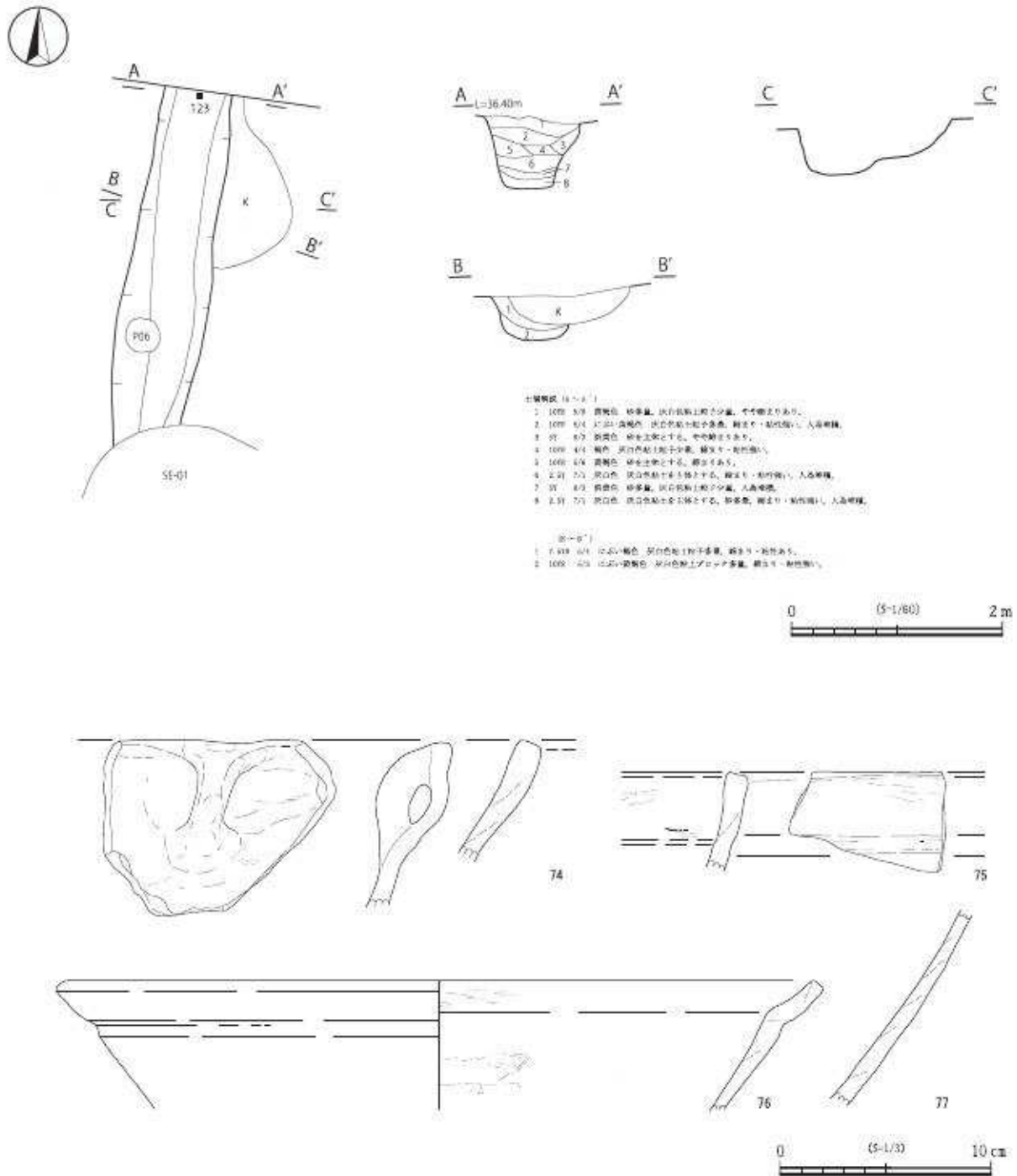


第23図 SD-03出土遺物 (2)

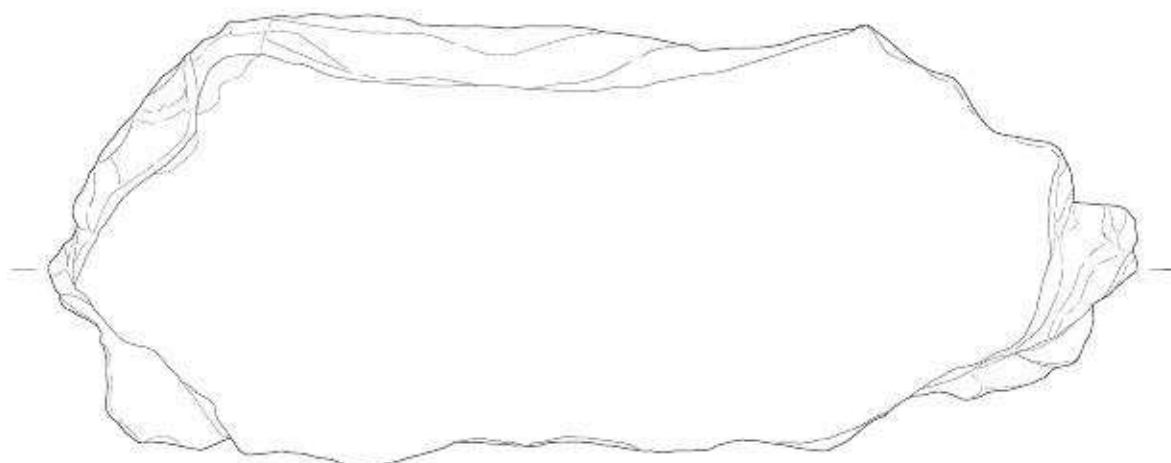
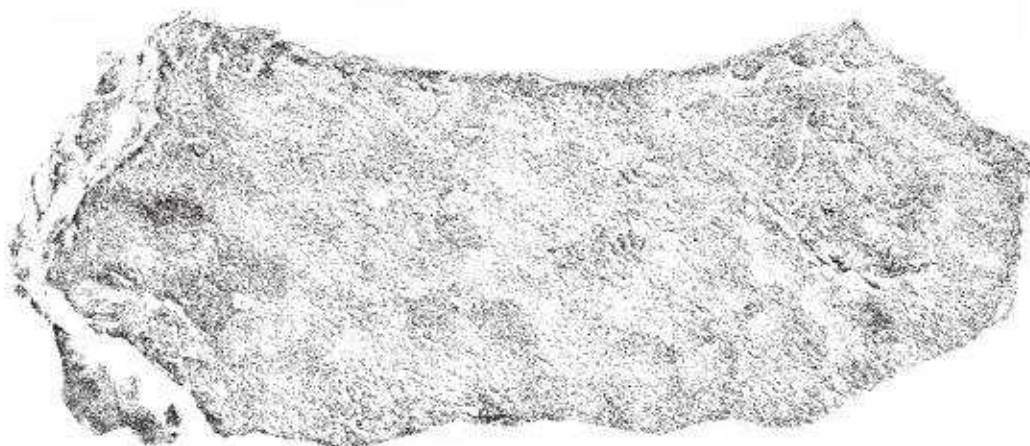
SD-04 (第24・25図、第11表、遺構図版5、遺物図版13・14)

曲輪ⅡのE08区に確認された。長軸方向はN-7°-Eを指す。北側は、さらに調査区外に延びており、調査された長さは、3.3mを測る。上幅はかく乱によって不明瞭であるが、1m内外を測るものと判断される。下幅は0.4m内外、深さは0.7m内外を測る。0.4mほどが粘土によって埋め戻されており、本跡の南端はSE-01につながっていることから、両者の関連性が考えられる。

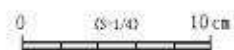
遺物は、埋め戻された粘土の上面から礫や内耳土鍋の破片が出土している。



第24図 SD-04・出土遺物 (1)



123



第25図 SD-04出土遺物 (2)

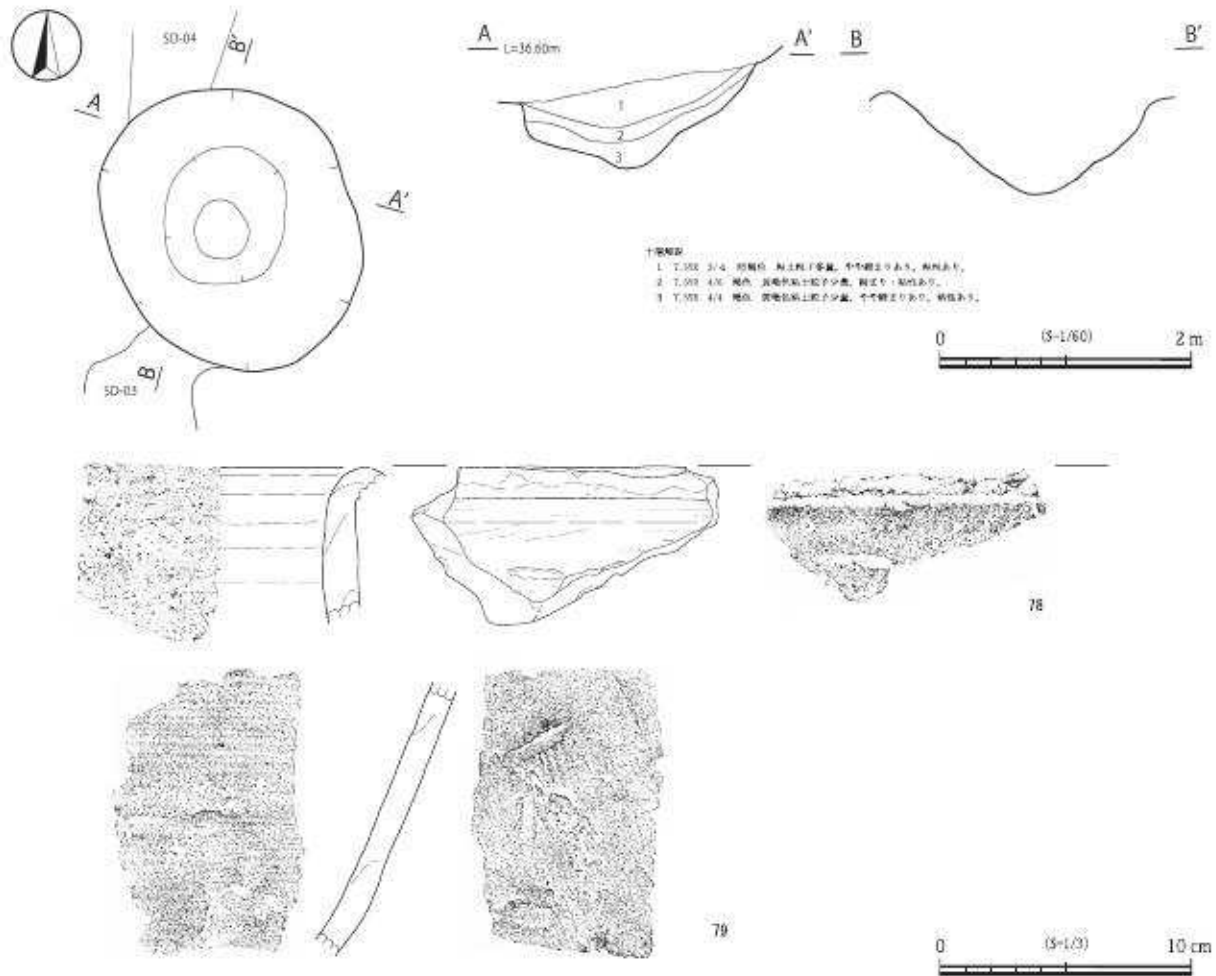
第11表 SD-04 出土遺物観察表

番号	種別・器種	口径	器高	底径	胎土	色調	特徴	備考	位置
74	土師質土器 土鍋	-	-	-	石英、長石、金 雲母	10YR5/1 褐色	外面耳接合部に指頭痕。他は磨減が著しく不明瞭。	PL13	6層上面
75	土師質土器 土鍋	-	-	-	石英、長石、白 雲母、角閃石、 赤褐色粒子	10YR5/2 灰黄褐色	腹部内外面ヨコナデ。一部に耳接合時のゆがみ。口縁外 面にスス付着。		6層上面
76	土師質土器 土鍋	(35.1)	(6.1)	-	石英、長石、金 雲母、角閃石	7.5YR4/2 灰褐色	口唇部・頸部ヨコナデ。外面スス付着。		6層上面
77	土師質土器 土鍋	-	-	-	石英、長石、金 雲母、角閃石、 白色針状鉱物	7.5YR5/2 灰褐色	内面ナデ（縦位、斜位）。外面スス付着。磨減。		覆土

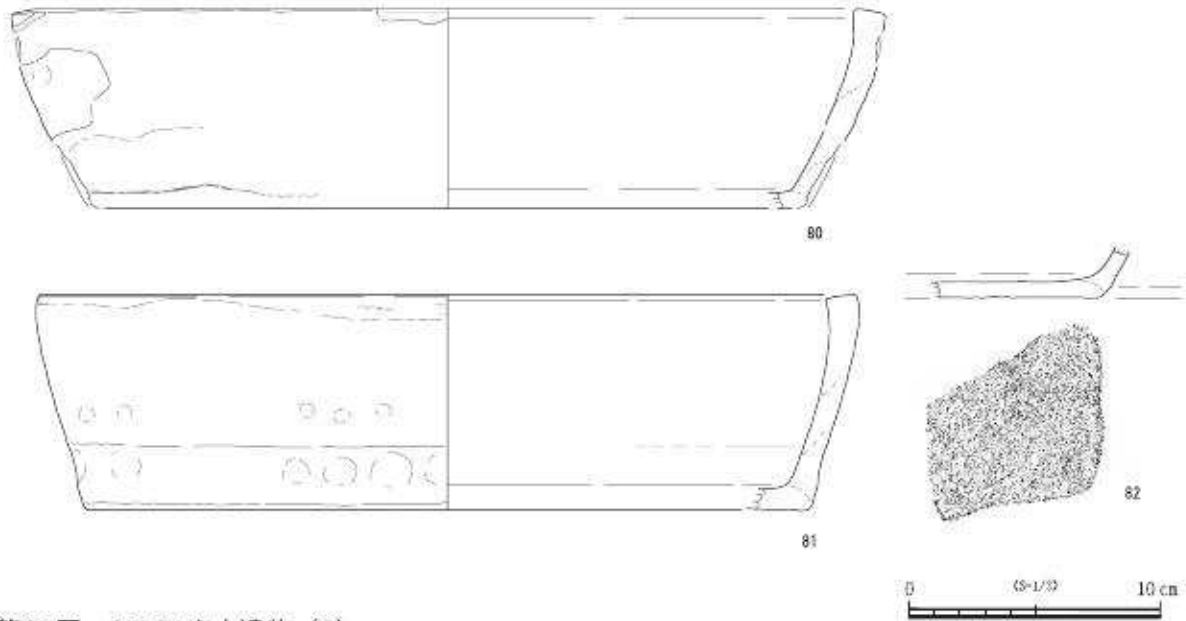
番号	器種	計測値				材質	特徴		位置
		長さ	幅	厚さ	重さ				
123	礎	57.2	241	5.0	111kg	雲母片岩	加工痕なし。	PL14	No.1、6層上面

SE-01（第26・27図、第12表、遺構図版4・5、遺物図版14）

曲輪ⅡのE08区に確認された。平面形は、長径2.3m、短径1.9mの楕円形状を呈し、長径方向はN-35°-Wを指す。底面は、深さ1mほどの掘鉢状を呈している。水を溜めた井戸跡と考えられる。覆土は褐色土、暗褐色土の自然堆積である。遺物は、陶器甕・内耳土鍋の破片が出土している。



第26図 SE-01・出土遺物 (1)



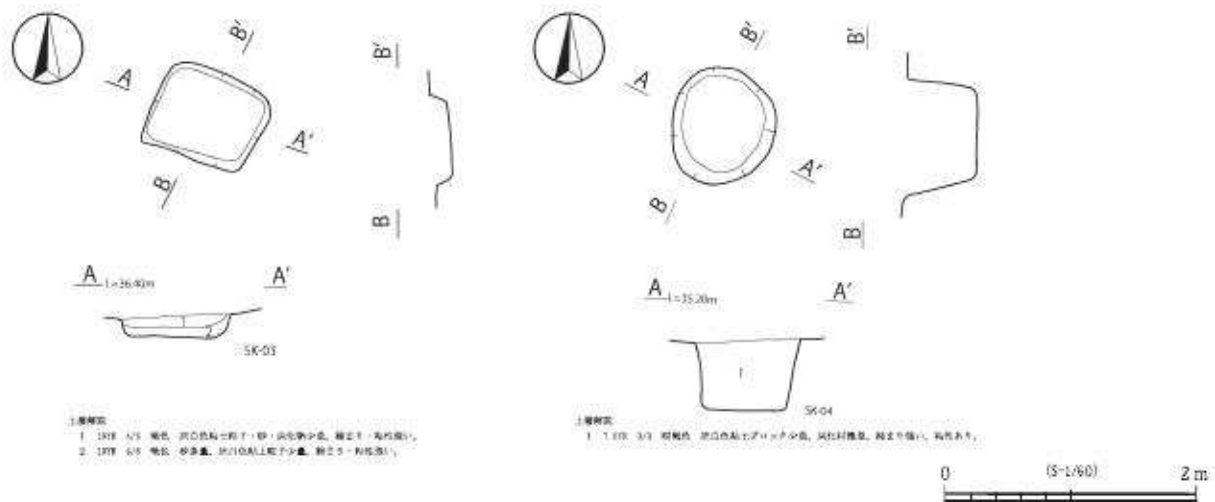
第27図 SE-01出土遺物 (2)

第12表 SE-01 出土遺物観察表

番号	種別・器種	口径	器高	底径	胎土	色調	特徴	備考	位置
78	陶器甕	-	-	-	小礫、石英、長石	7.5YR6/4 にふい橙色	内外面ヨコナデ。外反部上面に自然降灰。外面に焼成時の変色。	14C (7-8) PL14	覆土
79	陶器甕	-	-	-	小礫、石英、長石	7.5YR5/1 褐灰色	内外面ヘラナデ。	PL14	覆土
80	土師質土器 土鍋	(32.8)	(7.9)	(28.4)	石英、長石、 金雲母、白雲母	7.5YR4/1 褐灰色	胴部下端に輪積み痕。磨耗が著しく調整不明。	PL14	覆土
81	土師質土器 土鍋	(32.4)	(8.5)	(28.6)	金雲母、白雲母、 石英、長石	5YR4/1 褐灰色	口唇部強いヨコナデ。外面胴部下端に横に連続する折頭痕。	PL14	覆土
82	土師質土器 土鍋	-	-	-	石英、長石、 金雲母	5YR6/4 にふい橙色	内外面磨減。胴部下端ケスリ(?)。底部に凹凸(敷物の圧痕?)	PL14	覆土

土坑 (第28図、第13表、遺構図版5)

中世の土坑は、下表の2基を確認・調査した。このうち、SK-04は、規模形状から墓塚の可能性はあるが、明確な痕跡は確認されなかった。遺物は出土していない。



第28図 SK-03・04

第13表 中世土坑一覧表

番号	位置	長軸(径)方向	平面形	長軸(径)×短軸(径)	深さ	壁面	底面	覆土	遺物
03	E08	N-70°-W	隅丸長方形	0.9×0.7 m	0.19 m	垂直	平坦	人為堆積	無
04	D06	N-28°-E	円形	0.8×0.75	0.6 m	垂直	平坦	人為堆積	無

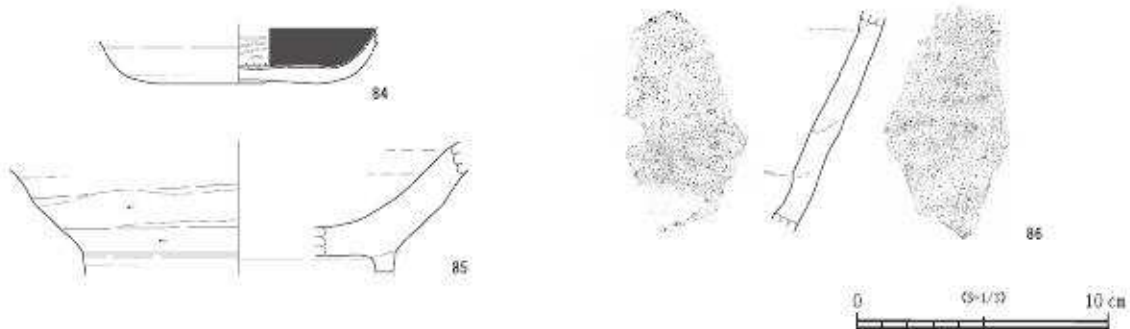
土塁 (第19図、附図、遺構図版1)

SD-01、SD-02から掘り上げた土を盛り上げて構築されている。盛土の順番は、「SD-01→SD-02 (1回目) →SD-02 (2回目)」である。

SD-01からの土による盛り土は、南トレンチ (C~C') で幅約2.2m、高さ約0.5mで、堀跡側が高い断面三角形状を呈している (5層)。一方、北トレンチ (B~B') では幅約4m、高さは0.3~0.5mで平坦に盛っている (3~5層)。SD-02からの土による盛り土は、2回行われている。北側トレンチで見ると、1回目はSD-01を埋め、灰白色粘土ブロックを混ざる土をSD-01に伴う土塁 (B~B' 3~5層) と同じ高さまで盛り上げている (7~10層)。2回目は、その土塁上に粘土ブロックを主体とする土を幅4m、現状での高さ0.4mに盛り上げている (2層)。旧地表面からの高さは、現状で0.9mを測る。しかし、南側トレンチで見られたような堀跡側を高くした三角形状に積み上げるといふ工夫は見られず、緩斜面状を呈する旧表土上に平坦に盛っているだけである。また、南側トレンチでは2回の盛り土が行われた様子が認められないことから、南側トレンチ付近の盛り土は1回だけであったものと判断される。土塁の盛土は完掘したが、遺物は存在しなかった。

曲輪 I (第29図、附図、第14表、遺物図版14)

曲輪 I の平坦面は、調査区北側を最高点として台地の周縁に向かって緩やかに下る斜面になっており、館跡の造成時に手を加えられた形跡が認められない。土塁との境界が浅い溝状を呈しているが、斜面に盛り土を行ったために、盛り土と斜面の境界が自然に溝状を呈するに至ったものと判断され、人為的に造られたものとは認められないものである。



第29図 曲輪 I 出土遺物

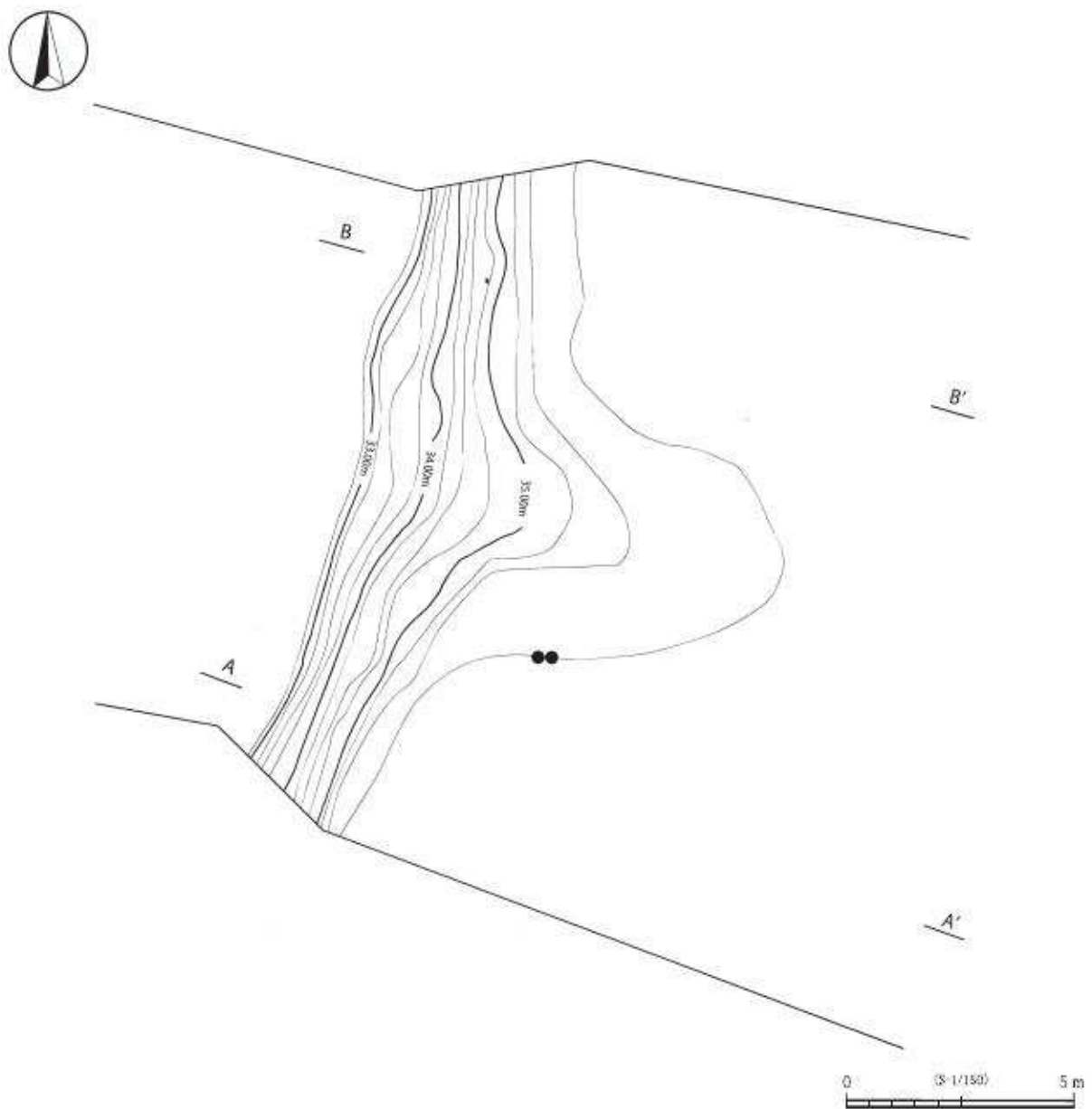
第14表 曲輪 I 出土遺物観察表

番号	種別・器種	口径	器高	底径	胎土	色調	特徴	備考	位置
84	土師器杯	-	(2.3)	(6.8)	雲母、石英、長石	10YR8/6 黄棕色	内面黒色処理。底部回転ヘラケズリ(右)。	PL14	確認面
85	陶器鉢	-	(5.4)	(12.6)	小礫、長石、黒色粒子	10YR7/1 灰白色	内面磨耗(礫石転用か?)。外面下縁回転ヘラケズリ(右)。高台内外ロクロナデ。	山茶碗系(瀬戸系か?)	確認面
86	陶器甕	-	-	-	小礫、長石	7.5YR5/3 にぶい褐色	内面ヨコナデ。外面斜位ヘラケズリ。	PL14	確認面

曲輪Ⅱ（第30～34図、附図、第15表、遺物図版14・15）

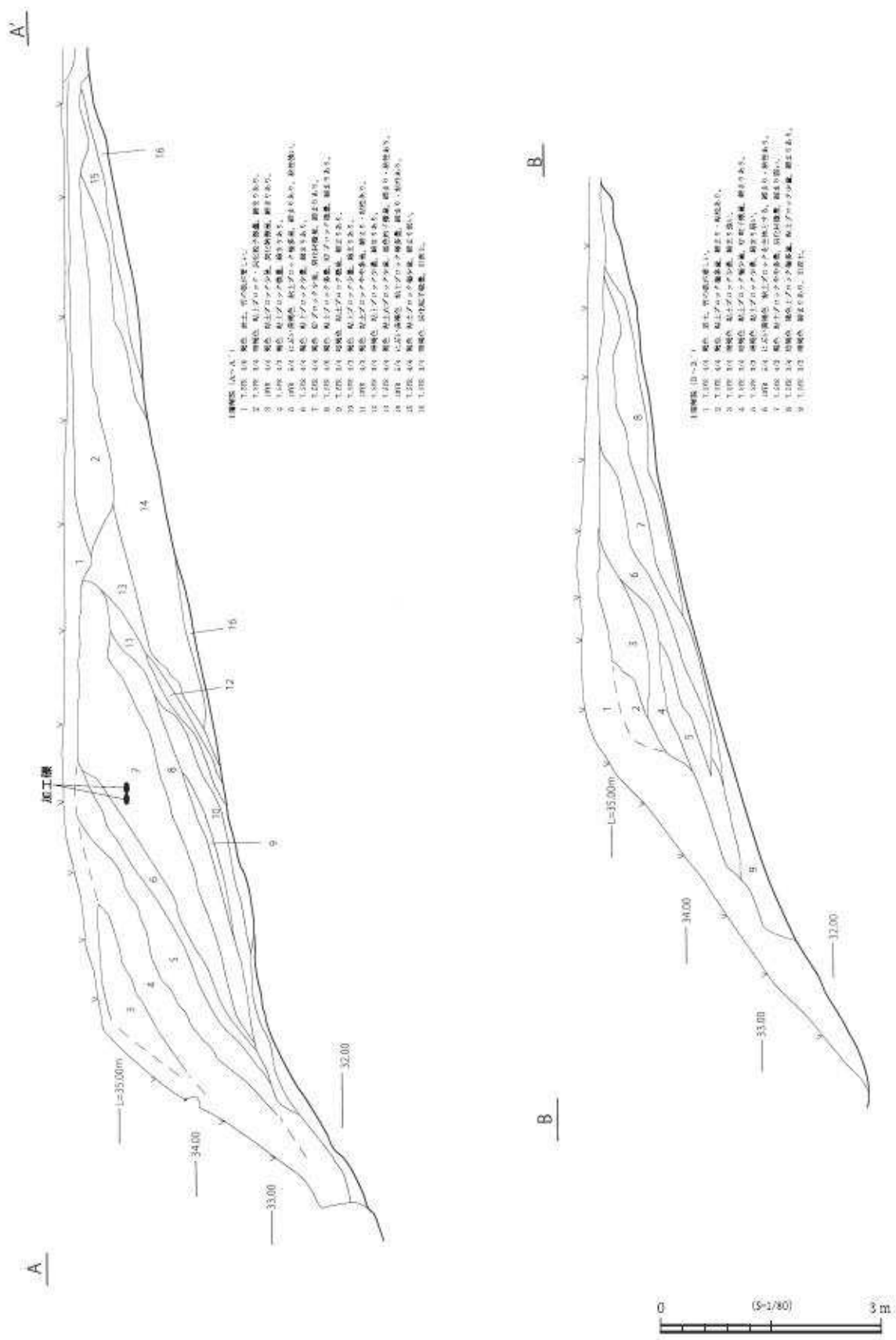
曲輪Ⅱの平坦面は、曲輪Ⅰ側の斜面上部に加えられた掘削と曲輪Ⅲ側の斜面下部に行われた盛り土によって造成されたものである。斜面上部での掘削の深さは3m前後に達するものと推定され、斜面下部での盛り土の高さは約2.2mに達している。盛り土は、旧表土面の上位から下位に向かって順番に行われている。A～A'土層11・12層以西の堆積の状況から、盛り土は2回にわたって行われたものと推定される。旧表土が緩やかな傾斜をしていることから、盛り土により先端部の急斜面を造り出し、鎗の防禦を高めている。したがって、斜面の崩壊を防ぐために何らかの工法が用いられたと考えられるが、竹の根による攪乱が著しく、確認できなかった。

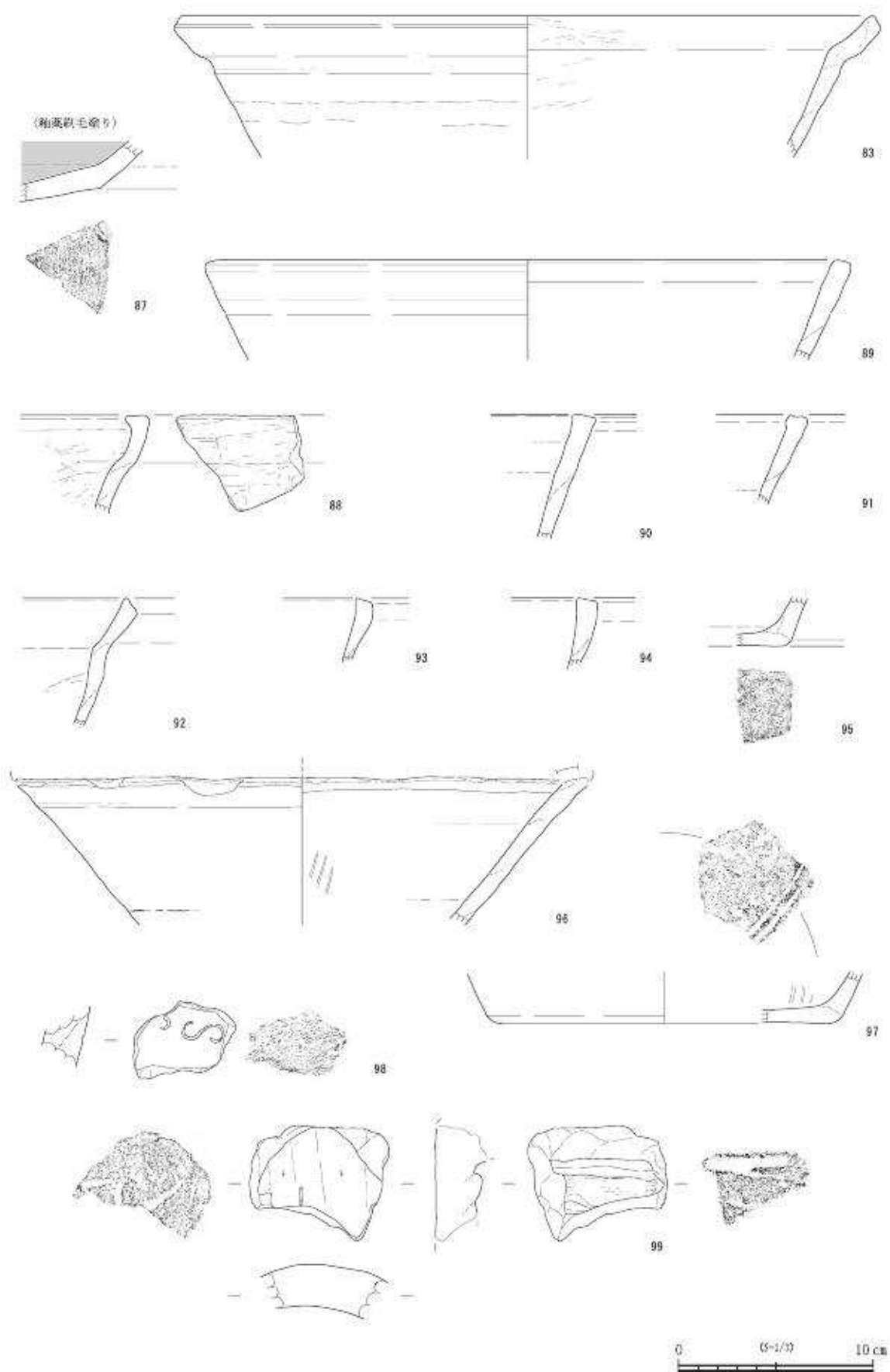
盛り土から、加工礫（加工痕のある片岩）が出土している。出土位置を第30・31図に示した。この他、盛土中からの遺物は確認されていない。



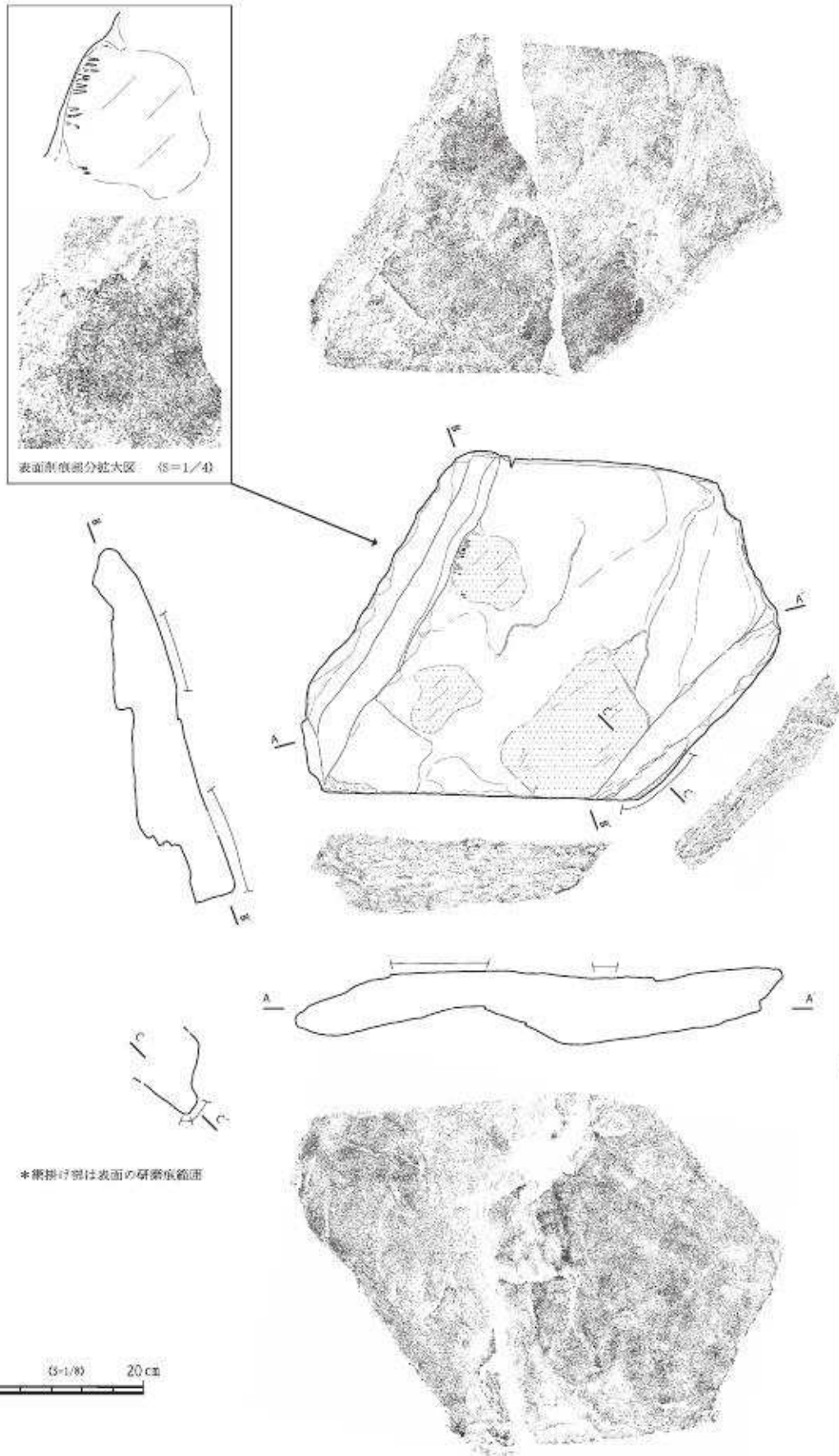
第30図 曲輪Ⅱ盛土コンタ図（●加工礫出土位置）

第31図 曲輪Ⅱ盛土土層

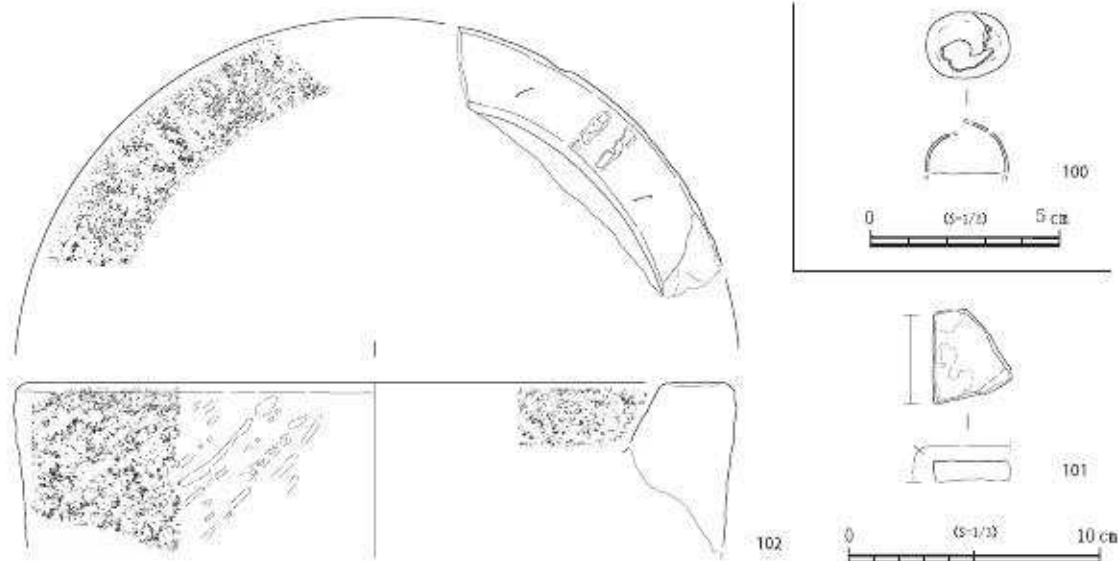




第32図 曲輪Ⅱ出土遺物 (1)



第33図 曲輪 II 出土遺物 (2)



第34図 曲輪Ⅱ出土遺物 (3)

第15表 曲輪Ⅱ出土遺物観察表

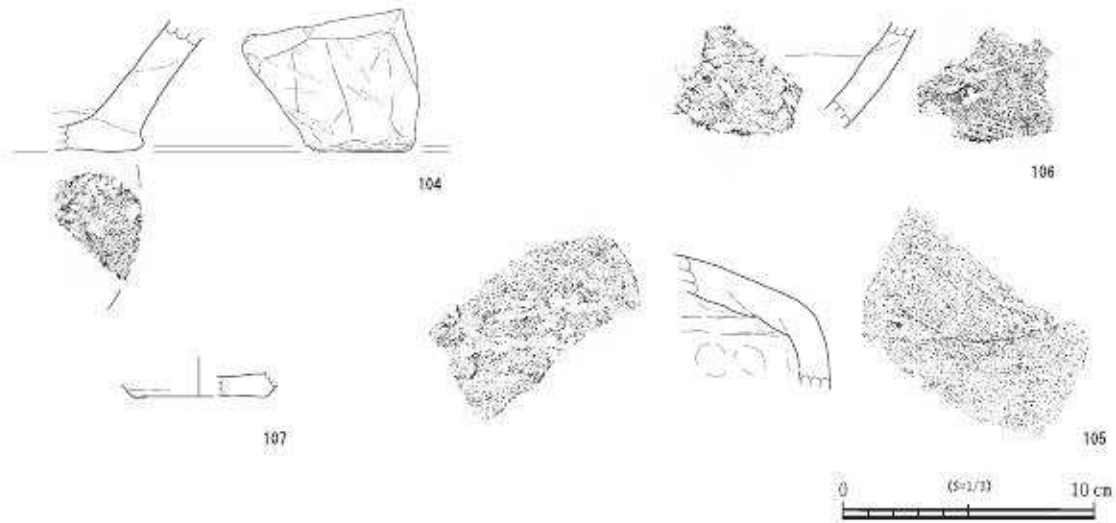
番号	種別・器種	口径	器高	底径	胎土	色調	特徴	備考	位置
83	土師質土器 土鍋	(35.4)	(7.3)	-	石英、長石、角閃石、白色針状鉱物	2.5YR4/3 にふい赤褐色	内面ナデ。口唇部及び頸部下半ヨコナデ。		攪乱中
87	陶器 (大皿類)	-	-	-	小礫、長石、白色 粒子、黒色粒子	2.5Y8/3 淡黄色	内面灰釉刷け塗り。外面回転ヘラケズリ。	古瀬戸 PL14	表採
88	土師質土器 土鍋	-	-	-	石英、長石、金雲 母、白雲母	10YR5/2 灰黄褐色	頸部内面ヨコナデ、耳貼り付け時の斜位ナデ。頸部から 胴部上端外面工具によるナデ。下位に指頭痕。		確認面
89	土師質土器 土鍋	-	-	-	石英、長石、金雲 母	10YR5/3 にふい黄褐色	内外面磨滅のため調整不明瞭。	PL14	確認面
90	土師質土器 土鍋	-	-	-	石英、長石、金雲 母	7.5Y5/3 にふい褐色	内外面磨滅のため調整不明瞭。		確認面
91	土師質土器 土鍋	-	-	-	長石、金雲母	7.5YR5/4 にふい褐色	内外面磨滅のため調整不明瞭。		確認面
92	土師質土器 土鍋	-	-	-	石英、長石、金雲 母	7.5YR5/4 にふい褐色	内外面磨滅のため調整不明瞭。胴部上位に指頭痕。		確認面
93	土師質土器 土鍋	-	-	-	長石、金雲母	10YR5/3 にふい黄褐色	内外面磨滅のため調整不明瞭。		確認面
94	土師質土器 土鍋	-	-	-	石英、長石、金雲 母、赤褐色粒子	10YR7/4 にふい黄褐色	内外面磨滅のため調整不明瞭。		確認面
95	土師質土器 土鍋	-	-	-	石英、長石、金雲 母、赤褐色粒子	5YR5/4 にふい赤褐色	内外面磨滅のため調整不明瞭。	PL15	確認面
96	土師質土器 擂鉢	(29.0)	(7.6)	-	石英、長石、金雲 母	5YR5/2 灰褐色	口唇部の破面を研磨して二次口径を作り出す。他は磨耗 して不明瞭。		確認面
97	土師質土器 擂鉢	-	-	-	石英、長石、小礫、 金雲母、角閃石	7.5YR6/6褐色	内面すり目は1単位3本以上。他は磨耗して不明瞭。	PL15	確認面
98	瓦質土器 火鉢	-	-	-	石英、長石、小礫、 赤褐色粒子、金雲 母	10YR6/4	内外面をいぶす。S字状文スタンプ。他は磨耗して不明 瞭。		確認面
99	丸瓦	-	-	-	霏母末、石英、白 色粒子、赤褐色粒 子	5Y7/1灰白色	外面ヘラナデ。内面ナデ。	古代-中世	確認面

番号	器種	計測値				材質	特徴	備考
		長さ	幅	高さ	重さ			
100	銅製品	22	17	13	1.8g	銅		PL15 確認面

番号	器種	計測値				材質	特徴	備考
		長さ	幅	厚さ	重さ			
122	石製品 加工塊	(63.4)	43.3	8.8	33.2kg	霏母片岩	表面に数か所の研磨痕	PL15 落土中
101	石製品 砥石	(3.7)	(3.2)	0.8	12g	霏母片岩	2か所に砥面	確認面
102	石製品 石臼	(28.1)	-	(6.7)	340g	安山岩	外面に工具痕。112と同一個体(?)	表土

曲輪Ⅲ（第35図、附図、第16表、遺物図版15）

曲輪Ⅲの調査区の南北両側に、1～1.5mの高さの面があり、トレンチによって確認された旧表土面と自然につながっていると判断される。したがって、これが本来の地形であると見られ、現在の平坦面は自然地形に後世になって土取りが加えられたことによって形成されたものと推定される。土取り工事が行われた時期は不明である。



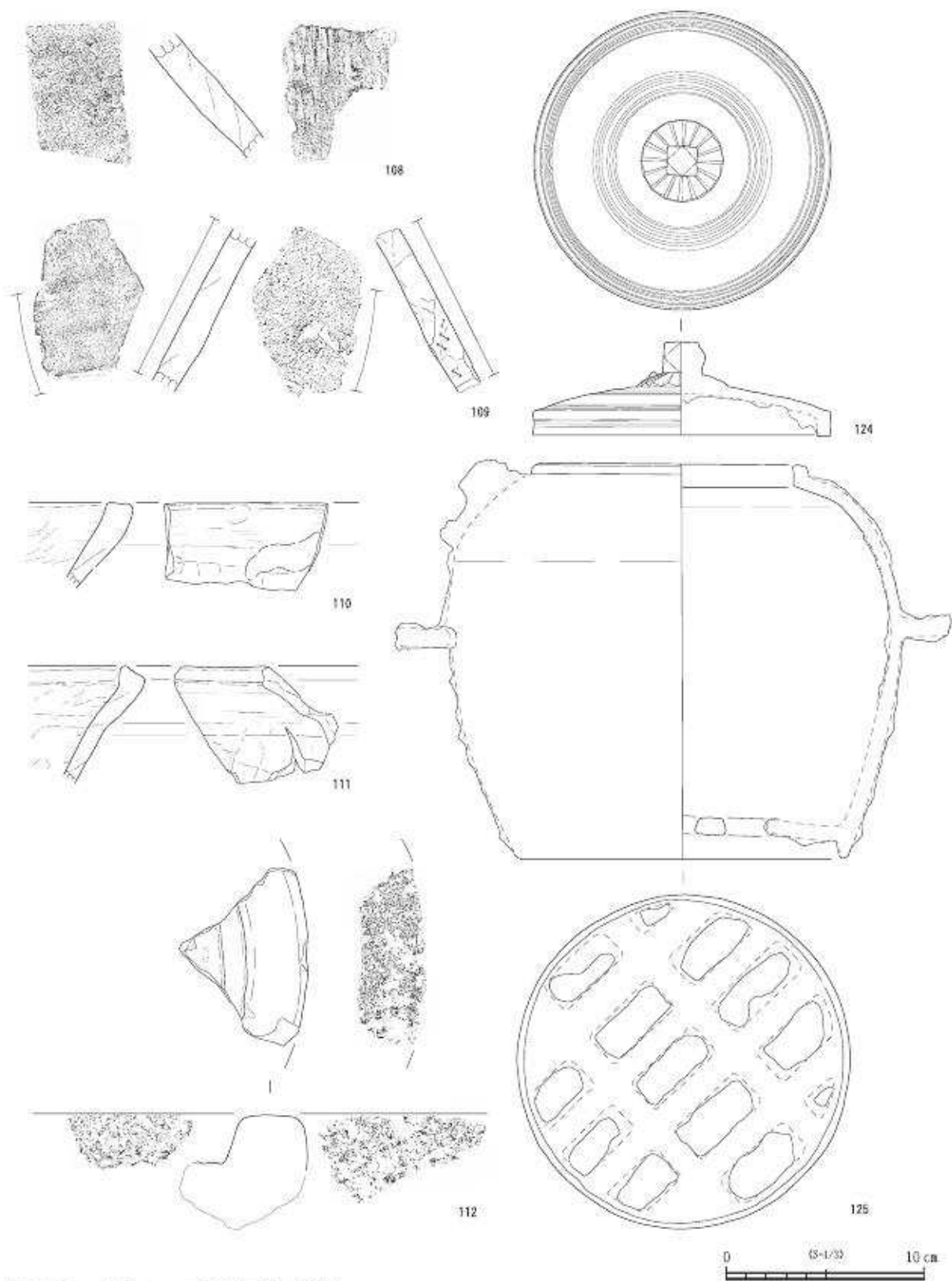
第35図 曲輪Ⅲ出土遺物

第16表 曲輪Ⅲ出土遺物観察表

番号	種別・器種	口径	器高	底径	胎土	色調	特徴	備考	位置
104	陶器鉢	-	-	-	小礫、白色粒子	25YR5/3 にふい赤褐色	外面斜位のヘラナデ後ナデ。底部砂目。内面磨減。	PL15	確認面
105	陶器甕	-	-	-	小礫、長石	10YR4/3 にふい黄褐色	外面肩部ヨコナデ。他はヘラナデ。内面整形時の指頭圧痕。		確認面
106	陶器甕	-	-	-	白色粒子、小礫	5YR4/2 灰褐色	内面指ナデ。外面ヘラナデ、櫛状工具による筋。		確認面
107	土師質土器 小皿	-	(1.2)	(5.2)	金雲母、赤褐色粒子	10YR8/4 浅黄褐色	内外面磨減が著しく調整不明瞭。	PL15	検乱層

曲輪 I 及び II 間の斜面出土遺物 (第36図、第17表、遺物図版15・16)

曲輪 I 及び II 間の斜面の調査中に、遺構に伴わずに表土や確認面等から出土した遺物を掲載する。この中で、124・125は、形状から後世の混入物と見られる。



第36図 曲輪 I・II間斜面出土遺物

第 17 表 曲輪 I・II 間斜面出土遺物観察表

番号	種別・器種	口径	器高	底径	胎土	色調	特徴	備考	位置
108	陶器甕	-	-	-	小礫、白色粒子、黒色粒子	5YR4/1 褐灰色	外面平行線たき目		確認面
109	陶器甕	-	-	-	小礫、白色粒子、黒色粒子	5YR5/4 にふい赤褐色	内面ヨコナデ後研磨（二次利用）。外面ヘラナデ。	PL15	確認面
110	土師質土器 土鍋	-	-	-	石英、長石、輝石、角閃石、金雲母	5YR4/2 灰褐色	頸部内外面ヨコナデ。胴部上端工具によるナデ。口唇部一部面取り。		確認面
111	土師質土器 土鍋	-	-	-	石英、長石、金雲母	5YR4/2 灰褐色	内面弱いナデ。頸部外面強いヨコナデ。胴部上端工具によるナデ。		確認面

番号	器種	計測値				材質	特徴	備考	備考
		長さ	幅	高さ	重さ				
112	石製品 石臼	-	-	-	190g	安山岩	102と同一面体(?)		表土

番号	器種	計測値				材質	特徴	備考	備考
		長さ	幅	高さ	重さ				
124	蓋	-	15.2	4.7	0.8kg	鉄	125とセット(?)	PL15	表土
125	火消し窓状 鉄製品	-	口径 13.8	20.5	7.4kg	鉄	124とセット(?)	PL16	表土

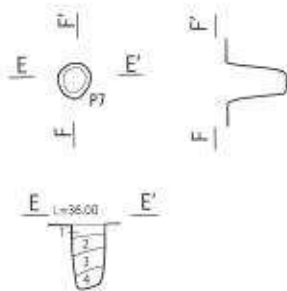
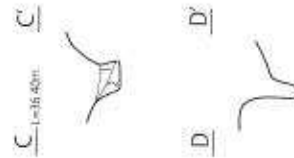
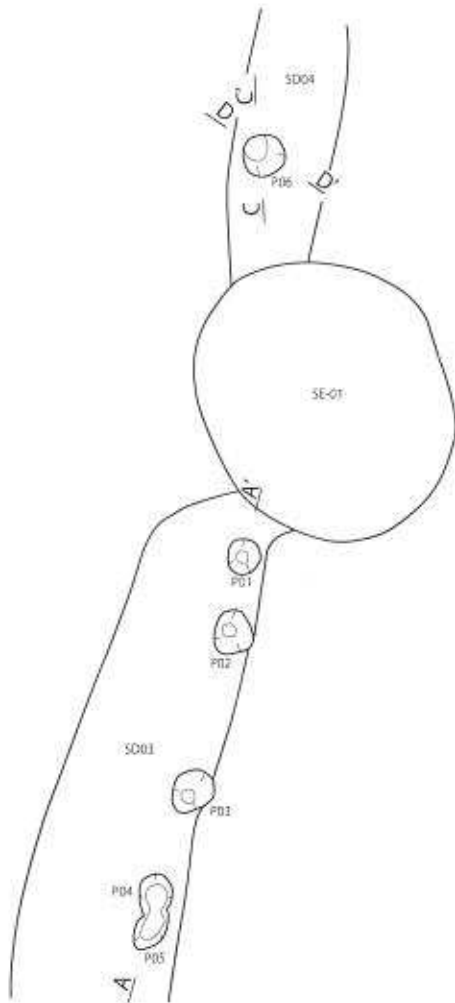
P-01～P07（第37図、第18表、遺構図版4・5）

曲輪IIにおいて、下表のピット7基を確認・調査した。いずれも遺物は無い。このうち、P01から05までは、いずれもSD-03内東よりに構築されており、80～120cmとほぼ等間隔に配置されている点から、楕円の可能性もある。SD-03・04検出時にこれらのピットは確認されなかったことから、これらのピットはSD-03・04よりも古い。ただし、これらのピットを列としてとらえると、SD-03・04と平行しており、時期差はあまりないものと考えられる。

第 18 表 ピット一覧表

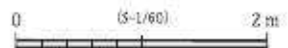
番号	位置	平面形	長径×短径	深さ	壁面	底面	覆土	備考
01	E08	円	0.3 × 0.28 m	0.15 m	緩斜	皿状	人為堆積	SD-03 内
02	E08	楕円	0.4 × 0.32 m	0.33 m	外傾	擂鉢状	人為堆積	SD-03 内
03	E08	楕円	0.4 × 0.35 m	0.23 m	緩斜	皿状	人為堆積	SD-03 内
04	E08	(楕円)	(0.4) × 0.3 m	0.2 m	緩斜	皿状	人為堆積	SD-03 内、P05 を切る
05	E08	(楕円)	(0.4) × 0.27 m	0.32 m	外傾	皿状	人為堆積	SD-03 内、P04 に切られる
06	E08	円	0.34 × 0.32 m	0.22 m	外傾	平坦	人為堆積	SD-04 内、東よりに傾く
07	E07	円	0.28 × 0.24	0.45 m	垂直	平坦	自然堆積	単体で存在

(根本)



== 埋蔵物 ==

- P01
- 1 3.44 0.2 灰褐色、灰白色粘土質土少量、結晶質・粘性あり。
 - 2 3.45 0.4 褐色、黄褐色粘土質土少量、結晶質・粘性あり。
- P02
- 1 3.01 0.2 灰褐色、黄褐色粘土質土少量、やや結晶質あり、粘性あり。
 - 2 3.02 4.0 褐色、灰白色粘土質土少量、結晶質・粘性あり。
- P03
- 1 3.04 1.6 褐色、灰白色粘土・黄褐色粘土質土少量、結晶質あり、粘性あり。
 - 2 3.05 2.4 灰白色・黄褐色、灰白色粘土質土少量、黄褐色粘土質土少量、結晶質・粘性あり。
 - 3 3.06 2.4 灰白色・黄褐色、灰白色粘土質土少量、結晶質・粘性あり。
- P04
- 1 2.87 0.4 黄褐色、粘土上・黄褐色粘土質土少量、結晶質あり。
- P05
- 1 3.04 4.4 褐色、黄褐色粘土質土少量、結晶質・粘性あり。
 - 2 3.05 6.0 褐色、黄褐色粘土質土少量、結晶質・粘性あり。
- P06
- 1 3.01 6.4 褐色、粘土質土、結晶質・粘性あり。
 - 2 3.02 3.7 灰白色・黄褐色、粘土上・黄褐色粘土質土、結晶質・粘性あり。
- P07
- 1 3.04 1.6 褐色、砂・灰白色粘土質土少量、結晶質あり、粘性あり。
 - 2 3.05 2.4 黄褐色、砂少量、結晶質あり、粘性あり。
 - 3 3.06 4.6 褐色、砂少量、結晶質・粘性あり。
 - 4 3.07 2.8 黄褐色、砂少量、結晶質・粘性あり。



第37図 P01 ~ 07

(2) 遺物

中世の出土遺物は、陶器15点(1073.6g)・土師質土器106点(4090.8g)・石製品4点(33748.5g)等であり、他に土製品(瓦)、金属製品、礫類(主に雲母片岩破片)の出土もあるが、詳細な時期を特定し難い。全体的に土師質土器が多く、その内訳では、鍋が98点(30763g)、播鉢3点(189.8g)、小皿5点(111.1g)と、鍋の割合が突出して多い(以下、土師質土器鍋、播鉢、小皿は、器種のみ略して記述)。

遺構毎の内訳では、曲輪Ⅰで陶器2点(209.2g)、小皿1点(7.7g)、曲輪Ⅰ土塁下検出のSD-01では陶器1点(139.7g)と、曲輪Ⅰの遺物が極めて少ない。SD-02では小皿1点(68.8g)、曲輪Ⅰ・Ⅱ間斜面部で陶器3点(110.4g)、鍋4点(165.8g)、石製品1点(195.0g)が出土しており、曲輪Ⅱでは陶器1点(31.7g)、鍋38点(664.3g)、播鉢3点(189.8g)、火鉢1点(30.2g)、石製品3点(33553.5g)、曲輪Ⅱ範囲に位置するSD-03からは陶器1点(73.5g)、鍋35点(1366.5g)、SD-04からは鍋10点(775.8g)、SE-01からは陶器2点(264.9g)、鍋5点(515.8g)が出土している。曲輪Ⅱに集中して鍋が出土していることが判る。曲輪Ⅱにおいては、試掘調査でも鍋の破片等が出土しており(鍋39点/571.1g、火鉢1点/75.6g)、これを加えると、さらに曲輪Ⅱの鍋の多さが際立つことになる。曲輪Ⅲでは、陶器3点(216.0g)、鍋6点(62.8g)、小皿3点(34.6g)が出土しているが、この範囲は攪乱、削平が進み、遺物の出土量は参考程度と捉えるべきであろう。なお、各曲輪確認面や中世遺構より、土師器17点(195.5g、曲輪Ⅰ[3点/111.3g]、SD-01[1点/11.9g]、曲輪Ⅱ[3点/52.5g]、曲輪Ⅲ[10点/19.8g]、須恵器3点(61.0g、曲輪Ⅰ・Ⅱ間斜面[2点/33.0g]、曲輪Ⅱ[1点/28.0g])の古代遺物が出土している。(数字は破片数カウント。)

以下、陶器、土器類、金属製品、石製品の順に、各遺物の様相を概観してみたい。

陶器、古瀬戸製品は、4点3個体(133.4g)が確認された。63はSD-03出土の双耳小壺ないし耳付水注であり、古瀬戸後期様式Ⅱ期(15世紀前半頃)に比定される。87・120・121はいずれも古瀬戸後期様式の製品で、折縁深皿、直縁大皿、卸目付大皿のような鉢類の破片である。87は曲輪Ⅱ採集資料。底内面は灰釉を刷毛塗りする。底外面遺存部の調整手法から脚部直近の破片であることが判る。後期様式Ⅲ～Ⅳ古期の製品とみられる。120、121は同一個体とみられ、内外面ともに灰釉を漬け掛けする。近現代陶磁器、硝子瓶類とともに一括で回収されたものであるが、これらが集中する曲輪Ⅰ・Ⅱ間斜面付近に帰属する可能性が考えられる。

陶器、常滑製品は甕、鉢類の小破片が計11点(940.2g)出土している。このうちSE-01出土の78は唯一口縁部の破片である。表面の焼成具合から長い口縁帯(欠損)を伴っていたものとみられ、7～8型式期(14世紀代)の甕とみられる。他の製品は時期の決め手に欠けるが、曲輪Ⅲ出土104は片口鉢Ⅱ類で14世紀以降。内面は平滑でよく使い込まれている。同じく105は肩部の張る形態の甕であり、硬質の胎土を考慮して13～14世紀前後と推定しておきたい。曲輪Ⅰ・Ⅱ間斜面出土108は外面に平行叩き状の押印を持つ還元した胎土の製品。古手(12～13世紀)の常滑製品であろうか。それ以外の資料は14～16世紀代の所産のものが主体とみられる。なお、破損後に研磨具として利用した資料は少なく、109の1点(内面及び側面を二次利用)に留まる。このほか、SI-02調査時に確認面から山茶碗系陶器(片口鉢Ⅰ類)が出土している(85)。緻密で還元した胎土を有し、瀬戸地域で13世紀中葉～後葉に生産されたものであろう。内面は平滑でよく使い込まれている。

土器製品では鍋類が多いのに対し、小皿(カワラケ)が非常に少ない。全体の形態が窺われる資料は、SD-02出土の62のみである。軟質の粉っぽい胎土で、磨耗が進んでいるが、底部には糸切り(右回転)とともに板状圧痕が認められる。体部は直線的に立ち上がり、口唇端部は尖り気味に収める。

播鉢類も少なく僅かに3点の確認である。曲輪Ⅱ出土96は体部上位の破損面に研磨を加えており、口縁破損後も鉢類として利用されていた可能性が高いものとみられる。

鍋類では、SD-03出土64の遺存状況が良好であり、全体の形状を窺い知ることができる。体部は内湾して立ち上がり、耳の位置もやや低い。15世紀後半代に多い逆台形の鍋と比べると、全体に器壁が薄く、小型で華奢な印象である。ほかの鍋破片にも器壁が薄手の資料が多い傾向がある。SD-03出土の65、66、67、68は、胎土・色調等が類似し同一個体の可能性がある資料で、器壁はやはり薄手である。全体の形状は64と類似するものと推測されよう。胎土混入鉱物は、石英、長石、金雲母が主であるが、特に雲母混入量には個体差が激しい。69、91は径2～3mmの金雲母を極めて多量に含んでいる。また、SD-04出土の75、76、77、曲輪Ⅱ出土の83には、角閃石、輝石が一定量含まれており、少数の白色骨針物質が認められる。鉢形態に近い独特の器形であることも考慮すれば、他の鍋類と産地が異なるものと考えられよう。

鍋類でも、SE-01出土の80・81（同一個体の可能性が高い）は器高が極端に浅い焙烙形で、16世紀末～17世紀初頭頃の年代に帰属するものとみられる。野田館使用の下限時期を抑える資料と捉えて良いであろう。

火鉢では、焼成がやや不良の軟質火鉢細片（98）が曲輪Ⅱより出土した。外面には横S字状の文様の一部が認められた。また、試掘調査時に曲輪Ⅱ地内から火鉢底部破片が1点出土している。胎土は98に類似する。

土製品は丸瓦（99）が1点出土している。小破片のため時期の特定が困難であり、古代の遺物である可能性もある。凸面は縦のヘラナデで調整し、凹面はヨコナデにより軽く調整する。玉縁部に近い部分の破片である。

金属製品は銅製品の破片1点（100）を確認した。薄い壁を持ち、「鈴」の破片のような形態のものであるが、時期、用途ともに特定し得ない。また、抜根作業に伴ってSD-02表土付近で出土した火消し壺状の鉄製品（125）は、曲輪Ⅱ採集の蓋（124）と規格が一致しており、その作りからも両者はセット関係にあると推定できる。遺物の形態からみて、近代段階の混入物である可能性が高い。

石製品は、臼2点（102・112）、砥石破片1点（101）、加工礫1点（122）である。石臼は2点出土しているが同一個体の破片である可能性がある。いずれも穀臼の上臼破片であり、石材は安山岩である。外面には斜め方向の工具痕が顕著に確認される。砥石は雲母片岩の破片を用いた簡易なもので、2ヶ所に砥面を認める。

加工礫（122）として扱った資料は、曲輪Ⅱ造成土中から出土した雲母片岩の大型礫である。表面には数か所の研磨痕が認められ、平滑な面が作り出されている。また、その研磨面の端部には規則的な傷状の削痕が並列して認められるが、これは砥石に残る痕跡と類似しており、研磨面を砥面に二次利用している（あるいは、研磨面が砥面そのものである）可能性が考えられる。礫の二側縁は平行する平滑な面であるが、これは加工面ではなく、片岩の節理に沿った剥離痕と判断される。ただし、その面にも剥離後に僅かな削痕を認める部分があり、軽微な調整を行った可能性はあろう。これらとは別の位置に、側縁部に長さ10cm弱に渡って研磨痕が認められる。斜傾する側縁部の一部を工具で削り取った後、丁寧な研磨を加えたものであり、側縁部の調整を意図した加工である可能性が高い。背面側は剥離面のみで、加工痕は確認できなかった。関連して、SD-04出土の雲母片岩大型礫（123）を図示したが、こちらには加工痕跡は確認できない。

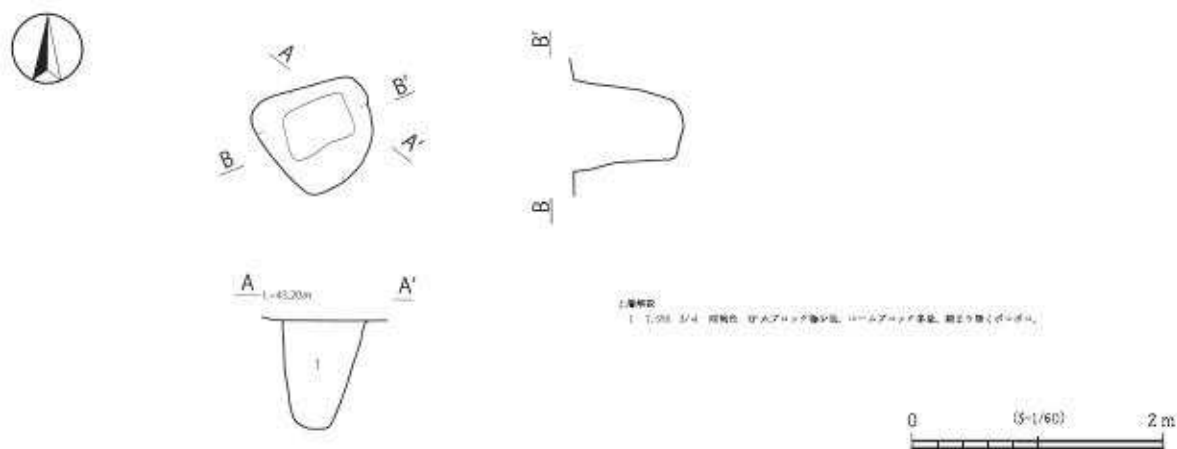
このように遺物の所産年代は、少数の古瀬戸製品が15世紀代に帰属するものの、土器鍋類は内湾傾向が強い形態や、華奢な作りから、より下の時期の特徴を示しているように思われる。ただし調査例の多い県南各地域の鍋とは口縁部などの細部形態が異なっており、比較資料が充実しているとは言い難い。現段階で鍋の具体的な時期に言及することは難しく、概ね16世紀代の製品が主体ではないかと予察するに留める。また、遺構群の下限はSE-01出土鍋から17世紀初頭頃と考えられるが、同タイプの鍋が極めて少なく、野田館使用時期の中心はより古い段階と見るべきであろう。従って、現段階では16世紀代のある段階に、本館跡の中心時期があったものと考えておきたい。

（根本）

第5節 中世以降 (第38図、第19表)

中世以降の遺構は、下表の土坑1基だけである。形状や覆土の様子から、農作物の貯蔵用に掘られたものであると判断される。遺物としては、曲輪I西側の斜面部に、上方より投棄されたような状態で陶磁器類やガラス瓶が散布していた。地権者への聞き取りによると、曲輪Iの北西側には、昭和20年代末ごろ、元々柿岡の支所である地震観測所の建物（6畳一間ぐらい）があり、ある一家がしばらく居住していたという。そして曲輪Iの内部は一面の芋畑であったといい、今回確認された遺構との整合性をみせている。

(小野)



第38図 SK-01

第19表 中世以降土坑一覧表

番号	位置	長軸(径)方向	平面形	長軸×短軸	深さ	壁面	底面	覆土	遺物
01	F 13	N-61°-E	不正形(長方形)	0.9×0.8 m	0.8 m	垂直	平坦	人為堆積	無

第6節 遺構外出土遺物 (第39図、第20表、遺物図版16)

ここでは、表面採集遺物を掲載する。



第39図 遺構外出土遺物

第20表 遺構外出土遺物観察表

番号	種別・機種	口径	器高	底径	胎土	色調	特徴	備考	位置
120	陶器大皿類	-	-	-	精製された陶土	5GY7/1 明オリブ灰色	内外面灰釉施箱。下端部内外面露胎。	PL16	表採
121	陶器大皿類	-	-	-	精製された陶土	2.5GY7/1 明オリブ灰色	内外面灰釉施箱。下端部内面露胎。	PL16	表採

第6章 総括

第1節 古墳時代

今回の発掘により調査された古墳時代に属する2軒の住居跡から出土した遺物の中で、特に床面直上から集中して出土した土器は、いずれも住居で実際に使用されたと考えられる。それらの特徴から、SI-01の時期を6世紀中葉、SI-02の時期を7世紀初頭に位置づけることが妥当であると判断される。

SI-01の13の高坏、19の甕、22の石の出土状態(PL6)を見ると、『常陸国風土記』の「那賀郡茨城郷」に見える「即盛淨杯設壇安置一夜之間已滿杯中更易瓮而置之」が想起される。この記事は、当時のこの地域で行われていた祭祀の一形態を示すものと思われ、これらの遺物の出土状態が記事の内容と近似していることから、これらはこの住居跡で行われた祭祀の痕跡であると推定される。この甕は、床面直上から破片がまとまって出土しているにもかかわらず、接合の結果は胴部から口縁部にかけての半分ほどの破片が失われていた。祭祀の前から壊れていたか、あるいは祭祀が終わってから何らかの理由により一部の破片を持ち去ったのではないかと推測される。高坏は焼成が不十分で、実用に供されたものとは考えにくい。おそらく、形を保つ程度の焼成しか行われなかったのであろう。ここで行われた祭祀が、住居を廃棄する際の祭祀である可能性は高いと考えられ、その場合には完全な土器を使用しなかったものか、儀礼に使用した土器の破片を新しい土地に移る際に何らかの形態で利用したものか、いずれにせよ可能性として指摘したい。

2軒の住居跡の覆土中から出土した遺物の年代は7世紀末から8世紀前半であることから、住居跡の時期と100年ほどの差を認めることができる。いずれの住居跡も覆土は自然堆積であるから、自然堆積の場合は、完全に埋没するまでに100年以上かかったことが分かる。同時に、2軒の住居跡の近辺に、7世紀末から8世紀前半の住居跡が存在することを指摘できる。

(根本)

第2節 中・近世

1 遺構・遺物の特徴と時期区分

(1) 遺構・遺物

土層断面の観察から、やや丁寧さに欠ける、斜面の傾斜に沿って投げ込まれたような盛土造成をしている曲輪Ⅱ西側の切岸は、多数の片岩の混入も含めてこの部分の構築が急であった可能性を指摘できる。また、出土遺物の特徴として、国産や貿易陶磁器、カワラケなどがごく少量である一方、内耳鍋や穀臼などの生活用具が多い点と、その多くが曲輪Ⅱ周辺からの出土であることがあげられる。これらの点は、陣城という性格を示すものとして理解される。

(2) 時期区分

今回の発掘調査で得られた、遺構の重複関係や遺物の年代観を基に、中世から近世初頭にかけての野田館(南館)の動向を時期区分すると、以下の4期に分けられる。

0期 城館構築に先行する時期。13世紀から14世紀。

常滑甕(6～7期)、13世紀中～後期の瀬戸の山茶碗、中世の可能性のある瓦などの細片資料のみで、明確な遺構は検出されていない。曲輪ⅠからⅢにかけて、盛土層中や表土から複数出土した雲母片岩は、古墳の石室、中世の供養塔あるいは寺院などの礎盤等、複数の用途が想定できるものの、銘文や加工痕跡に乏しく、いずれ

であるのかを明確にすることはできない(註1)。ただし、城館の築城時に破壊、投棄されている点は明確である。なお、第2章でも触れたが、当地が定光寺に関連した寺院跡との地元伝承がある点と、現在定光寺に所在する観音堂およびそこに安置されていた中世小松氏寄進とされる十一面観音像との関わりが注目される点である。

1-1期 野田館(南館)築城時期 16世紀

曲輪Ⅰ西側に構築された横堀SD-01と、その直上に築かれた土塁、曲輪Ⅱ西側の盛土による切岸、曲輪Ⅱ東側に位置するSD-03、04、SE-01、P01～07、SK-03、西側に位置するSK-04が該当する。調査区外に存在する本城館跡の様々な土木構築物についても、この時期に主要部が形成されていた可能性が想定される。

遺物の様相としては、内耳鍋が深手のものが多く16世紀代を示す他、伝世品と推定される15世紀後半の古瀬戸小壺や大皿類などが僅かながら出土している。

1-2期 大規模改修の時期 16世紀

曲輪Ⅰ西側に構築された横堀SD-02と、SD-01及び直上の土塁を埋め戻して構築された土塁と切岸が該当する。1-1期に対して、明確に後出すると判断される遺構はこの二つのみである。しかし、SD-02と北の塹堀との関係などから、当該期に調査区内外に位置する土木構築物も含めた大規模な改修が為された可能性もある。

遺物の様相としては、1-1期のものと重複しており、明確な時期差は認められない。

2期 廃城までの時期。16世紀後半以降?から17世紀初頭。

16世紀後半以降17世紀初頭を下限とする浅手の鍋類や、17世紀初頭下限のカワラケの存在などの細片資料のみで、明確な遺構は検出されていない。当該期以降、本城館跡における人びとの活動痕跡は近代に至るまで殆どみられない点から、廃城となりそして山林化したものと思われる。

(3) 城館内における曲輪群の位置付け

曲輪Ⅱの位置付けとしては、水貯め施設SE-01や導水施設と推定されるSD-04と土堤の存在、調理器具である内耳鍋が98点と最も多く出土している点、主な曲輪群で最も平坦な空間である点、北を櫓台、西を曲輪Ⅰとの間の切岸、南を土塁に囲まれた比較的安全な空間である点などから、築城に従事した人々や警備の駐屯部隊の生活空間であったとの想定が可能であろう。そしてそれは、敵地に近い最前線における陣城の構築方法としても興味深い事例となるのではないかと考えられる。また、下方の曲輪Ⅲからの登城ルート、北側の塹堀からSD-02内を通るルートがこの曲輪内で合流し、それらのルートに対して北の櫓台より横矢が掛けられ、西の曲輪Ⅰ上からも攻撃が可能になっている事から、全体が完成した暁には、侵入した敵に対する屠り場的な性格を持っていた可能性も十分に考えられるところである。

その一方で、立地からすると主郭であると思われる曲輪Ⅰは、周辺の防御施設や内部の削平化が緩やかであり、出土遺物が殆ど見られない点などを加味すると、未完成か、あるいはここを使用すると想定される、上級階層の使用が殆どなかった可能性が考えられる。本城館跡全体を見ても、儀礼に用いられるカワラケや威信材である国産や輸入陶磁器の出土量が総じて少ない点からも、それは裏付けられるであろう。

曲輪Ⅲについては、残存状態が不良でありその位置付けは難しいが、当城館跡の基本的な構想が上下三段の曲輪による段階的な防御にあったとすると、前衛的な防御空間であると同時に、駐屯する軍兵が出撃する空間を兼ねていたと想定される。

いずれにせよ、野田館(南館)は完成に至る以前に築城工事は中断されている可能性が高い。

2 文献資料からの考察

次に、野田館（南館）の主体時期が遺構、遺物から戦国中末期と思われることから、当該期の石岡・八郷地域を中心とした政治状況をみてみたい。

永禄年間（1558～1570）ごろの石岡周辺の政治状況は、後北条氏の後ろ盾を得て勢力拡大を目指す小田氏治と、上杉謙信の越山を頼みながら、それと対抗する佐竹・大掾氏らの動きといえる（第21表）。

府中の大掾氏は、隣接する小田氏治との抗争上、佐竹氏を頼り、永禄7年（1564）、佐竹義昭は、弟の乙寿丸を大掾貞国の養子に入れて昌幹と名乗らせ、自身も大掾氏の居城府中城に入り、小田氏との対峙を続けていた。翌年、義昭が死去すると養子の件は立ち消えになるが、義昭の後継者義重は、上杉謙信と協力して同9年、北郡（旧八郷町域）をほぼ制圧し、南東部の片野城に客将太田資正、中央部の柿岡城にその2男梶原政景を入れ、小田氏への抑えとした（註2）。

この抗争の課程で、小田一族で北郡北西部の領主上曾氏俊が討死し、同南西部の領主小幡氏も佐竹氏に降伏。中央部の二条山館主の路川氏、柿岡城の柿岡氏、数俵砦の月岡氏などは居館を追われ、或いは降伏し、長らく彼ら小田一族の支配した北郡は、外部からの新しい支配者に従属することとなった。

野田館の小松氏の動向は不明確であるが、当時佐竹方として行動していた府中大掾氏の一族である事（註3）、府中からの瓦谷街道が北郡に入る地点である瓦谷の領主であった事、佐竹氏の秋田滅転封まで元の居館に在城していた事などから、いち早く上杉・佐竹方に与していたものと思われる。

また、北東に位置する一大勢力である宍戸氏については、永禄5年ごろ小田氏治が後北条氏と結び、これに怒った上杉・佐竹らの連合軍により小田城が攻め落とされた際、小田の有力支族であった同氏は佐竹方に与して同城の攻撃に参加しており、以後も小田氏と行動を共にすることなく佐竹方の一員として各地を転戦している（友部町1990、岩間町2000）。このことから、野田館のある瓦谷と東方で接している真家、泉付近を西境とする広大な宍戸荘を支配する宍戸氏は、この頃佐竹方の勢力圏として理解される。また、先述の通り瓦谷街道を通じて南東に接する大掾氏の場合は、その本拠地府中に佐竹義昭自身が出張して小田氏に対峙していた。

3 野田館（南館）の性格と位置付け

今回調査された野田館跡（南館）は、特に西側から南側にかけて嚴重な縄張りが施されている点や、一部未完成と思われる点、近世以降城館としての伝承がなく、単なる山として認識されていた点、尾根続きの東方の防備が薄い点、当地域の在地領主層の築城技術と比較して技巧的な縄張りが施されている点、出土遺物の様相が16世紀代を中心としている点などから、永禄年中の小田・佐竹間の北郡を巡る緊張関係の中で、おそらく東方の勢力である佐竹氏の手による北郡進出のための前哨基地的な役割を担った城館と推定される。

北西1.5kmには路川氏の二条山館、西側2.5kmには5ヵ城を持ち、小田氏治の母方の実家ともいう上曾氏の支配領域、南2kmには片野城主八代持監の館とも伝わる片岡館、南西3kmには柿岡氏の柿岡城など、小田一族の拠点が指呼の距離であり、これらに対峙することが主目的であったと理解される（第5図、



第40図 曲輪Iより西方の猿壁城を望む
（中央中腹のピーク部分）

第2表)。なかでも、曲輪Ⅰの西側土塁上から望むと、真正面の足尾山の中腹に、烏帽子のような特徴的な山容を見せる猿壁城は、上曾氏の詰めの城と考えられており、この城を意識している可能性が高いと思われる（第40図、註4）。

第21表 永禄年間頃の政治情勢

その際、対岸の野田北館に居住していたと思われる小松氏との関係が注目される点であるが、具体的な推移を示す史料はなく詳細は不明である。この台地に対する同氏の利用状況は今一つ詳らかではないものの、居館のすぐ庭先の台地を佐竹方が接収し、そこにある程度の破壊を加えながら南館の築城がなされたことは調査成果からも明らかである。また、南館北側には大規模な土塁こそみられないものの、高さ4～5mに及ぶ切岸を設

年代	事項
永禄4年(1561)	3月、上杉謙信の小田原攻めに、佐竹・小田氏ら常陸の大半の武将も参陣。
同5年	2月、上杉謙信、佐竹義昭らと後北条方の結城晴朝、小山秀綱を降伏させる。7月、小田氏治、後北条氏に帰属。10月、佐竹義昭、小田支族の宍戸氏領境に出兵し、同氏を圧迫（宍戸氏の小田からの離反）。
同6年	2月、三村合戦。大掾貞国は小田氏治に敗北。
同7年	正月、第二次国府台合戦で岩槻太田・安房里見氏ら後北条氏に敗北。後詰に出撃した上杉・佐竹連合軍が小田城を落とす。小田氏治は土浦城、木田余城に入り抵抗。5月、親上杉派の太田資正と二男梶原政景が、親北条派の長男氏資に岩槻城より追放される。6月、大掾慶幹、木田余攻めの陣中に没。貞国継ぐ。貞国の後見を名目に、佐竹義昭は府中に入り、弟昌幹を貞国の養子とする。7月、小田城を佐竹氏預かる。この年、上曾城主上曾氏俊が討死する。
同8年	この年前後に、佐竹氏、真壁久幹に柿岡城を与える。11月、佐竹義昭、府中で死去。12月、小田氏治、小田城を奪還。
同9年	2月、小田氏治、上杉謙信に降伏。この頃、八郷周辺の小田領が佐竹方に割譲され、佐竹氏客将の太田資正、梶原政景父子が片野城と柿岡城に入城。6月、佐竹方の大掾昌幹を追放し、大掾貞国が復権する。
同12年	正月、佐竹義重、太田、真壁らの軍勢が小田氏北方の拠点海老ヶ島城を攻略。閏5月、越相同盟成立（この頃より、佐竹氏ら北関東の諸将は上杉方より自立）。11月、手道坂合戦。小田氏治、大軍を率いて片野城に迫るも、太田資正父子、真壁氏により撃破。小田城も失陥し、小田氏の退勢が決定的となる。
同13年(元亀元年)	太田資正、小田城主となる。梶原政景、片野城に移り、柿岡城には真壁房幹が入る。数年後、資正は梶原政景と交代し、片野城に戻る。

〔八郷町史〕〔石岡市史〕〔岩間町史〕〔友部町史〕などを基に構成

け、櫓台が睨みを利かせている点、その一方で連絡通路としての利用が推定される堅堀がこの方向に開口している点などから、両者は一定の緊張を孕んだ協力関係であったとみることも可能であろう。

そして、南館の完成に至る以前に戦線の移動、或いは佐竹・小田間の政治的・軍事的緊張関係が消失したと考えられ、比較的短期間のみの使用であったことが、一部に未完成部分を残す点や城館に関する伝承の欠如した理由であると考えられる（註5）。

この後、小松氏が北館を廃止する17世紀初頭まで、南館をどのように利用したのかは詳らかではないが、当該期までの遺物が僅かながら認められることは、曲輪Ⅱを中心に何らかの関与を持っていた可能性がある。

そして、この時期以降の活動痕跡が遺構・遺物からも不明瞭になる点は、南館が小松氏と密接な関係があったことを示すものとして理解される。

また、館跡が南側の道路を押えるように構築されている事や、虎口がここに開かれていた可能性が高い点などから見ても、この道路が戦国時代における重要な街道であった可能性が高いと思われる（註6）。現在私道となっているこの道を東方に直進し、尾根を越えると部原地区に出る。ここから宍戸領西端の真家までは、厚茂峠を越えて僅か1km余であり、永禄5～9年ごろの政治状況下では、まさに佐竹方と小田方両勢力の結節点といえよう。当館跡の東方の防御施設が極めて薄い点、築城に際しての優先順位が最も低かったと推定される点は、背後は指呼の距離で味方の宍戸氏の勢力圏であることにその理由があるとみられる。

なお、南関東の戦国期城郭の築城時期と曲輪内土塁の関係において、時代が下がるにつれ防壁上必要な部分にのみ土塁を盛り、塁壁の高さが十分確保されている方向にはあえて盛らない傾向がある点が指摘されており（八郷町2005）、旧八郷町域においても、猿壁城や吉生城、数俵城などにそれを見ることが出来る。これは戦乱の激化する中で合理的思考が働いたとの分析もある（前同書）が、急造されたと思われる野田館（南館）跡においても同様な傾向を看取することができるのではないだろうか。

なお、府中方面から北郡に侵入するルートには、龍神山麓から林地区をぬけて柿岡に至る現在の県道7号線や、染谷から鬼越峠を越えて根小屋・片野に入る街道（註7）など、旧八郷町域の南東方向からのものがある。この一帯には、片岡館、片野城、観音寺城、権現山城、川又要害、半田砦など、当時は小田一族のものと考えられる城館群が比較的密に分布している上に（第3図・註8）、大掾氏の去就そのものが不穏な状況（註9）であり、佐竹方の北郡進出ルートとしては、自身の勢力圏にも近く、宍戸氏などの支援を受けやすい東方の瓦谷街道や野田館方面が主であった可能性が考えられる。

今回、新発見の城館跡に対して全域の地形測量と、城館中心部を東西に貫くいわば巨大なトレンチともいえる発掘調査がなされたことにより、多くの成果を得られた。勿論、部分的な調査面積と時間の制約もあり、十分な現地調査と整理分析には至らなかった点もあるが、伝世する文献史料の乏しさから不明な点が多かった、八郷盆地を巡る佐竹・小田間の争奪戦の様相の一端が明らかにできた意義は大きいと思われる。そしてそれは、少ない文献史料を補い歴史の解明を試みる手段としての、中世考古学の果たす大きな役割と可能性を示すものといえよう。

（小野）

（註1）第2章でも触れたが、雲照寺に存在する野田小松本家歴代の自然石型の墓標は、銘文の判読できる限りでは江戸時代の所産が大部分であるが、その使用石材については、今回出土したものと共通性が見られる。また、野田北館の南側台地先端部にある、小松一族数家の現代まで続く墓地においても、江戸時代のものには同様の石材を用いた墓標が数多く造立されており、同氏においてはこの石塔が代々意味合いを持つものであったと考えられる。同氏以外にも、この地域には片岩の墓標あるいは供養塔は一定量分布しており、今回出土したものが仮に中世の供養塔であるならば、その初現資料となりうる可能性もある。筑波南麓では、小田氏所縁の寺院墓地に造立年代不詳の「お羽黒様」「立石様」という立石が存在し、その周囲に14世紀から16世紀の土壙墓が密集して造営されている例（高野2002）が報告されており、この立石が総供養塔的な性格を持つ可能性も想定される。

八郷周辺の中世社会においては、砂岩製やいわゆる筑波石という花崗岩製の五輪塔が数多く造立されており、野田館（南館）の曲輪Ⅱ周辺にも昭和9年ごろに近隣から集積されたという五輪塔の部材が幾つか見られる。また、南西5kmの片野城においては、16世紀後半から17世紀初頭を中心とする墓壙多数と共に花崗岩製の五輪塔と宝篋印塔が複数出土している（佐々木・小野ほか2006）。今回は時間の制約もあり、この点に踏み込んだ分析はできないが、筑波石の五輪塔と片岩を用いた板碑型の石塔の分布圏や造立階層の検討については、興味深いテーマとして提示し、あわせて今後の課題としておきたい。

（註2）太田三楽父子は、この城を拠点に小田氏治を追い詰め、永禄12年（1569）手道坂の合戦で、片野城奪還を目指す氏治の軍勢を真壁氏と共に撃破。敗走する氏治を追って小田城をも奪い取り、以後小田氏は急速に没落していく。

（註3）第2章第4節参照。

（註4）『小田軍記』によると、上曾氏俊、小幡道三はこの城に拠って佐竹氏に抵抗し、氏俊は討死したとされる。

（註5）付言すると、二条山館についても、低地を挟み猿壁城と西対しており、その立地や4重の横堀を巡らす縄張りなどから、元々の路川氏の館を佐竹方が接収して改修した可能性がある。なお、路川氏は宍戸氏の配下で、佐竹氏に追われてこの地に逃れ、さらに足尾山麓路沢に引退したという（関2000）。

（註6）地権者の話によると、現在細い暇道と一部拡幅された私道となっている館跡南側の道は、元来馬車が通れるぐらいの幅があったという。西から来ると、上野田の中心から墓地の下を通り、下段土塁脇の納屋の横から現行の道路に出、民家の前を通過して上流の溜池を通り、現在豊後荘病院のある尾根を越えて部原に出たといい、4、50年前までは使用していたという。

- (註7) 国府から柴谷を経て、龍神山と鬼越山の間の鬼越峠を越え、根小屋・向町・須釜へと続くルートは、当時の本街道であった(関1989)。
- (註8) 片野城は、地形的要因も加味する必要もあるが、低地に面した西方よりも尾根続きの東方と、現在の県道7号線及び註6の鬼越峠ルートが通る北方と南方に対する警戒が厳重であり、府中方面からの侵攻に備えたものという見方が可能である。これについては、太田氏の大改修の可能性も高いが、それ以前に小田方が府中方面に対して設けたものではないかという説もある(茨城城郭研究会2006)。
- (註9) 佐竹義昭の死後、すぐに反佐竹方の大掾氏家中が盛り返し、大掾昌幹を追放した一件に見られるように、大掾家中は決して親佐竹一本ではなかった(江原2001)。この点は、大掾氏の宿敵である水戸の江戸氏との長年にわたる抗争と、江戸氏が佐竹氏と「一家同位」の関係である点なども絡み、合従連衡の見本を見るようである。
- いずれにせよ、統一政権の保証の下に常陸一円支配が佐竹氏に委ねられると、このような存在形態は容認されず、天正18年(1590)の大掾氏滅亡へと繋がってゆく。

《参考文献》

- 糸賀茂雄 1997 「中世国府の盛衰と大掾氏」(『常府石岡の歴史-ひたちのみやこ1300年の物語』・石岡市教育委員会)
- 茨城城郭研究会 2006 『図説茨城の城郭』 国書刊行会
- 茨城県考古学協会中世シンポジウム実行委員会 2011 『茨城中世考古学の最前線-編年と基準資料-』
- 茨城県立歴史館 2007 『中世東国の内海世界-震ヶ浦・筑波山・利根川-』 高志書院
- 茨城県立歴史館 2010 『茨城県立歴史館シンポジウム報告書 中世常陸・両総地域の諸相-発見された井田文書-』
- 岩間町史編さん委員会 2002 『岩間町史』 岩間町
- 江原忠昭 2001 「常陸大掾の一族(その一〇)」(『郷土文化』第四十二号・茨城県郷土文化研究会)
- 小杉山大輔 曾根俊雄 2012 『市内遺跡調査報告書第7集』 石岡市教育委員会
- 佐々木藤雄 小杉山大輔 小野麻人ほか 2006 『石岡市片野城跡-NTTドコモ移動無線基地局建設に伴う発掘調査報告書-』 株式会社東京航業研究所
- 生涯学習スポーツ文化課・八王子郷土資料館 2012 『平成24年度特別展 八王子城』
- 関肇 1989 「字切図小字名に見る、中世城郭・館の様相」(『郷土文化』第三十九号・茨城県郷土文化研究会)
- 関肇 1999 「手葉井坂合戦 知られざる小田・佐竹攻防戦跡」(『郷土文化』第四十号・茨城県郷土文化研究会)
- 関肇 2000 『八郷の中世城館』 八郷町教育委員会生涯学習課
- 関肇 2003 『八郷町の地名』 八郷町教育委員会生涯学習課
- 関肇 2007 「八郷地方における中世戦国領主 小田・佐竹の武将の攻防と葛藤」(『郷土文化』第四十八号・茨城県郷土文化研究会)
- 曾根俊雄 福山俊彰ほか 2012 『東成井山ノ神遺跡-県営畑地帯総合整備事業(東成井西部地区)に伴う発掘調査-』 石岡市教育委員会 株式会社ノガミ
- 高野節夫 2002 『西平塚梨ノ木遺跡』 葛城一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書V 茨城県教育財団埋蔵文化財調査報告第196集 茨城県教育財団
- 友部町史編さん委員会 1990 『友部町史』 友部町
- 根本康弘 浅井哲也 1989 『西郷遺跡 南丘遺跡 長峰遺跡 数光遺跡 宮塚遺跡 右初館跡 内路地台遺跡 一般国道125号道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書』 茨城県教育財団文化財調査報告第64集 茨城県教育財団
- 芳賀友博 須賀川正一 杉澤季展 2009 『小幡城跡 前新堀遺跡 前新堀B遺跡 諏訪山塚群 藤山塚』 東関東自動車道水戸線(茨城IC～茨城JCT)建設事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ 茨城県教育財団文化財調査報告第314集・財団法人茨城県教育財団
- 宮崎報恩会 1976 『新編常陸国誌』 齋書房
- 八郷町史編さん委員会 2005 『八郷町史』 八郷町
- 矢島秀雄 2007 「八郷町瓦谷雲照寺の近世初頭における再興諸説について」(『茨城史林』第二十七号・茨城地方史研究会)

写真図版



土塁土層断面（東から）



土塁表土除去後状況（北東から）

PL2



SD-01・02 完掘状況 (北から)



SD-01・02 土層断面 (A～A')



曲輪Ⅱ盛土土層断面 (A~A')



曲輪Ⅱ盛土土層断面 (B~B')

PL4



調査前風景（西から）



調査前風景（東から）



曲輪Ⅱ完掘状況（西から）



曲輪Ⅱ東端遺構完掘状況（北から）



曲輪Ⅰ・Ⅱ間斜面表土除去後状況（北から）



SD-01・02完掘状況（南から）



SD-02土層断面（B～B'）



SD-02土層断面（C～C'）



SD-03・P01～05 完掘状況（北から）



SD-04・P06 完掘状況（南から）



SE-01 完掘状況（北西から）



SK-03 完掘状況（南から）



SK-04 完掘状況（北西から）



SD-04 礫出土状況（南から）



曲輪Ⅱ西端盛土加工礫出土状況（南から）



P07 完掘状況（南から）

PL6



SI-01 完掘状況（東から）



SI-01 土層断面（東から）



SI-01 遺物出土状況（東から）



SI-01 祭祀遺物出土状況（西から）



SI-02 完掘状況（東から）



SI-02 遺物出土状況（南から）



SI-02 遺物出土状況（南から）



作業風景（南から）



試掘 113



試掘 114



試掘 115



試掘 126



縄文土器 117・118・119



SI-01-11



SI-01-18

PL8



SI-01-13



SI-01-19



SI-01-21



SI-01-16



SI-01-22



SI-01- 1



SI-01-12



SI-02-24



SI-02-25



SI-02-26



SI-02-27



SI-02-30



SI-02-31



SI-02-41



SI-02-36

PL10



SI-02-45



SI-02-37



SI-02-38



SI-02-39



SI-02-40



SI-02-47



SI-02-55



SI-02-60



SI-02-37



SI-02-58



SI-01-59

PL12



SI-02-48



SI-02-52



SI-02-33



SI-02-34



SI-02-57



SD-01-61



SD-02-62



SD-03-63



SD-03-64





SD-03-65



SD-03-66



SD-03-67



SD-03-68



SD-03-72



SD-04-74



PL14



SD-04-123



SE-01-78



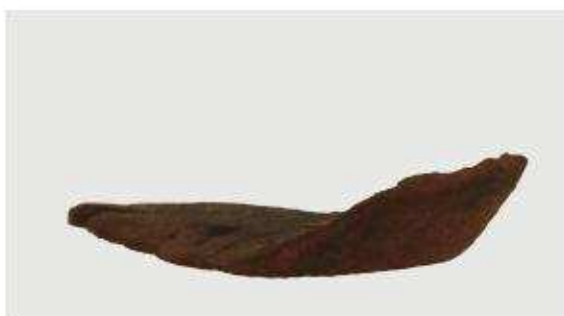
SE-01-79



SE-01-80



SE-01-81



SE-01-82



曲輪 I -84



曲輪 I -86



曲輪 II -87



曲輪 II -89



曲輪Ⅱ -95



曲輪Ⅱ -97



曲輪Ⅱ -102



曲輪Ⅱ -122



曲輪Ⅱ -100



曲輪Ⅲ -104



曲輪Ⅲ -107



曲輪Ⅰ・Ⅱ間斜面 -109



曲輪Ⅰ・Ⅱ間斜面 -124





曲輪 I・II間斜面 -125



曲輪 I・II間斜面 -112



表採 120・121



曲輪 I・II間斜面表採遺物



- ① 陽刻 肩「Cascade Beer」、底部「Ⅲ ㊦ 2」、
- ② 陽刻 肩「NIPPON BEER KOSEN CO. LTD」、底部「Ⅲ」、
- ③ 陽刻 底部「3」、 ④ 陽刻 胴部下端「350CC」、 ⑤ 陽刻 底部「2」、
- ⑥ 陽刻 底部「M」、 ⑦ 陽刻 底部「千代花」、⑧ 陽刻 胴部下端「セーヌ」、底部「K」、
- ⑩ 陽刻 底部「L. マーク」、 ⑬ 陽刻 底部「M」、底部外縁「K」

抄 録

ふりがな	のだやかたあと							
書名	野田館跡							
副書名	農村交流基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査							
シリーズ名	石岡市埋蔵文化財調査報告書							
編著者名	曾根俊雄 小野麻人 根本康弘							
編集機関	関東文化財振興会株式会社 〒308-0846 茨城県筑西市布川1012							
発行機関	石岡市教育委員会							
発行年月日	西暦2013(平成25)年3月15日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
野田館跡	茨城県石岡市 瓦谷761-1ほか	08463	100	36° 15′ 45″	140° 12′ 46″	20120822 ～ 20121129	2,590㎡	農村交流基盤 整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物				
野田館跡	集落跡 城館跡	古墳時代 中世 中世以降	竪穴住居跡 堀跡 土坑 溝跡 ピット 土塁 土坑	古墳後期(土師器・土製品〈支脚〉) 奈良・平安時代(土師器・須恵器) 土器(土鍋・かわらけ) 陶器(壺・甕・鉢) 石製品(石臼) 不明銅製品 鉄製品 ガラスビン				
要約	古墳時代後期の集落跡と中世の館跡が確認された。館跡は、堀跡や土塁が確認され、地山の掘削や斜面への盛土による大規模な造成が行われたことが明らかになった。							

石岡市埋蔵文化財調査報告書	
野田館跡	
- 農村交流基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査 -	
発行	2013(平成25)年3月15日
編集・発行	石岡市教育委員会 〒 315-0195 茨城県石岡市柿岡5680-1 Tel. 0299-43-1111
	関東文化財振興会株式会社 〒308-0846 茨城県筑西市布川1012
印刷	山三印刷株式会社 〒311-4153 茨城県水戸市河和田町4433-33 Tel. 029-252-8481